宮城県文化財調査報告書第 149 集

上 野 館 跡 (Ⅲ)

平成 3 年度発掘調査概報

平 成 4 年 3 月

宮 城 県 教 育 委 員 会

序　　文

近年、各自治体が歴史と風土に根ざした地域の活性化を推進するために、郷土にある文化財を再認識し、それを地域づくりの拠点として整備し活用していこうといった考え方を持つところが多くなってきております。

宮城県としても本間知事の提唱により平成2年度から「われらみやぎの東北学おこし事業」を実施するなど、国際化の推進や産業経済の発展の基盤となる歴史と風土に根ざした東北の「地域らしさ」の確立に努め、21世紀に向けた新たな県土づくりに取り組んでいるところであります。

一方、近年の本県における各種開発事業の活発化には目を見張るものがあります。道路建設や圃場整備など生活関連事業をはじめ、ゴルフ場などの大規模なレジャー施設や工場団地・住宅団地の進出が著しく、これらの開発によって埋蔵文化財が破壊の危機にさらされる場合が多くなってきています。

改めて申すまでもなく、埋蔵文化財は文献などに記録されていない地域の歴史を即物的に解明することが出来る貴重な歴史資料であるばかりでなく、その地域に住んでいる人々にとって最も親しみやすく、精神的なよすがとなるものであります。まさに「東北学」を考える上での最も基本となる資料と言えます。

しかし、埋蔵文化財は土地との関連で保存されてきたものであるため、各種開発事業によって絶えず破壊・消滅のおそれにさらされております。当教育委員会としては開発関係機関等との協議を通してこのような貴重な文化財を保存し、後世に伝えることに努めているところであります。

本書は開発関係機関等との協議・調整に基づき平成3年度に当教育委員会が行った発掘調査の成果を収録したものであります。これらの成果が地域の歴史的解明と文化財保護思想の高揚のため役立てていただければ幸いです。

最後に、協議にあたり各遺跡の保護調整に理解を示され、調査にあたっても多大なご協力・ご支援をいただきました関係機関各位、および発掘作業にあたられた皆様に深く感謝申し上げる次第です。

平成4年3月

宮城県教育委員会教育長　　**大立目　謙　直**

目　　次

序　　文
1. はじめに 1
2. 調査の方法と経過 3
3. 調査成果の概要 4
(1)　層序 4
(2)　発見された遺構と遺物 11
礎石建物跡 11
掘立柱建物跡 12
柱穴列 14
池跡 14
その他の遺構と出土遺物 21
1)　井戸跡 21
2)　粘土貼遺構 22
3)　土壙 22
4)　溝跡 26
5)　石列 26
6)　整地地業 27
西区 27
東区 31
4. まとめ 45
(1)遺構について 45
(2)遺物について 49
参考文献 51
写真図版 53

例　　言

1. 本書は宮城県教育庁が計画した宮城県松山高等学校校舎改築に伴う、上野（うわの）館跡第５次発掘調査の概要をまとめたものである。
2. 調査は宮城県教育委員会が主体となり、文化財保護課が担当した。
3. 発掘調査および整理・概報作成にあたっては、次の方々から指導・助言を賜った。
   飯淵康一氏（東北大学助教授）　本田泰貴氏（東北陶磁文化館）
4. 本書における土色・土性、陶器の色調についての記載には「新版標準土色帖」（小山・竹原：1973）を利用した。
5. 本書は調査担当職員の協議・検討を経て、手塚　均・佐々木光平・佐藤憲幸が執筆・編集した。
6. 発掘調査の記録や整理に関する資料および出土品については宮城県教育委員会が保管し、求めに応じて公開している。

調 査 要 項

1. 遺 跡 名；上野館跡（宮城県遺跡地図地名表登載番号 32007、遺跡記号　ＫＮ）
2. 所 在 地；宮城県志田郡松山町千石字松山１－１
3. 調査面積；約 2200 ㎡
4. 調査期間；平成３年４月３日～11 月７日
5. 調査主体；宮城県教育委員会
6. 調査担当；宮城県教育庁文化財保護課
   白鳥良一、手塚　均、佐久間光平、佐藤憲幸、太田　肇
   大和幸生、木皿直幸、吾妻俊典
   松山町ふるさと歴史館
   井口裕二
7. 調査協力；宮城県松山高等学校、松山町教育委員会、茂庭邦元、菊池　亮、及川　寛、青木祐慶
8. 調査参加；高橋末市、宮澤忠治、及川安治、円田幸男、佐沼　実、相沢春夫、松本恭二、片桐幸樹、及川昭子、本間ゆみ子、小玉富子、岩井富子、高橋博子
   浅野けい子、相沢あい子、渡辺栄子、伊藤渉江、柴又かよ子、谷崎彩子、児玉正子

1．はじめに

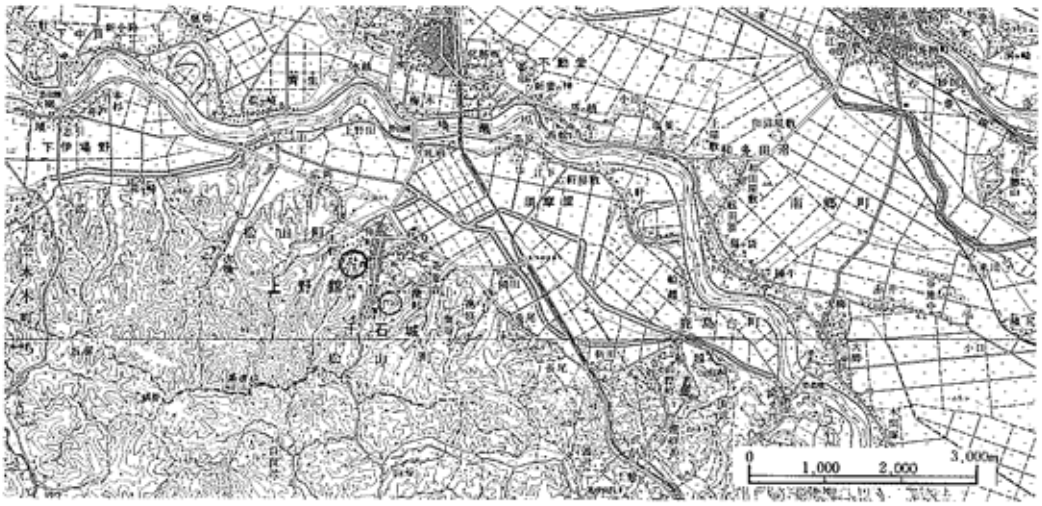
宮城県教育委員会では、宮城県松山高等学校の校舎改築工事に伴って、昭和62年度から上野館跡の発掘調査を行っており、今回の体育館建設用地の調査は第5次調査にあたる。

上野館跡は志田郡松山町千石字松山に所在する近世仙台藩の重臣：茂庭氏の屋敷跡である。遺跡はＪＲ東北本線松山町駅の西2.3ｋｍの地点に位置し、町の北限を画して流れる鳴瀬川の南側を東西方向に延びる丘陵の北端部、鳴瀬川の形成した沖積地を望む標高37～39ｍの高所に立地している。遺跡の東側は比高差約25mの急崖であり、下位には足軽屋敷や町場のたたずまいが残されている（第1図）。

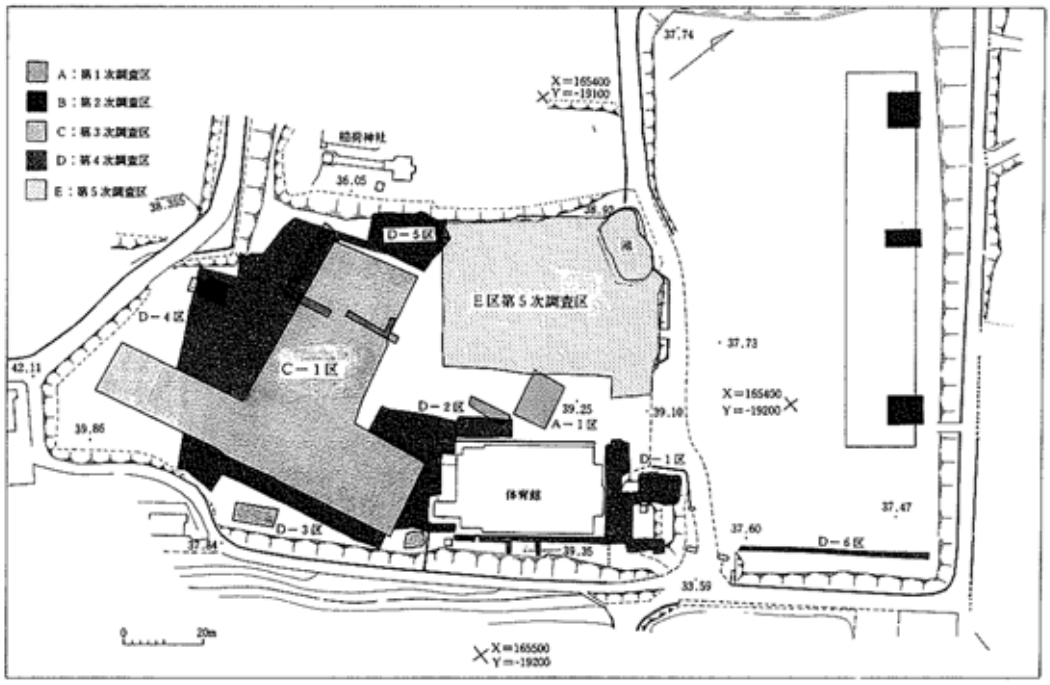
慶長8年（1603）に松山の領主となった茂庭氏は、当初、中世城館である千石城三ノ丸に居を構えるが、寛永8年（1631）に下屋敷として上野館を築き、明暦3年（1657）には千石城から上野館に移り、以後明治維新までの約200年間、上野館を正式な居館としている。

前回までの調査は屋敷内の表門から南脇中央部付近までが対象となっており、発見された遺構は礎石建物跡1棟、掘立柱建物跡20棟前後、柱穴列8、打ち込み杭列1、井戸跡5、溝跡22、土壙34、竪穴状遺構2、池跡2、通路跡3、土塁1、炭窯跡1・整地地業7などであり、掘立柱建物跡・土壙・池跡・整地地業には複数期の変遷が見られた。また、掘立柱建物跡や柱穴列の方向は館周りをほぼ方形に巡る南脇通路跡およびこれと並行して一部に小高く残っている土塁の方向とほぼ同様であり、屋敷内の建物配置が一貫して規則的に行われていたことが伺われた。

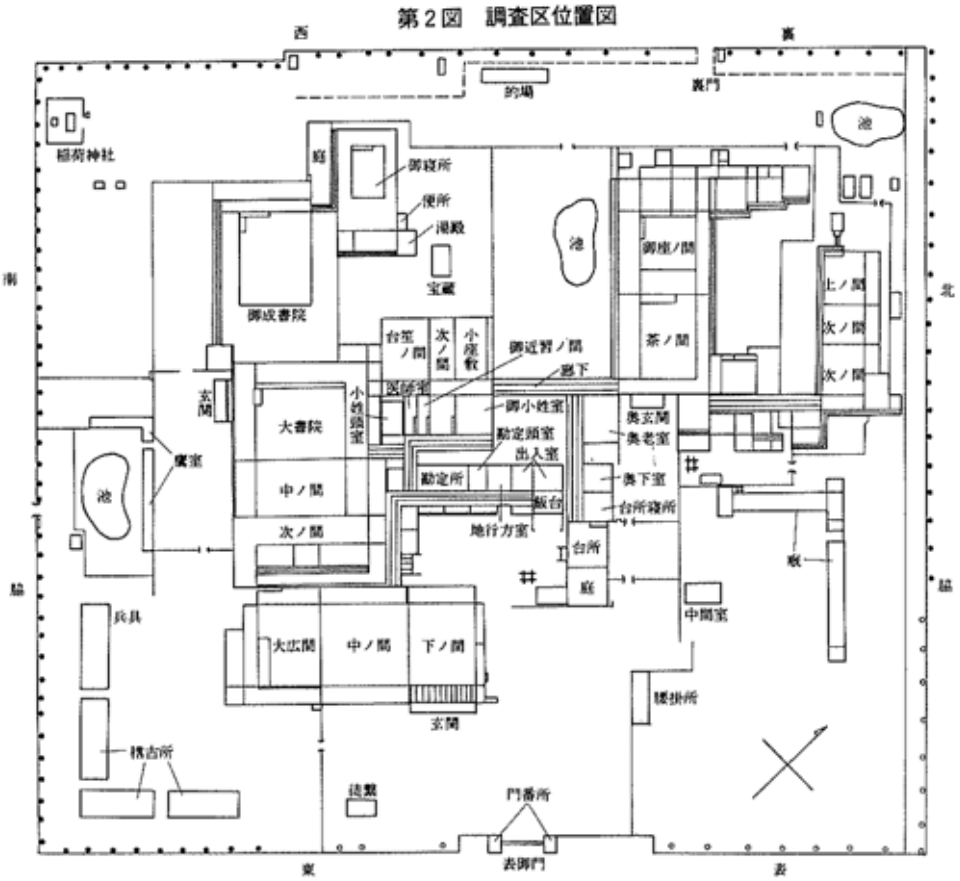
また、4次にわたる調査では西方向に向かって低く傾斜する丘陵の旧地形に何回かの整地地業を行って平坦面を作り出し、建物を増改築していること、さらに、昭和26年の松山中学校の校地造成時に南・東側を大きく削平していることなどが明らかにされている。



第１図　遺跡の位置



第2図　調査区位置図



第3図　松山旧城平面図（大正7年作成）

2．調査の方法と経過

今回の調査は体育館建設用地が対象である（第2図）。対象地は第3図に示した大正7年に作成された松山旧城（＝上野館）平面図(註)によると、領内の政治および儀式の場である大書院と大広間の2つの建物を中心として構成される「表」の建物群と、その背後に位置し、藩主来訪の際に使用される「御成書院」・「御寝所」、宝蔵、瓢箪池などが築かれた場所にほぼ相当し、東側に隣接する第1次調査区（Ａ－1区）の調査成果からも多くの遺構の存在が推定されていた区域である。

調査は平成3年4月3日に開始した。前述のように、昨年度までの調査で遺構検出面までは盛土が行われていることが明らかになっており、はじめに重機・4ｔトラックを使用して、調査区の南側から盛土の除去を行った。盛土は調査区の東半部分で30～50ｃｍ、西半部分では1m近い厚さがあり、その下から整地面が検出された。盛土の処理と並行して整地面のケズリを主とした遺構確認を行い、整地面を壊している昭和26年に建設された松山中学校校舎の基礎地業や上・排水道管の除去、ゴミ穴などの撹乱部分を掘下げ、その壁面を利用して整地層の数、遺構の把握に努め、排土処理・調査の円滑化を計るためベルトコンベアーを使用し、調査を進めた。その結果、調査区のほぼ中央部を境に東側では25～40ｃｍの、西側では2m以上の厚さにおよぶ整地層が把握され、この段階で調査区を西区・東区に二分し、区ごとに層位を検討しながら調査を進めることにした。

西区の整地層は7段階に大別され、近世に属する3面から遺構が検出された。また、東区では大きく3段階の近世の整地層が確認された。各整地層は上位から順次に遺構確認→精査→写真撮影→図面作成の順で調査を進めたが、西区では部分的に認められる整地層も多くあり、また、各層の厚さも場所によって異なるなど、その把握には膨大な時間を要し、東区では整地層と掘り込まれた遺構の識別が難しく、最終的には地山面で検出された遺構も少なくない。

なお、遺構確認と平行して調査区全体に3m単位のグリッドを組み（グリッド設定の基準線は国家座標の座標北から52°西偏）、整地層出土遺物の取り上げは東西2グリッド・南北3グリッドを1区画として行った（第4図）。

西区の厚い整地層の精査と東区の複雑な遺構の重複関係、雨天による調査の遅れなどから、調査期間は大きく膨らみ、調査が終了したのは開始から7ヶ月後の11月7日で、最終的な調査面積は約2200㎡である。

（註）本図は松山町史に掲載されており、「幕末期に御小姓頭を勤めていた遊佐協が明治39年、76歳の時に記憶を基に作った図面を基本とし、当時当主敬元公に傳として仕えていた現存者、駒井治左衛門その他の諸氏につき厳密なる校訂を経、幾多の修正をなして作成された。大正7年10月」の記載がある。

3．調査成果の概要

今回の調査で発見された近世の遺構には礎石建物跡 1 棟、掘立柱建物跡 10 棟以上、布掘り状の柱穴列 20 条、池跡 2 ヶ所、井戸跡 3 基、土壙 20 基以上、溝跡 13 条、石列、多数の柱穴、整地地業などがあり、古墳時代の竪穴住居跡も 1 軒検出されている（第 4 図）。近世の遺構は数回に及ぶ整地地業の上下あるいは同一の面や地山面で重複しており、地山面で検出された竪穴住居跡は近世の遺構に大部分が壊されている。

主な遺構の構築面・分布について見ると、ＳB50 礎石建物跡は西区のほぼ中央部整地層 4 層面に構築され、抜き取りにより礎石が失われ、礎石根固石とその掘り方が残っている遺構である。掘立柱建物跡は西区整地層 4a 層下・6 層面、東区整地 5 層面・地山面などで検出されており、東区に集中している。ＳB50 の東側に位置し、西区 6 層面で検出されたＳB52、東区地山面で検出されたＳB54 はその全容が明らかであるが、他の建物跡は一部のみの検出であり全容を知り得ない。その中で、ＳB57 は昭和 63 年に調査したＡ－1 区の柱穴列と組み合う可能性の高い建物跡で、検出されている建物中では最大規模のものである。

なお、これらの建物跡は同一の層位面で互いに重複あるいは近接して検出されたものが多く、何回かの建替え、改築を経た遺構の変遷を示している。

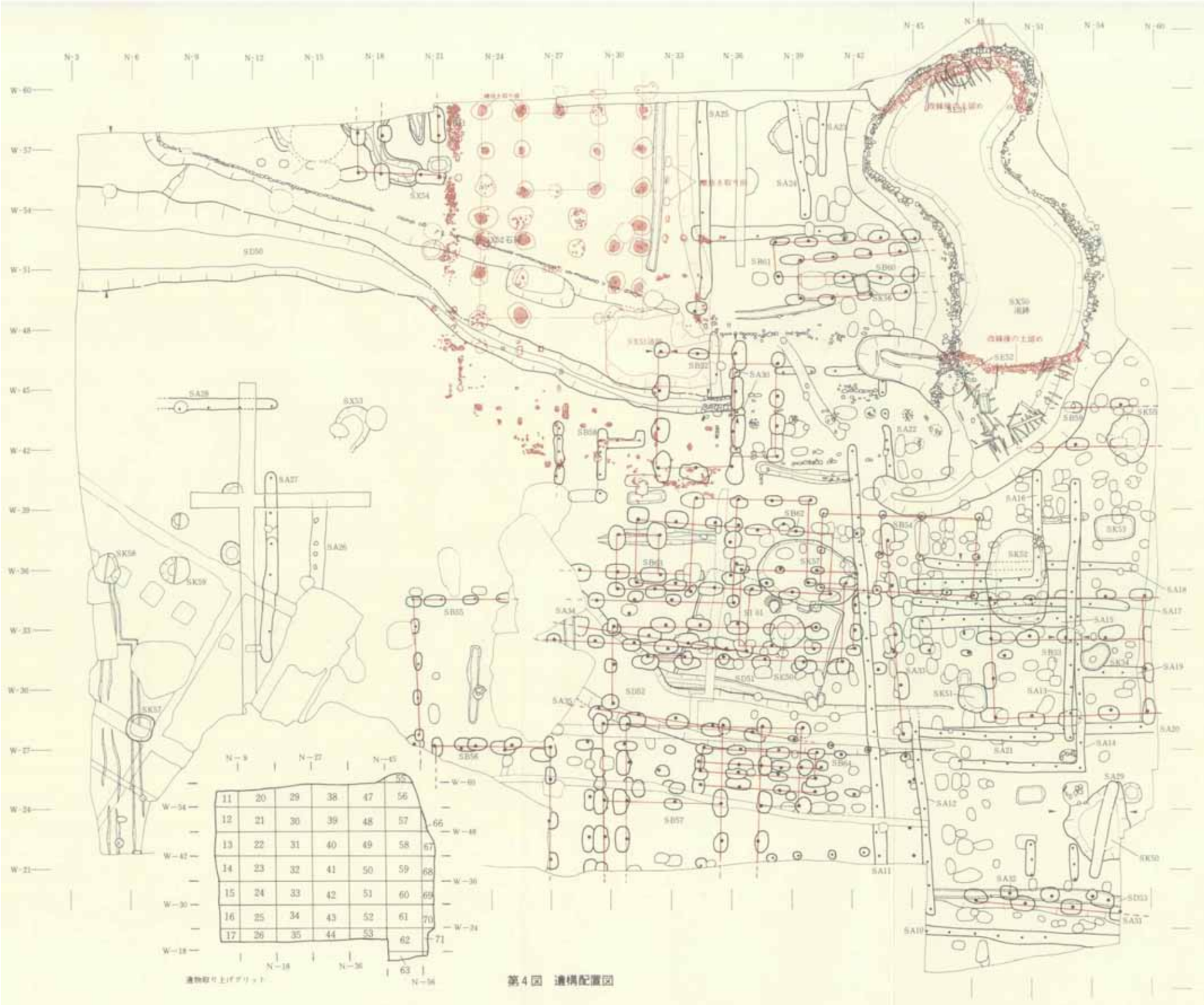
布掘り状柱穴列は東区北側に多く認められ、4・5 層面・地山面で重複して検出されているものが多い。これらの中には同一規模で平行するもの、Ｌ字形に折れ曲がるものなどがあり、その方向も一様ではない。前者については検出された建物跡との直接的な関係は把握できないものの廊下跡の可能性が、後者には塀跡の可能性が考えられた。

次に、発見された遺物について見ると、近世の陶磁器類（碗・皿・鉢・瓶・香炉・猪口・鬢水入れ・水注ぎなど）、土師質・瓦質土器類（焼塩壷・鉢・灯明皿など）、瓦類（軒平瓦・平瓦・丸瓦・棟込め瓦・伏間瓦・軒桟瓦・鯱瓦など）、土製品（人形）、石製品（硯・碁石・燈篭・石臼など）、金属製品（銭貨・煙管・襖金具・鎌・釘・鉄砲玉など）、木製品（曲げ物・漆器碗など）などコンテナで 30 箱以上に及んでおり、池跡、整地層から主に出土している。これらの遺物は上野館構築当初から廃絶されるまでの年代に相当するものであり、17 世紀の中頃～19 世紀の後半のものである。

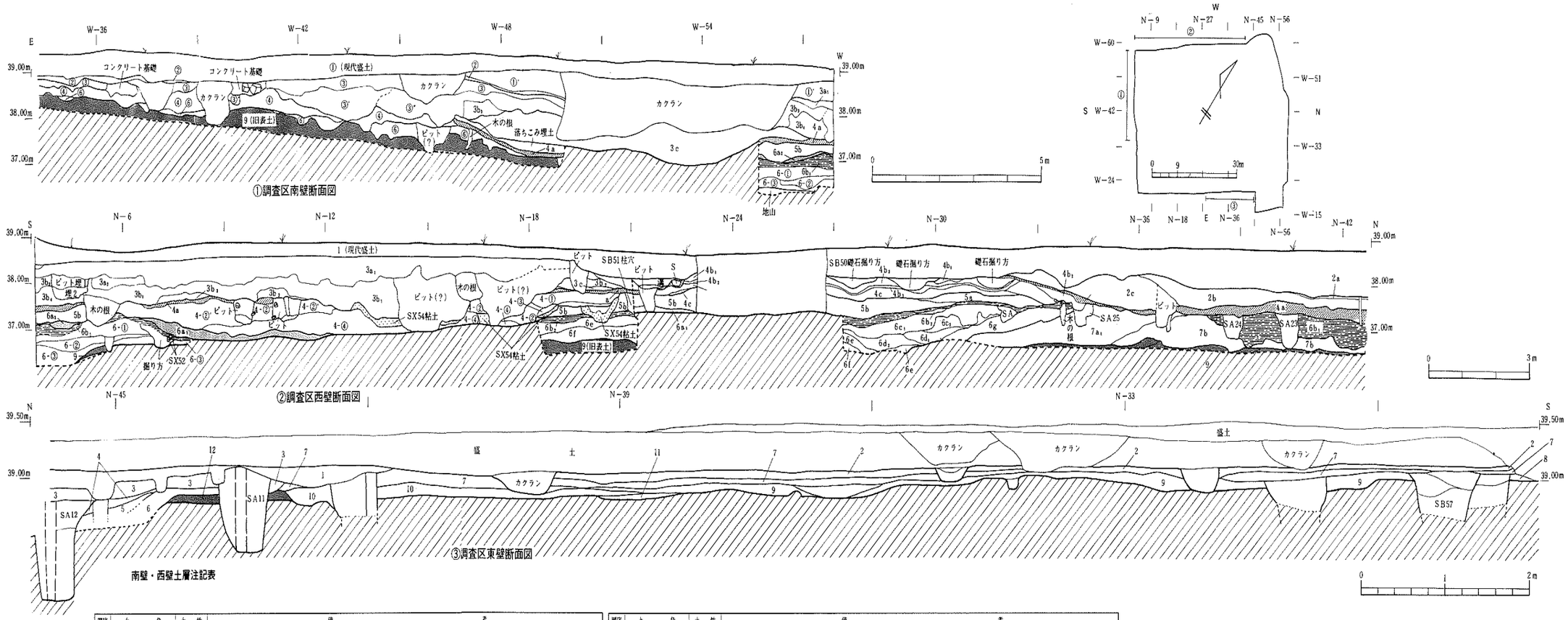
以下では、初めに層序について、次に検出された各遺構・遺物の中から主なものを抽出して説明を加えるに留め、詳細な報告は来年度以降の本報告で行いたいと考えている。

(1)層序（第 5 図）

今回の調査区は、前年度までの調査区に比較して近世の整地層が厚く残っている区域であった。この区域はもともと西の神社側へ傾斜する地形であったため、館の造成の際に東



第4図　遺構配置図



南壁・西壁土層注記表

層序	土色	土性	備考
1	暗褐色(10YR3/3)	シルト	現代盛土。明黄褐色(10YR6/6) シルトなどが不均質に混じる。
2a	にぶい黄褐色(10YR4/3)	砂質シルト	近代～現代。一見して灰色っぽい。粘性なく砂質。炭化物（φ5mm以下）比較的多い。しまり不良。
2b	褐色(10YR4/4)	シルト	近代以降。耕作土層？小礫、炭化物（φ1cm以下）若干含む。しまり不良、粘性なし。
2c	浅黄色(2.5Y7/4)	シルト	近代以降？＋明黄褐色(10YR7/6) シルト地山層の盛土。しまり不良で、粘性若干あり。
$3a_1$	褐色(10YR4/4)	砂質シルト	近代以降の整地の可能性あり。黄褐色凝灰岩ブロック（φ1～5cm）多く含む。乾燥するとクラックが多く入る。しまり良、粘性なし。
$3a_2$	にぶい黄褐色(10YR4/3)	砂質シルト	＋黒褐色(10YR2/3) シルト（下部）。上部には黄褐色凝灰岩ブロック（φ1～5cm）が多く入る。しまり不良、粘性なし。
$3b_1$	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	＋暗褐色(10YR4/4) シルト。灰色がかって見え、乾燥するとクラックが入る。酸化鉄の沈着が著しい。炭化物（φ1cm以下）比較的多い。しまり良、粘性なし。
$3b_2$	黒褐色(10YR3/2)	シルト	黄褐色(10YR5/6) シルトがブロック状（φ5cm程度）に入り込む。炭化物（φ5mm以下）若干。しまり不良、粘性なくパサパサ。
$3b_3$	黄褐色(7.5YR5/8)	粘質シルト	暗褐色(10YR4/6) シルトが不均質に混じる。炭化物（φ5mm以下）若干。黄褐色～白色凝灰岩ブロック（φ1cm以下）多い。しまり不良、粘性ややあり。
$3b_4$	黄褐色(7.5YR5/8)	粘質シルト	遺入物がほとんどなく均質でオレンジ色に見える整地。しまり不良、粘性ややあり。
3c	褐色(7.5YR4/4)	シルト	近世。一見褐色の盛土。暗褐色(10YR5/6) シルトブロックがまだら状に混じる。比較的均質で、岩片の混りは少ない。しまりは良、粘性なし。
Ⅲ	黒褐色(10YR3/2)	シルト	炭化物（φ1cm以下）、凝灰岩（φ1～2cm）多い。調査区中央の一部区域のみ分布。瓦が多い。3a～3bとの上下関係は不明。ただ、3bの直上にある。
3d	明黄褐色(10YR6/6)	シルト	客土。灰褐色(7.5YR4/2) シルトが不均質に混じる。円礫（φ5cm）若干。調査区西側一部区域に分布。
3e	黒褐色(10YR3/2)	シルト	にぶい黄褐色(10YR7/4) 粘土ブロック、炭化物（φ1～3cm）多量。火災もしくは火の施設の痕跡か？しまり不良、粘性やややあり。
4a	暗褐色(7.5YR3/3)	シルト	区域により若干異なる。黄褐色凝灰岩（φ1～3cm）多く含む区域あり。調査区南西部では上部にオリーブ褐色砂（厚さ1～3cm）。炭化物（φ1cm以下）若干。
$4b_1$	明黄褐色(10YR6/6)	シルト	礎岩建物建設時の盛土（以下4c層まで）。礎岩建物区域のみ分布。凝灰岩（φ1～5cm）多く含む。乾燥するとパサパサ。粘性なく、しまり不良、粘性なし。
$4b_2$	黄褐色(10YR5/6)	シルト	$4b_1$に比べやや粘質で褐色味あり。明黄褐色シルトが不均質に混じる。礎石建物付近の部分的な分布。根石の埋土となる場合あり。しまり・粘性やややあり。
$4b_3$	褐色(10YR4/6)	シルト	暗褐色(10YR4/4) シルトがまだら状に混じる。円礫（φ5cm）若干。粘性なく、しまり良。
4c	明黄褐色(10YR6/8)	シルト	＋10YR4/3褐色(10YR4/6) シルト。小円礫（φ1cm以下）若干。粘性なし、しまり良。
4①'	褐色(10YR4/4)	砂質シルト	小礫（φ1cm以下）比較的多い。砂質。しまり良、粘性なし。
4②'	褐色(10YR4/6)	砂質シルト	やや灰色がかって見える。凝灰岩ブロック（φ1cm以下）多く入る。しまり良、粘性なし。
4②'	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	黄褐色～白色凝灰岩（φ1～5cm）を多く含む。しまり良、粘性なし。
4③'	暗褐色(10YR3/3)	シルト	4②'に比べやや黒味がある。遺入物がほとんどない均質な層。しまり良、粘性なし。
4④'	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	やや灰色がかっている。凝灰岩、小礫（φ2cm以下）の混入多い。炭化物（φ1cm以下）若干。しまりは粘性なし。
5a	褐色(10YR5/6)	粘質シルト	＋暗褐色(10YR3/3) 粘質シルト。指倉の割合がやや高い。小礫（φ5cm以下）若干。しまり不良、粘性ややあり。
5b	暗褐色(10YR3/3)	粘質シルト	黄褐色(10YR5/6) 粘質シルトブロックが多く混じる。一部区域凝灰岩小礫混じる。しまり不良、粘性ややあり。
$6a_1$	褐色(10YR4/4)	シルト	＋黒褐色(10YR2/3) シルト。SX52石列を部分的におおう層。白色～黄褐色凝灰岩ブロック（φ5mm以下）若干含む。しまり良、粘性なし。
$6a_2$	褐色(10YR4/4)	褐色シルト	黒褐色(10YR2/3) シルトが不均質に混じる。黄褐色凝灰岩ブロック（φ1～3cm）多く含む。しまり不良、粘性やややあり。
$6b_1$	暗褐色(10YR3/3)	粘質シルト	黄褐色凝灰岩小ブロックが多量に混じる。炭化物（φ5mm以下）若干。しまり不良、粘性やややあり。
$6b_2$	褐色(10YR4/4)	シルト	明黄褐色(2.5Y7/6) 凝灰岩ブロック（地山）の混じりが多く、一見すると黄褐色の盛土。小礫（φ1cm以下）多い。しまり不良、粘性なし。
$6c_1$	暗褐色(10YR3/3)	シルト	明黄褐色(10YR6/8) シルトブロックが比較的多く入る。6bに比べ黒味が強い。粘性なし。しまり不良。炭化物（φ1cm以下）、礫（φ5cm）若干。
$6c_2$	暗褐色(10YR3/3)	シルト	$6c_1$に比べ褐色(10YR4/6) シルトの含まれる割合が高い。炭化物（φ1cm以下）、浅黄色凝灰岩シルトブロックがやや多く入る。しまり良、粘性なし。
$6d_1$	暗褐色(10YR3/3)	シルト	6cに比べやや灰色がかっており、しまりもある。炭化物（φ5mm以下）、小礫（φ5mm以下）若干含まれるが、比較的混入物は少ない。粘性なし。
$6d_2$	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	浅黄色凝灰岩ブロックが多く入る。炭化物（φ5mm以下）若干。しまり不良、粘性ややあり。
6e	暗褐色(10YR3/3)	粘質シルト	浅黄褐色(10YR6/3) シルトブロックを少し混じる程度。炭化物（φ1cm以下）多く入る。しまり不良、粘性やややあり。
6f	褐色(10YR4/4)	シルト	6bに似る。地山起源土が多く入る。しまり不良、粘性やややあり。
6g	褐色(7.5YR4/4)	シルト	上部には明黄褐色(10YR6/6) シルトが多い。炭化物は含まれない。礫（φ5cm）若干。しまり良、粘性なし。
6①'	黒褐色(10YR2/2)	シルト	黄褐色(10YR5/6) 粘質シルトが不均質に混じる。黄褐色凝灰岩ブロック（φ1～3cm）多く含む。しまり不良、粘性やややあり。
6②'	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	＋浅黄色(5Y7/4) 凝灰岩。地山土を客土としたもの。しまり不良でパサパサ、粘性なし。
6③'	……	……	7aに類似。
$7a_1$	褐色シルト(10YR4/6)	シルト	＋暗褐色(10YR3/3) シルト。部分的に明黄褐色(10YR6/6) シルトが入る。しまり良、粘性やややあり。
$7a_2$	黒褐色(10YR2/3)	シルト	にぶい黄褐色(10YR5/4) シルトブロックを所状に多く含む。しまり良、粘性なし。
7b	暗褐色(10YR4/6)	シルト	黒褐色(10YR2/3) シルト層との互層。小礫、炭化物などはほとんど混じらない。SK50埋土周辺の一部区域にのみ分布。しまり良、粘性なし。
8	暗褐色(10YR3/3)	シルト	凝灰岩、小礫（φ1cm以下）が多く入る。西側中央付近のみに分布。黒褐色(10YR3/2) シルト（旧表土）に似た層が縞状に入る部分もある。しまり良、粘性なし。
9	黒褐色(10YR2/2)	シルト	旧表土。西側区域ほど厚く残る。しまり不良、粘性若干あり。
①	……	……	高校による砂利層
②	黄褐色(10YR5/6)	粘質シルト	現代整地層
③	褐色(10YR4/4)	シルト	現代整地層。小礫（φ2cm以下）比較的多く含む。オリーブ褐色の砂のブロックがところどころに入る。
③'	褐色(7.5YR4/4)	粘質シルト	小礫、凝灰岩ブロック（φ1～3cm）多く入る。③'に比べ礫、凝灰岩ブロックが多い。しまり良、粘性やややあり。
③"	暗褐色(7.5YR4/4)	粘質シルト	小礫、凝灰岩ブロック（φ1～3cm）若干入る。しまり良、粘性やややあり。
④	暗褐色(10YR3/3)	粘質シルト	③'、③"に比べ黒味がある。凝灰岩ブロック（φ1～2cm）が多く混じる。粘性やややあり。調査区西壁の6層面に対応？ただ、層相が違うので区別しておく。
⑤	黒褐色(10YR2/3)	シルト	黄褐色シルトブロック（φ1cm以下）を比較的多く混じえる。調査区西壁の6層もしくは7層に対応か？しまり不良、粘性やややあり。

第5図　調査区断面図

東壁土層注記表

層No.	土色	土性	備考	大別部位	遺物取り上げ
1	暗褐色(10YR3/3)	シルト	炭化物を含み、黄褐色地山ブロックを微量に含むしまりの少ない耕作土層。	1 層	2 層
2	暗褐色(10YR3/3)	シルト	多量の地山ブロックと微量の炭化物を含む整地層。	2 層	踏 切 面
3	暗褐色(10YR3/4)	シルト	比例ほど炭化物、地山粒を多く含む整地層。	3 層	4・5 層
4	暗褐色(10YR3/3)	シルト	多量の地山ブロックと少量の炭化物を含む整地層。	4 層	整 地 Ⅰ 層
5	暗褐色(10YR3/4)	シルト	炭化物・地山粒を少量含む整地層。		
6	暗褐色(10YR3/4)	シルト	少量の炭化物と微量の地山粒を含む整地層。		
7	暗褐色(10YR3/3)	シルト	2層に似ているが、酸化鉄を多く含み、黒褐色(10YR2/シルト)が混じる整地層。	5 層	
8	黒褐色(10YR2/3)	シルト	地山ブロックを多量に含む層。遺構の埋土？		
9	暗褐色(10YR3/3)	シルト	炭化物・地山粒を少量含む整地層。		
10	暗褐色(10YR3/3)	シルト	7層に似ているが、地山ブロックが主体の整地層。		
11	黒褐色(10YR3/2)	シルト	炭化物・地山粒を少量含む整地層。		
12	黒褐色(10YR2/3)	シルト	旧表土。しまりのある自然堆積層。	6 層	旧 表 土

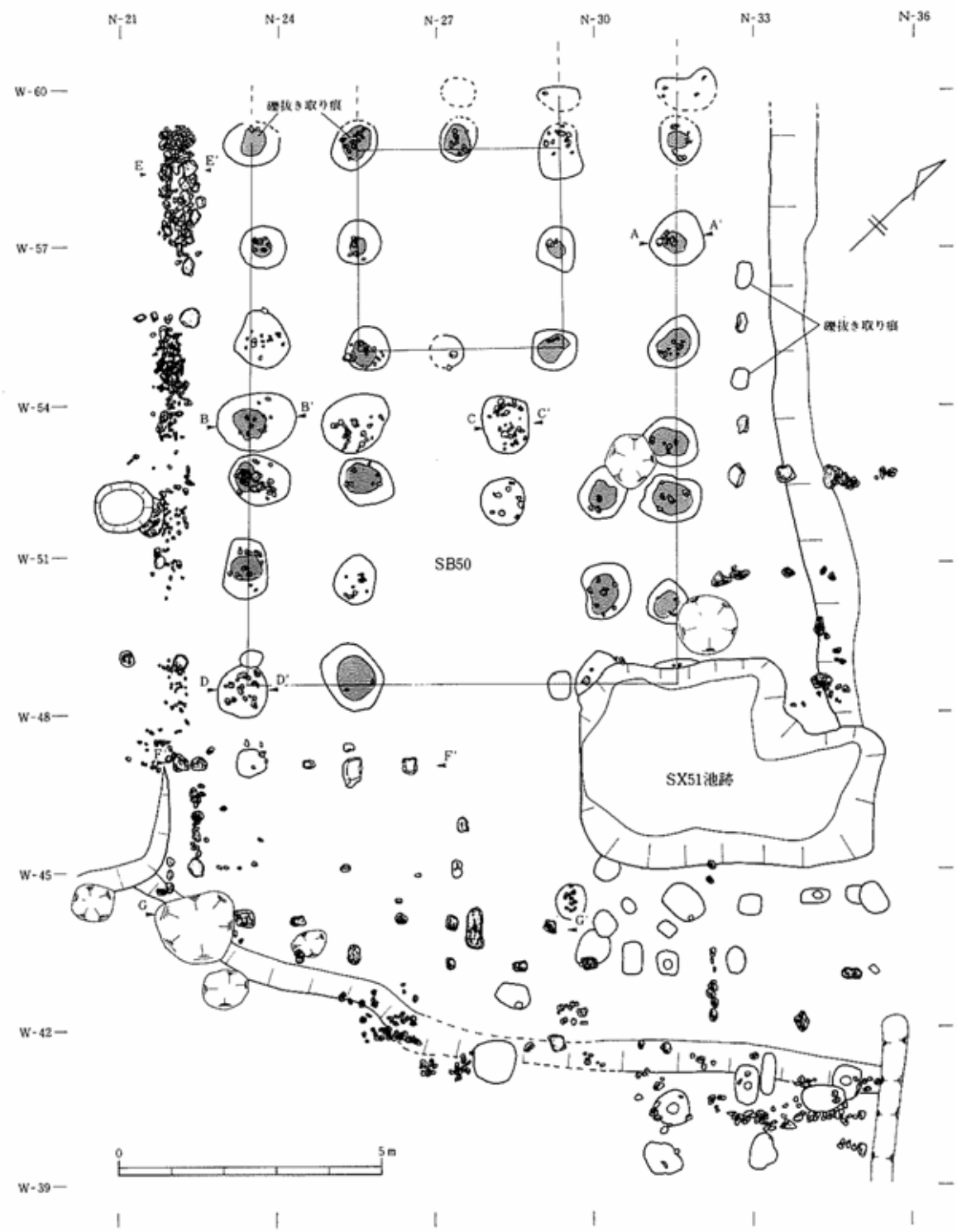
側の高い部分を削平し、西側の低い区域に盛土をして平坦面を作り出している。そのため、周囲より地形が低かった西（南西）側ほど盛土が厚くなされており、南西部では約2～2.5ｍの整地（盛土）層が確認された。これらの整地層は何時期かにわたって行なわれており、遺構はこれらの整地層を挟んで検出されている。なお、周囲よりやや高い東～南東部にかけては、後世（近代以降）の削平によって上層が削られてしまい、整地層は全く残っていないかあるいは20～30ｃｍしか残存していなかった。

第5図は調査区の西壁・南壁・東壁の整地層の一部を表した地層断面図である。西壁・南壁と東壁では層名が別々に付けられている。これは、調査区の中央W－42付近を境として西側と東側では層序に違いがありその対比が困難であったため、調査ではひとまず西側と東側で層を別個に捉えたからである。のちに層序間の比較を行なうことにした。そのためここでは調査区をW－42ラインで西側と東側にわけ、西区・東区に2分して説明する。

西区の1～2層は近代から現代、3層は近世から近代（？）、4層～8層が近世の整地（盛土）層、9層が旧表土（黒褐色土）層である。3層は3ｃ層以下については近世に属するとみられるが、3ａ～ｂ層は遺物がほとんどなくいつの時期に属するか不明確である。ただ、黄褐色凝灰岩片・小礫を多く含み、乾燥するとクラックが多く入り、他の近世の整地層とはやや異質なので、近代以降の整地層の可能性がある。

西区で遺構面として大きく捉えられたのは、3ｃ層・4層・6層の各層面である。3ｃ層は厚さ50～60ｃｍほどの褐色の混じりの少ない均質な盛土層であり、南西部のみで確認された。これは一段高い段（西と東側面が下がる）を造るための盛土とみられる。4層はＳＢ50礎石建物跡が検出された面であり、4b_1：黄褐色シルト層（厚さ10～20ｃｍ）～4ｃ：明黄褐色シルト層（厚さ30～40ｃｍ）は基壇状の高まりを形成するための盛土である。礎石建物の南側一帯では4ａ層面にやや青みのある砂・円礫が分布していた。5層は褐色粘質シルト質の盛土、6層が褐色～暗褐色シルト質の整地（盛土）層である。6層面はＳＸ52石列・ＳＤ50溝跡などの遺構検出面で、南西側へ傾斜する。7層は褐色～黒褐色シルト質の盛土、特に7ｂ層は黄褐色シルト層に黒褐色シルト層が縞状に入る。9層は黒褐色の旧表土である。南壁・西壁の断面図に示されているように西～南西側へ傾斜している。

東区では中学校造成時の盛土下に15枚の層が検出され、図示した東壁面では12枚の層が見られた。耕作土層である層No.1と旧表土層である層No.12を除いた各層は近世の整地層である。このうち、上層の層No.2・3については層の平面的な広がりを把握できたが、下層の層No.4～11については断面では層の違いが識別できたものの、平面的には区分することができなかった。そのため、層序に示す層No.4～6・層No.7～11をそれぞれ4・5層と大きく捉えて掘下げを行ったので、各層についての記載も掘下げ大別層単位で行う。


N-21
N-24
N-27
N-30
N-33
N-36
W-60
W-57
W-54
W-51
W-48
W-45
W-42
W-39
礎抜き取り痕
礎抜き取り痕
SB50
SX51池跡
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
E
E'
F
F'
G
G'
0
5m

第６図　SB50平面図

2～5層は暗褐色シルトを基調とした整地層で、いずれも地山ブロック・炭化物を含んでいる。2層はＳＡ11柱穴列南側の東壁からＳＤ50溝跡付近まで分布し、上面は削平されている。礎石根固め2個、溝3条が検出されている。3層は調査区北東隅のＳＡ10・11、ＳＫ52土壙に囲まれた範囲に分布し、断面図に表れない北側部分で細分される（第17図上：ＳＫ50層№.4・5）。ＳＡ11・ＳＫ51・52の検出面になっている。4・5層は旧表土あるいは地山面を覆う整地層である。4層はＳＡ11の付近からＳＡ12の北側にかけての傾斜面に将棋倒し状に見られる層で、ＳＡ12構築に係わる整地層であろう。5層は南東部の削平された部分を除いた広い範囲に分布し、この層からＳＢ55～57掘立柱建物跡、ＳＡ12～18、ＳＥ50井戸跡をはじめとする多くの遺構が重複して検出されている。

なお、断面図に表れない北側部分の１層と３層の間に炭化物を多量に含む整地層が検出されている（第 17 図上：ＳＫ50 層 №.3）。この層の分布範囲は３層に似ているが、撹乱も多く不明瞭である（2 層との上下関係は不明であるが２ａ層としておく）。

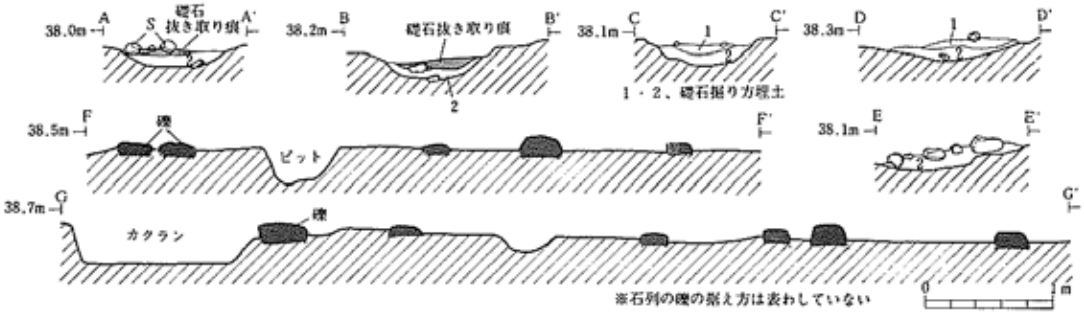
最後に、後述する遺物の年代から西区・東区の整地層の年代をみると、西区６層と東区４・５層、西区４・３ｃ～ｄ層と東区２・３層がそれぞれ対応関係にあるものと考えられた。

(2)発見された遺構と遺物

礎石建物跡（第４・６図、写真図版２）

礎石建物跡として明確に捉えられたのは調査区西側中央部にあるＳＢ50 1棟のみで、これ以外は、中央部～東側で根固め石とみられる痕跡が数基確認できたにすぎない。

【ＳＢ50】西側中央部の4ｂ層面で確認された。北東隅の一角がＳＸ51池跡によって壊されている。東西6間以上、南北4間の東西棟で、調査区の西側へさらにのびている可能性が大きい（第6図）。礎石はいずれも残っていないが、柱間寸法は1.95～2.1m（6尺5寸～7尺）、建物中央付近の近接した柱列の間隔は1.2m（4尺）程度と推定される。この建物は



第７図　SB50断面図

基壇状に厚さ 30～40ｃｍの黄褐色の盛土をしたのちに礎石の根固め石をつめる径 0.9～1.2mほどの円形をした浅い皿状のピット（深さ約 20ｃｍ）を掘って礎石を据えている。大半の掘り方にはその中央部に礎石の抜き取り痕とみられる痕跡が確認された（第７図)。

全体の礎石の配置はやや不規則である。この礎石の配置から2棟の礎石建物の存在も考えられるが、礎石の根固め石をつめる掘り方の確認面が同じであり、掘り方の構造（大きさ、形状、埋土など）も類似していることから、分離しないで同時に構築された1棟分の礎石群と捉えてよいだろう。この礎石建物の方向は東西方向のグリッド線に対し約2°北偏する。この礎石建物の南側には雨落溝と考えられる東西方向の石組遺構、また、東と北側には縁束柱あるいは廂の柱の礎石と見られる石列が1.2m（4尺）間隔で並んでいる。南側の石組遺構は西の調査区外へさらにのびている。

なお、礎石建物は位置的にみると東側に対してはやや低い場所になり、ＳＸ50池跡をのぞむ北側に対しては一段やや高い区域となる。

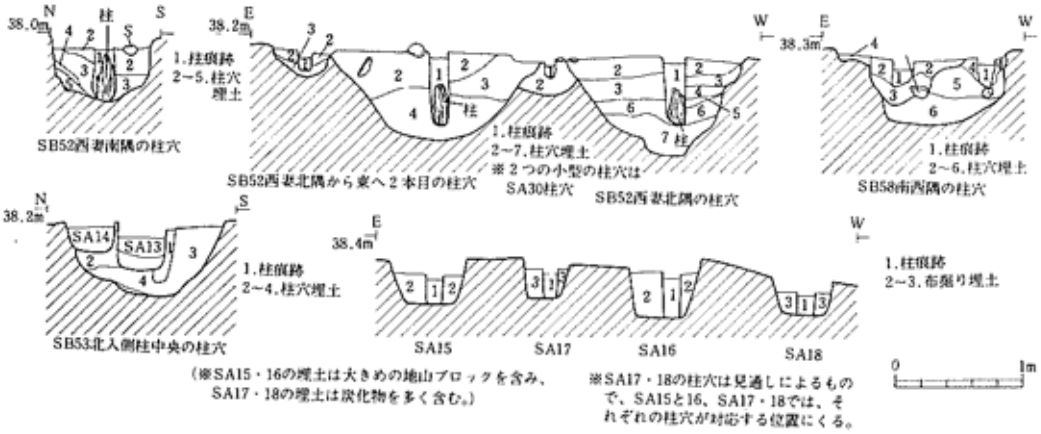
掘立柱建物跡（第４・14 図）

掘立柱建物跡は、西区4ａ層下、6層面、東区5層面、地山面などで検出されている。現在10棟前後を推測しているが、柱穴列としては認識できるものの相互の組合せが不明瞭なものも多く、その数はさらに増える可能性がある。これらは多くが調査区中央部から北東側で重複あるいは近接して検出されており、構築時期に数段階の変遷が考えられる。

以下、主なものについて記載をする。

【ＳＢ51】ＳＢ50礎石建物跡の南側4ａ層下で検出。層位的には礎石建物より下位になり、同じ区域で検出されたＳＸ54粘土貼り遺構よりは新しい。この建物は北東隅の一角が調査区にかかったもので、さらに西側へ延びるものと思われる（第14図）。建物の南東部は上層からの土坑群で撹乱されているため、南側へ続くかどうかは不明である。確認された柱穴掘り方の中には、長軸1.5～1.8mの楕円形の掘り方の中に2個の柱穴が90ｃｍ（3尺）間隔で並ぶものがあるが、その他の柱間は1.2m（4尺）と2.1m（7尺）を計る。

【ＳＢ52】ＳＢ56・57などの掘立柱建物跡と方向を一にする桁行3間・梁行2間の東西棟で、調査区のほぼ中央部・西区6層面で検出された（第4図）。ＳＸ51池跡に切られ、ＳＡ30・ＳＤ50を切っている。柱間寸法は1.9～2m、柱穴は長軸1.3～1.6m、短軸60～90ｃｍの楕円形あるいは隅丸長方形で、深さは55～80ｃｍである。これらの柱穴には一辺約15ｃｍ（五寸）の方形の柱材が残存していた。埋土は黒褐色シルトに地山や凝灰岩のブロックを多く含んでいる。なお、北側に2～2.1m離れて4個の柱穴が桁行方向に平行して発見されている。柱穴は長軸1～1.2m、短軸80ｃｍ、深さ45～55ｃｍで楕円形・隅丸方形を呈し、柱間寸法は1.4～1.6mである。埋土は建物跡の柱穴とほぼ同様である。建物に対して柱筋は揃わない



第８図　SB52・53・58柱穴断面図、SA13～18断面図

が、廂などこの建物跡に関連する柱穴列であると考えられる。

【ＳＢ53】身舎は桁行4間･梁行2間の南北棟で､西桁側に1間分の縁あるいは廂が取りつく。地山面で検出され、桁行はさらに北側にのびる可能性がある。ＳＡ19・20を切り、ＳＢ54・ＳＡ13～15・17・ＳＫ51・52・54に切られている。柱間寸法は桁行が1.9～1.95m、梁行が1.95～2mで、廂の出は1.85～2.05mである。柱穴は長軸0.9～1.32m、短軸52～82ｃｍの楕円形あるいは隅丸長方形で､北妻･南妻棟通り柱を除いて桁行方向に長軸を揃えている。長軸方向での断面形は逆台形状で、深さは55～65ｃｍ、埋土は暗褐色・黒褐色シルトに地山の細かなブロックを多量に含んでいる。柱痕跡は径あるいは一辺が16～22ｃｍの円形あるいは隅丸方形であるが、角柱の可能性が高い（第4・8図）。

【ＳＢ54】桁行3間・梁行2間の総柱の南北棟で、地山面で検出された。ＳＢ53・ＳＡ33を切りＳＡ11・16・18、ＳＫ57、ＳＸ50に切られている。また、ＳＢ62・63と重複するが新旧は不明である。柱間寸法は桁行では中央が狭く、西桁では南から2.90・1.90・2.92m、梁行は各列とも1.85～1.94mである。柱穴は円形に近く、径が40ｃｍほどの小さなものである。深さは40ｃｍ程で、埋土は黒褐色シルトに地山粒を僅かに含んでいる。柱痕跡は径15ｃｍほどの円形である（第4図）。

【ＳＢ57】調査区東辺のほぼ中央部、東区5層面で検出された。身舎は桁行4間以上・梁行3間の東西棟で、さらに東側にのびるものと思われる（第4図）。南桁には幅1.1～1.2mの縁あるいは廂が、北桁西隅には桁行2間・梁行1間の室が取りつく。また、西妻柱列から2間目と3間目に間仕切りの柱穴が3個認められる。ＳＢ64・ＳＡ35・ＳＤ52と重複し、これらを切っている。柱間寸法は桁行が1.9～2m、梁行は南桁西妻柱から4.7m・2mであるが、西妻から2間目の入側柱では2.4m・2.3m・2mの3間割になっている。身舎および廂の柱穴は不整楕円形や隅丸長方形で、長軸1～1.4m・短軸70～80ｃｍ・深さ50～60ｃｍ、

張り出し部は径約80㎝の円形で、深さは50～60ｃｍである。南桁と廂の柱穴では建物の内寄りに柱が据えられ、掘り方が張り出している。また、柱の下に沈下を防ぐための石が置かれているものもあった。埋土は、暗褐色または黒褐色シルトに地山ブロックや小礫を多く含んでいる。柱痕跡は、径あるいは一辺が16～20ｃｍの円形・隅丸方形である。

柱穴列（第４・８図）

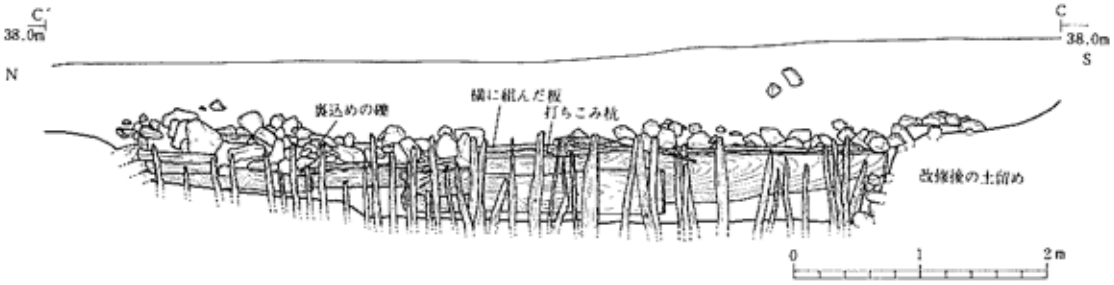
柱穴列には幅40～70ｃｍ、深さ30～70ｃｍの溝を掘り、その中に1.2m前後の間隔で柱を並べる、いわゆる布掘り状を呈するもの（Ａ）と、独立した柱穴がほぼ一定の間隔で直線的に並ぶもの（Ｂ）の2タイプがある。Ｂタイプについては平行あるいは直行するものが多々あり、掘立柱建物跡として独立、あるいは組み合う可能性を含んでおり、十分な検討を行なっていない。したがって、今回はＡタイプについての説明に留めたい。

ＳＡ10～29の20列がＡタイプに属し、調査区の北側に集中している。検出面は東区3層面（ＳＡ11）、4層面（ＳＡ12）、5層面（ＳＡ13～18、26～28）、西区6層面（ＳＡ22～25）、地山面（ＳＡ10、19～21、29）とばらつきがあるが、東区北側では、3層面下が5層面であったり地山面であったりしており、検出面が必ずしも構築面を示していないし、同一面検出のものにも重複関係が認められている。

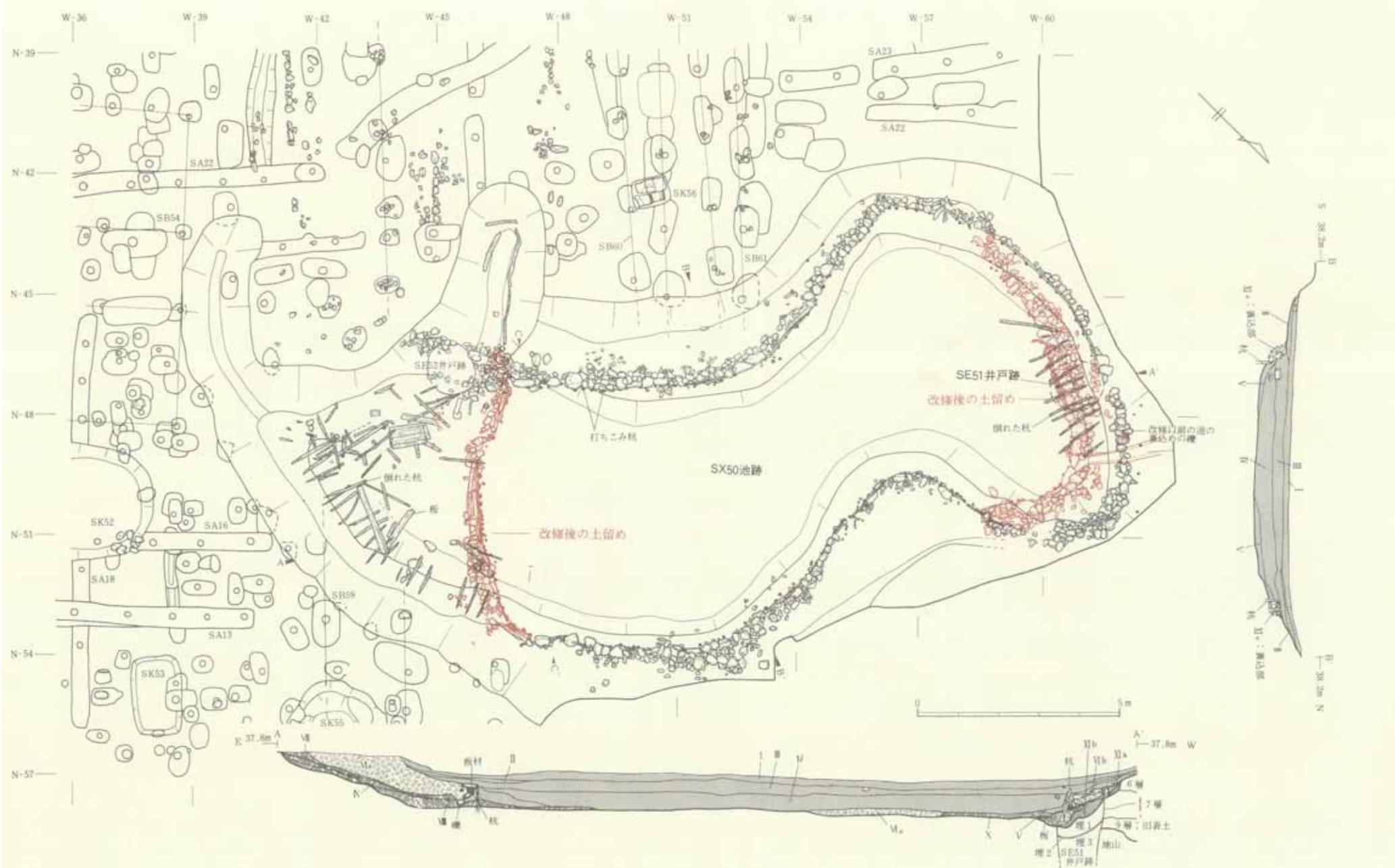
主なものについてみると、南北方向に走るＳＡ17と18は長さがほぼ同じで1.9mの間隔をおいて平行し、柱位置もほぼ対応している。また、ＳＡ15は逆Ｌ字形に曲がるＳＡ16と前者同様の関係にあり、ＳＡ14もＳＡ16の東西列と平行している。これらの方向はＳＢ52・57・62などの掘立柱建物跡の方向とほぼ同じであり、それぞれで対になって遺構を構成するものと考えられる。建物跡との直接的な関係は示し得ないが廊下跡の可能性がある。また、ＳＡ27・28のように前述の建物群の方向と一致し、鍵の手状に組み合うものについては塀跡と考えられる。なお、ＳＡ10・11のように現在知りうる建物群と方向を違えて単独でのびるものなども何列か見られるが、これらについても塀跡の可能性を考え、方向の違いは時期差を反映しているものと理解しておきたい。

池跡（第４・９・10図）

調査区の北西部で2箇所確認した。このうち規模の大きいＳＸ50池跡は、第3図に示した絵図に描かれている中央の奥の池に相当し、調査前まで池としての景観をとどめていた。



第９図　ＳＸ50池跡土留めの正面図



SX50池跡土層注記表

層序	土色	土性	備考
Ⅰ	暗褐色(10YR3/3)	粘質シルト	水性堆積層。微生物の根が入る現代の表土層。
Ⅱ	灰黄褐色(10YR4/2)	砂	水性堆積層。小礫若干含む。
Ⅲ	灰黄褐色(10YR4/2)	粘質シルト	水性堆積層。にぶい黄褐色砂ブロックが入る。汀層に近い青味がある。
Ⅳ	褐灰色(10YR4/1)	粘質シルト	水性堆積層。近世（寛永）～近代（明治期）。現代物若干含む。
Ⅴ	暗灰黄色(2.5Y4/2)	シルト質砂	水性堆積層。にぶい黄褐色砂層が縞状に入る。池廃棄後の最下層堆積物。
Ⅵa	褐色(10YR4/3)	シルト	改修時の整地・裏込。黄褐色シルトブロックが不均質に混じる。
Ⅵb	暗オリーブ灰色(5GY4/1)	シルト～粘質シルト	改修時の裏込。中砂～粗砂が不均質に混じる。

層序	土色	土性	備考
Ⅶ	褐色(10YR4/4)	シルト	水性堆積層。砂礫若干入る。この層層以下改修以前の堆積層。
Ⅷ	黒褐色(2.5Y3/2)	シルト質粘土	水性堆積層。均質なグライ層。上面に有機物が若干入る。
Ⅸ	黒褐色(2.5Y3/2)	粗砂～中砂	水性堆積層。剥れた杭・板材は主にこの上面。
Ⅹ	オリーブ黒色(5Y3/2)	粘質シルト	水性堆積層。下位ほど砂礫の混じりが多くなる。上面に有機物。
Ⅹ1a	暗オリーブ灰色(2.5GY3/1)	粘質シルト	最初の池造成時の裏込の機間を充填。中砂～粗砂が多い。
Ⅹ1b	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	池造成時の整地・裏込。明黄褐色粘質ブロックが多量に入る。

SE51井戸跡土層注記表

層序	土色	土性	備考
Ⅰ	黒褐色(2.5Y3/1)	粘質シルト	明緑灰色粘質シルトブロック。炭化物若干。
Ⅱ	――――	――――	炭化物層。
Ⅲ	オリーブ黒色(5Y3/1)	粘質シルト	Ⅰ層に似る。小礫若干。

第10図　SX50池跡平・断面図

【ＳＸ50】幕末の建物配置を描いた絵図（第3図）に描かれている瓢箪形の池である。調査が進むにつれて、一度改修されていることが判明した。構築当初は東西に長く、東側部分が2股に分かれ南側へ突出する形態であったが、改修時に東端と西端に手が加えられて短くなり瓢箪型になっている（第10図）。改修後の規模は、長軸15.5m、中央のくびれの部分の幅約4.5m、深さ1mほどである。

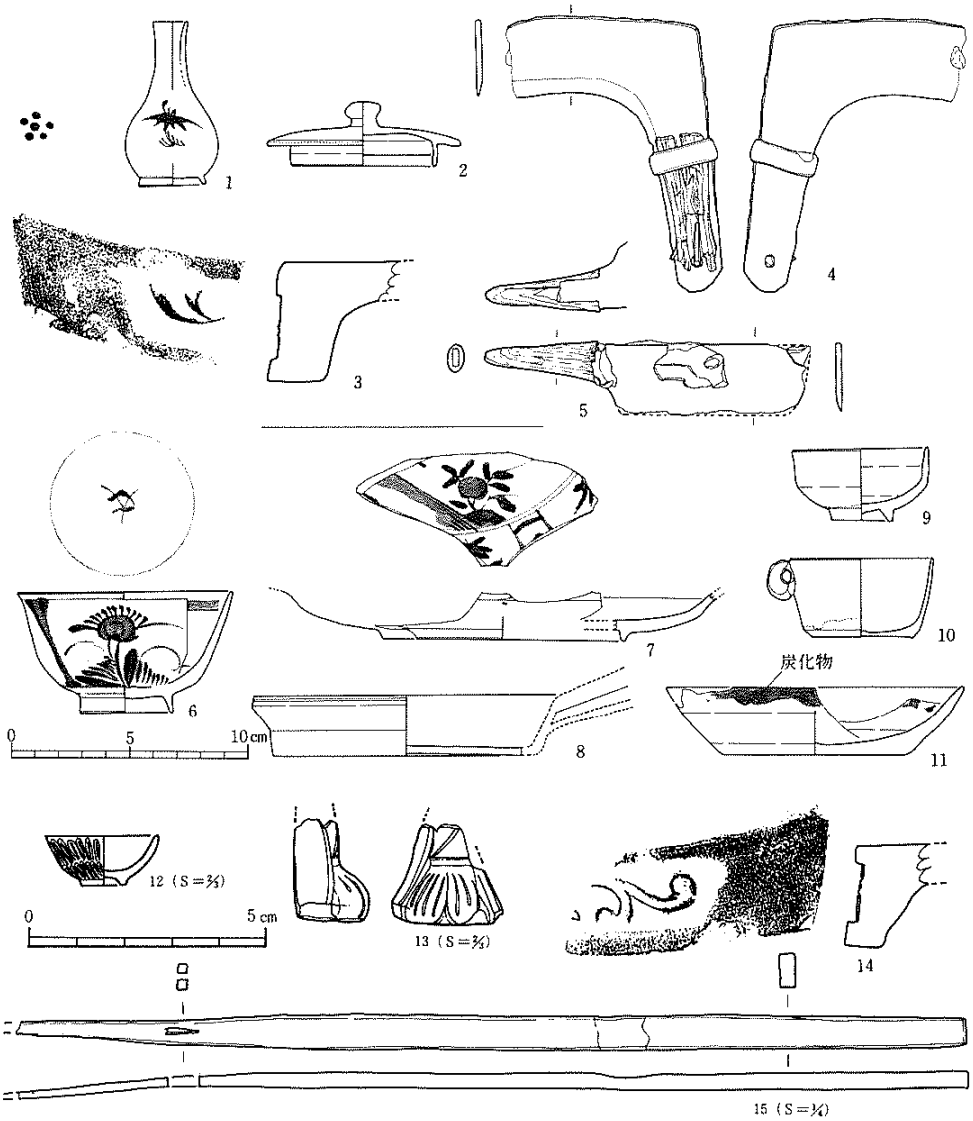
改修前の池は、丸太を杭でおさえて土留めをしたのちに拳～頭大の礫を裏込めして池の外郭を造り出し、東端と西端には柵を設けていたようである。柵の一部とみられる径5～6ｃmの杭が、尖った先を池の外側へ向けて平行して倒れており、柵が池の中央へ向かって一度に倒壊した状態を示していた。東端の2股の突出部は取水に関係する遺構の可能性があり、西側の底部には丸太材が組まれている。

池の改修は東端と西端でなされている。板あるいは丸太を杭でおさえ土留めをしたのちに礫を裏込めし（第9・10図・写真図版5）、池の両端の外郭を狭めている。西端には西へ傾斜する幅40ｃm、深さ30ｃm程の溝が取りついており、この溝は改修後の池の排水溝とみられる。

池の改修時に同時に埋め立てられたと思われるＳＥ52井戸跡の埋土と改修後の池の最下層から、「明和四」年（1767）の刻印を持つ軒平瓦（第15図3）が出土した。この軒平瓦と出土陶磁器の年代を考え合わせると、池の構築年代はおそらく18世紀後半頃であり、19世紀代になってから改修されたものと推定される。

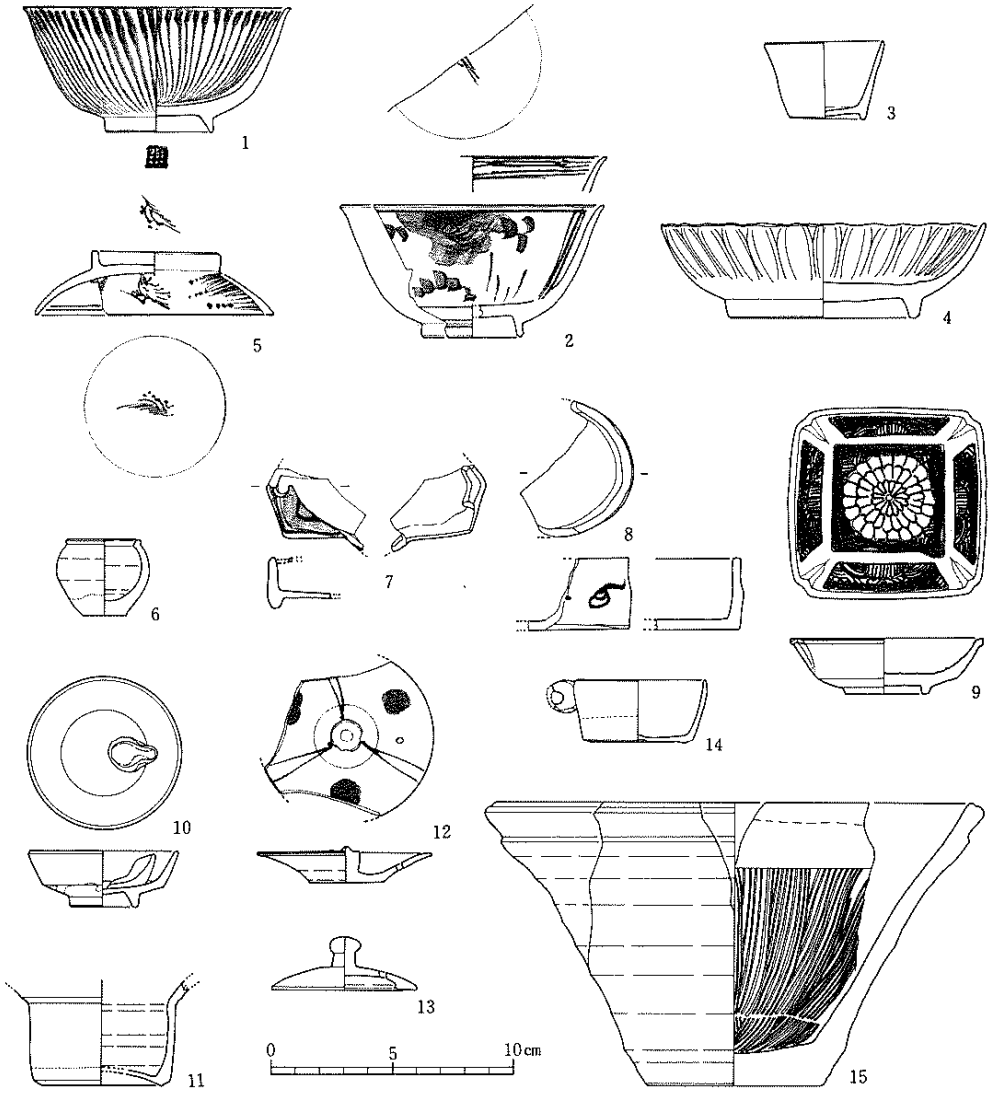
池の中からは遺物が比較的まとまって出土している。陶磁器類（碗類・皿類・猪口・鬢水入れ・土瓶・ほうろく・摺鉢・植木鉢・水滴・餌入れほか）、土師質・瓦質土器類（灯明皿ほか）、瓦類（軒平瓦・軒桟瓦・桟瓦ほか）、土製品（人形）、石製品（硯・碁石・燈籠ほか）、金属製品（銭貨・煙管・鎌・包丁・釘ほか）、木製品（漆器碗・曲げ物・杓の柄ほか）など多種多様である。改修以前の堆積層と改修時の整地層・盛土内からは遺物はやや少ない。第11図1～5が改修以前、6～15が改修時の整地（盛土）・裏込、第12図・第13図が改修後の堆積層内からの出土である。

第11図1は松竹と梅花文を施した高さ7.0ｃmほどの御神酒徳利で、口縁部が外へやや開く。2は灰釉を施した土瓶の蓋。3は軒平瓦の一部で、このタイプの唐草文を持つのはこれのみである。4は鉄鎌、5は包丁、いずれも柄の木質部を残している。6は3単位の花文を施した弱い端反りの碗、7は芙蓉手の皿である。これらはそれぞれ19世紀前半、17世紀中頃の肥前産である。8は堤の把手付きのほうろく、9は大堀相馬の灰釉小碗である。10は内外に灰釉を施した鳥の餌入れで、第12図14も含め同様のものが少なくとも5個体出土している。11は炭化物付着の灯明皿、12は型づくりの紅皿、13は頭部を欠損した素焼き



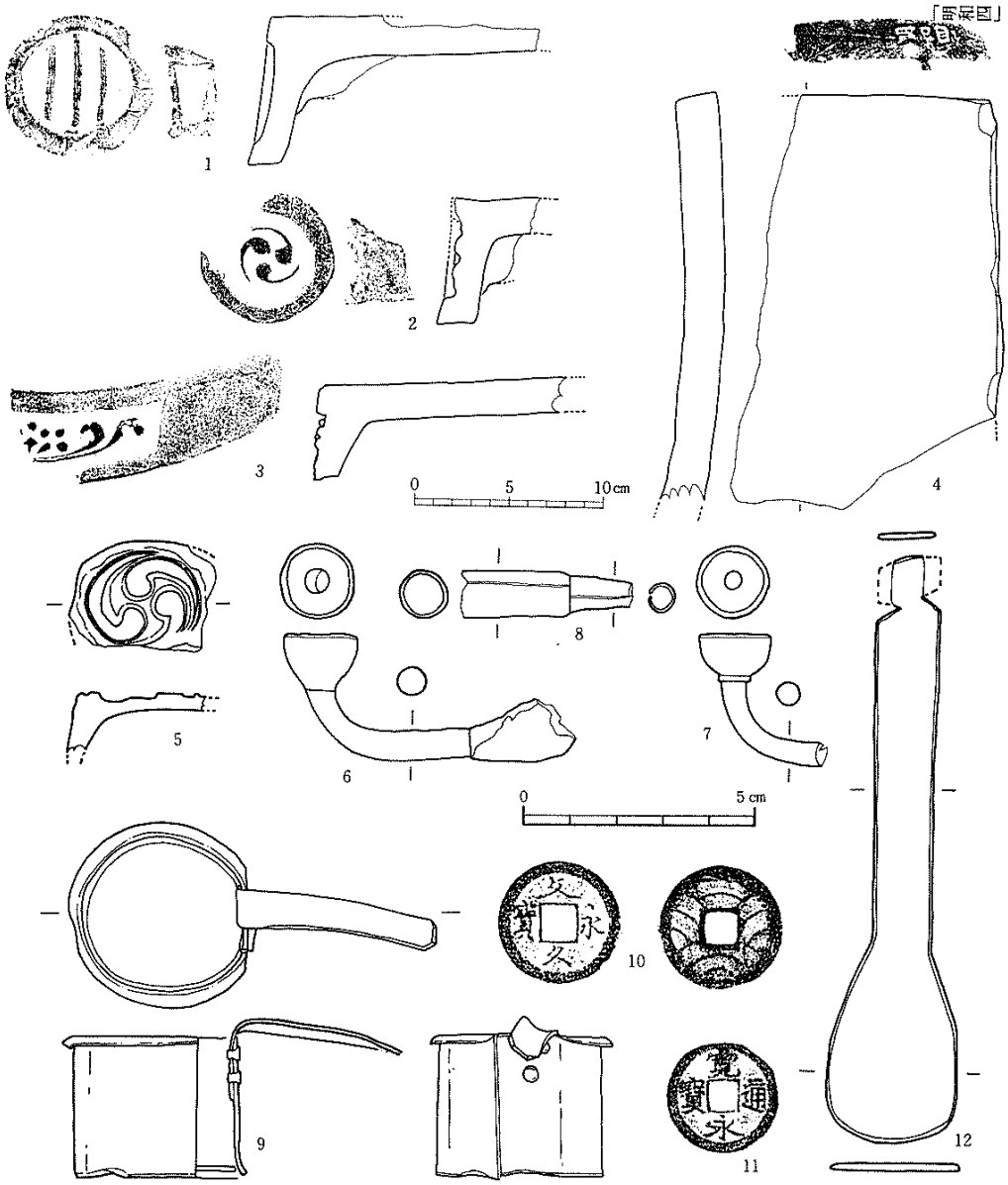
No.	層位	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴	産地	図版No.
1	X	磁器 御神酒徳利	1.5	2.8	7.0	染付。松竹＋梅花文。18世紀～19世紀	肥前	8－9
2	XⅠa	陶器 土瓶蓋	8.2	－	2.7	平蓋。乳白色の灰釉。貫入著しい。	大堀相馬	9－5
3	X	軒平瓦	瓦当面高5.2 瓦当厚さ5.0			左端唐草文部のみ残存。唐草子葉の先端Y字形。		9－12
4	IX	鉄鎌	刃部幅3.3			先端部欠。柄部木質一部残存。鉄錆著しい。		10－1
5	Ⅶ	包丁	全長(13.8)、刃部幅2.9			刃部一部欠。柄部木質一部残存。鉄錆著しい。		11－5
6	Ⅵb	磁器 飯碗	9.3	3.3	5.1	染付。弱い端反り。外面草花文3単位、見込み文は？19世紀前半。	肥前	8－1
7	Ⅵa	磁器 皿	－	－	－	染付。芙蓉手。17世紀中。	肥前	8－5
8	Ⅵa	陶器 ほうろく	(12.8)	2.6	5.1	内外面赤褐色鉛釉。把手部欠。19世紀前半。	堤	8－15
9	Ⅵa	陶器 小碗	5.8	2.6	3.0	灰釉。高台部露胎。貫入著しい。18世紀後半－19世紀。	大堀相馬	8－14
10	Ⅵa	陶器 餌入れ	6.1	4.1	3.3	把手付き。内外面灰釉。底部無釉。底部回転ヘラ削り。	瀬戸・美濃	9－1
11	Ⅵa	土師質 灯明皿	(12.6)	7.7	2.9	口縁部内外面に炭化物付着。底部に回転糸切り痕。		9－3
12	Ⅵa	白磁 紅皿	2.4	0.9	1.0	型押し成形。		8－11
13	Ⅵa	土製人形	残存高2.1			素焼き。頭部欠。		9－13
14	Ⅵa	軒平瓦	瓦当面高(4.2) 瓦当厚さ1.7			左端唐草文部分。唐草子は重線。中央には雲持ち菅か？。		9－10
15	Ⅵa	杓の柄	長さ53.4 幅1.8 厚さ0.9			先端一部欠。先端に器を固定するための穴有り。		10－6

第11図　SX50池跡出土遺物(1)



No.	層位	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴	産地	図版No.
1	Ⅳ	磁器 飯碗	11.0	4.4	5.2	染付。端反り。内外面に縦縞文、高台内に方形の変形文字。19世紀前。	肥前	8－2
2	Ⅲ	磁器 飯碗	(11.0)	(4.0)	5.5	染付。端反り。花文の染付青み強い。明治期。	平清水	8－4
3	Ⅳ	白磁 猪口	5.0	3.2	3.2	蛇付きから口縁部にかけて直線的。蛇付きを除き全面施釉。	肥前	8－8
4	Ⅲ	磁器 輪花皿	13.4	7.8	3.9	胎土は灰色味がある。32弁。見込は蛇の目釉剥ぎ。19世紀。	切込	8－6
5	Ⅲ	磁器 碗蓋	9.9	5.3	2.6	染付。外面は楊柳と雀文。高台内と見込に雀文。19世紀。	肥前	8－3
6	附属溝	磁器 豆壺	3.1	1.8	3.2	内外面鉄釉、外面底部は無釉。		8－10
7	Ⅲ	磁器 水滴	－	－	(2.2)	染付。上面上絵。		8－12
8	Ⅲ	磁器 餐水入れ	－	－	3.0	染付。宝珠文。19世紀。		8－13
9	Ⅳ	磁器 手塩皿	口縁部一辺8.2、底部3.7		2.3	型造り。菊花文。染付青み強い。明治期。	平清水	8－7
10	Ⅴ	陶器 灯明皿	6.2	2.3	2.3	内外面鉄釉。底部無釉。芯受け有り。19世紀。	上の目	8－16
11	Ⅲ	陶器 灯明台	－	－	(5.0)	内外面鉄釉。底部回転ヘラ削り。19世紀。	大堀相馬	8－17
12	Ⅳ	陶器 土瓶蓋	7.2	－	3.0	落し蓋。灰釉。鉄絵。	大堀相馬	9－6
13	Ⅳ	陶器 土瓶蓋	6.0	－	2.2	山蓋。灰釉。貫入著しい。	大堀相馬	9－4
14	Ⅲ	陶器 餌入れ	5.3	3.9	4.6	把手付き。内外面灰釉、底部無釉。貫入著しい。底部回転ヘラ削り。	瀬戸・美濃	9－2
15	Ⅱ・Ⅵb	陶器 擂鉢	(20.6)	7.2	11.7	内外面鉄釉。口縁部灰釉。櫛目9条1単位。		9－7

第12図　SX50池跡出土遺物(2)



No.	層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	特徴	図版No.
1	Ⅲ	軒桟瓦	瓦当面径5.7 瓦当厚さ1.6			三引両文。	9－8
2	Ⅰ・Ⅱ	軒桟瓦	瓦当面径6.1 瓦当厚さ1.7			三つ巴文。	9－9
3	Ⅲ	軒桟瓦?	瓦当面高(5.8) 瓦当厚さ1.4			中心飾り右半分から唐草文部残存。	9－11
4	Ⅴ	軒平瓦?	体部厚さ2.2			尻部に「明和四」の刻印。図15－3と同種の軒平瓦か。	
5	Ⅴ	土製品				素焼き。三つ巴文。	9－14
6	Ⅴ	煙管	残存長6.2 火皿径1.5			銅製雁首。肩付き。	9－15
7	Ⅰ・Ⅱ	煙管	残存長2.8 火皿径1.5			銅製雁首。肩付きか？補強帯有り。	9－16
8	Ⅲ	煙管	残存長3.7			銅製吸口。肩付き。	9－17
9	Ⅴ	銅製品	全長7.3 高さ3.0 径4.0			用途不明。	9－20
10	Ⅳ	銭貨	径2.6			文久永宝。四文銭。	9－18
11	Ⅳ	銭貨	径2.4			古寛永。	9－19
12	Ⅴ	木製品	16.6	3.7	0.2	用途不明。しゃもじ形、基部に抉りあり。	9－5

第13図　SX50池跡出土遺物(3)

の土人形である。14は軒平瓦の右端の一部で、唐草文のタイプは前に述べた3とは異なり中央に雪持ち笹を配するものである。15は杓の柄であろう、残存長53.4ｃｍを計る。

第 12 図 1 は縦縞文を内外面に施した端反り碗で、高台内に方形の変形文字がみられる。2 の青みの強い染付をした端反り碗は、明治期の平清水の製品である。3 の白磁猪口は、底部から口縁部にかけて直線的にひらく。4 は胎土がやや灰色味を帯びた切込産の輪花皿である。見込には蛇の目釉剥ぎがなされている。5 は稲束と雀文の碗蓋で、雀文は高台内と見込にもみられる。6 は外面底部を除き内外面に鉄釉を施した豆甕、7 は水滴、8 は宝珠文を描いた鬢水入れである。8 は磁器製であるが、陶器製のものも 1 点出土している。9 は平清水産の手塩皿で、染付は 2 と同様青みが強く、明治期の製品である。10 は上野目産とみられる鉄釉をかけた灯明皿、11 は口縁部が欠損しているが鉄釉を施した大堀相馬の灯明台である。12・13 は土瓶蓋、14 は鳥の餌入れ、15 は内外面に鉄釉、口縁部に灰釉を施した摺鉢で、櫛目は 9 条 1 単位である。

第13図1・2にはそれぞれ、三引両文、巴文をもつ軒桟瓦である。3は軒桟瓦の一部で、このタイプの唐草文は桟瓦の瓦当面のみにみられる。4は尻部に「明和四」年（1767）の刻印を持つ軒平瓦である。これと同タイプの瓦がＳＥ52井戸跡からも出土している（第15図3）。5は巴文の土製品。6・7は煙管の雁首で、いずれも脂返しの湾曲が大きく、肩付きである。7は火皿と首部の接合部に補強帯が巻き付けられている。8は煙管の吸口。9の用途不明の銅製品は、1枚の薄い銅板をまるめて筒状にしてから別の銅板を貼りつけて底部にし、一方の縁は外側へ折り返して、さらに把手状のものを貼り付けている。10は文久永宝4文銭、11はいわゆる古寛永である。12は薄い板状のしゃもじ型木製品で、基部にえぐりがある。用途は不明。

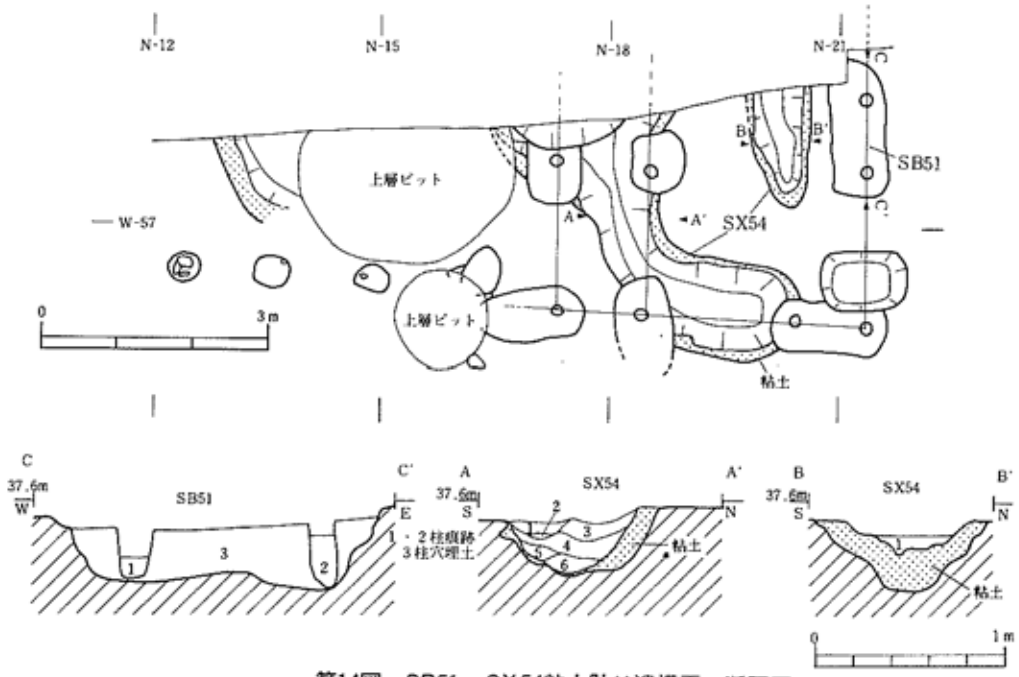
【ＳＸ51】調査区の中央付近で、2層（耕作土）を取り除いた3ｄ層面で検出。ＳＢ50礎石建物を切る。南北約5.8m、東西約4.1m、深さは約0.5m。埋土は大きく3層に分けられ、埋土Ⅰ層が盛土、Ⅱ・Ⅲ層が砂・シルト質粘土の水性堆積層である。遺物は、埋土Ⅰ層からごく少数の陶磁器、瓦の細片が出土したにすぎない。

その他の遺構と出土遺物

1)井戸跡（第 4・10 図）

井戸跡は3基検出されている（ＳＥ50～52）。いずれも平面形が円形で素掘りのものである。遺物の出土している2基について説明する。

【ＳＥ51】ＳＸ50池跡の西端で検出された（第10図）。径1.2mで深さは確認面から1.5m以上ある。池の構築以前につくられ機能していたもので、池の構築時に埋め立てられている。この井戸の構築時期は6層面検出のＳＸ52石列・ＳＤ50溝跡と近いものと思われる。埋土か



第14図　SB51 、SX54粘土貼り遺構平・断面図

らは第15図1の17世紀前半頃の志野鉄絵丸皿が出土した。

【ＳＥ52】ＳＸ50池跡の南東隅の石組部で検出された径1.2m程の井戸である（第10図）。池の改修時に同時に埋め立てられている。埋土からは「明和四」年（1767）の刻印がある雪持ち笹文軒平瓦（第15図3）と若干数の陶磁器片（第15図2）が出土している。

2)粘土貼り遺構（第４・14図）

不整形な土坑・溝状の遺構の壁面に10ｃm程度の厚さで白色粘土を貼り付けたもの。調査区の南西部で確認された。

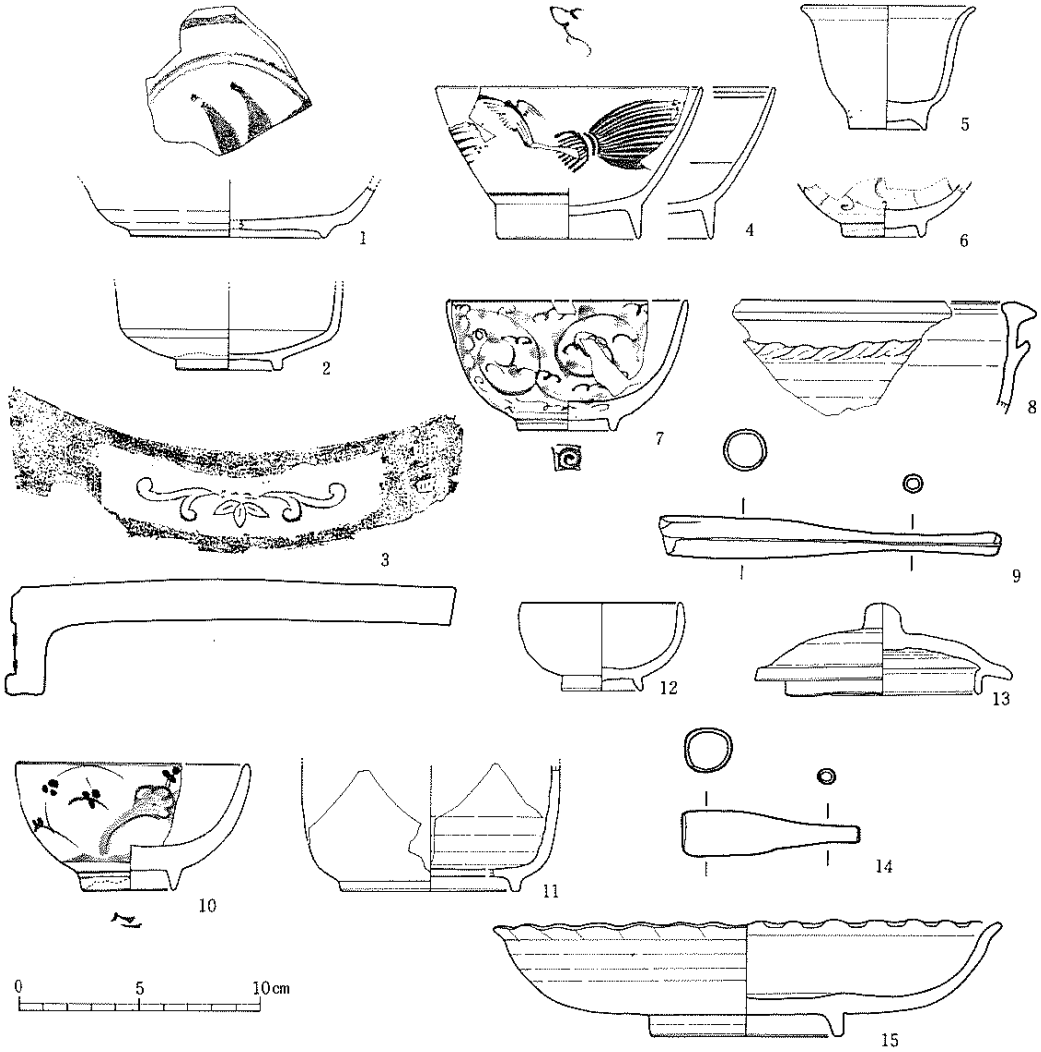
【ＳＸ53】東側が撹乱のため失われており全体形は不明であるが、長軸2.4m、深さ80ｃｍほどの楕円形をした土坑と思われる。粘土の厚さは、最も厚いところで6ｃm程度である。堆積層は3層に区分できるが、水の痕跡を示す堆積は明瞭には認められなかった。底部付近から第15図4の広東碗タイプの飯碗が出土している。

【ＳＸ54】西区4ａ層下で検出（第14図）。不整形な溝状をなす。幅0.8～2.5m、深さ40ｃm、粘土厚は最大で25ｃm。ＳＢ51掘立柱建物跡に切られている。やはり水の影響を示すような堆積層は認められなかった。遺物は出土していない。

3)土壙（第４・14図）

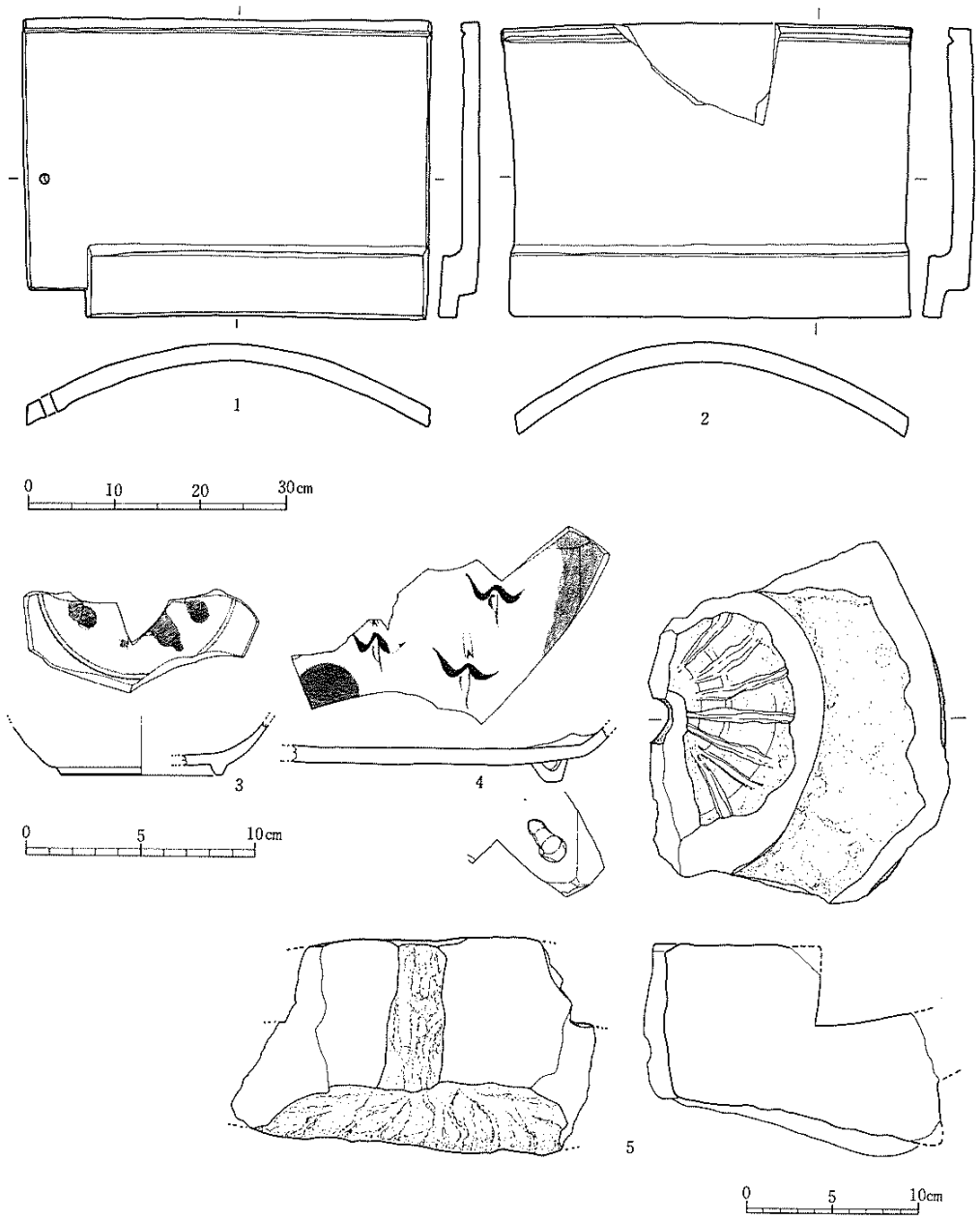
土壙は20基前後が検出されており、検出面も各層に及んでいる。分布は調査区西南隅・北部に多く、規模・形状もさまざまである。遺物の出土している数基について説明する。

【ＳＫ50】北東隅の地山面で検出され、ＳＡ29に切られている。平面形は隅丸の不整方形状を



No	地区－遺構－層位	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴	産地	図版No.
1	50－SE51－2	陶器皿		8.0	(2.1)	志野。長珪石釉で色調は淡黄色2.5Y8/3 。見込に鉄絵で楓？文。貫入あり。	美濃	11-1
2	58－SE52－1	陶器茶碗		4.3	(3.5)	外面の腰から高台部を除き、鉄釉（色調は暗赤褐色5YR3/6）。	瀬戸	11-2
3	58－SE52－1	軒平瓦	全長25.6cm・幅25.0cmの完形。中央に聳持ち笹文を配し、左右対象に唐草文。瓦当面・瓦尻に「明和四」の刻印				地元	11-3
4	22－SX53－2	磁器飯碗	11.0	5.8	6.3	染付広東碗。外側面に植東に雀文。見込文様あり。	肥前	11-4
5	71－SK50－8	磁器小碗	7.2	3.2	5.1	染付。高台に三重の圏線。端反りで高台断面形は三角形。	肥前	11-5
6	71－SK50－9	磁器飯碗		3.4	(2.5)	染付。外側面に唐草文。下端から高台部に三重の圏線。	肥前	11-6
7	61－SK51－1	磁器飯碗	9.9	4.1	5.4	染付。外側面に唐草文。高台には一重方形枠内に簡略化した渦「福」銘。	肥前	11-7
8	61－SK51－1	瓦質土器鉢			(4.8)	色調は黒色10YR1.7/1 。口縁部に縞状の突帯。		
9	61－SK51－1	煙管	銅製の吸口。残存長7.0cm。全体に細味で長い。					
10	60－SK52－1・2	磁器飯碗	9.8	3.9	5.3	染付。くらわんか手。外側面に梅樹文。	肥前	11-8
11	60－SK52－1・2	陶器碗？		7.3	(5.2)	釜付を除き鉄釉（色調は極暗赤褐色7.5R2/3 ）。内面に黒色の油滴あり。	瀬戸	11-9
12	60－SK52－2	陶器蓋		8.0	3.8	天井部は鉄釉（色調は極暗赤褐色5YR2/4）。口縁部は透明釉。		
13	60－SK52－3	陶器小碗	6.6	3.4	3.7	灰釉（色調は灰白色7.5Y8/1 ）。貫入あり。高台部は露胎。	大堀相馬	11-10
14	59－SK52－4	煙管	銅製の吸口。全長3.6cm 。短く、羅宇側が大い。					
15	67－SK55－1	陶器中皿	21.0	8.0	4.7	口縁部内外になまこ釉。見込には青釉で渦文様。口縁部は輪花状。高台部は露胎。	唐津？	11-11

第15図　SE 51・52、SX 53、SK 50～52、55出土遺物



No.	地区－遺構－層位	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴	産地	図版No.
1	48－SX56－底面	伏間瓦	全長34.5cm・尻幅47.2cm、反り高7.3cm。前面に桟が付き、左隅に切り込み。尻側に水切り溝。左側縁に釘穴？					11-14
2	48－SE56－底面	伏間瓦	全長33.8cm・尻幅47.2cm、反り高7.3cm。前面に桟が付く。尻側に水切り溝。					11-15
3	12－SD50	磁器皿		7.0	(2.7)	染付。見込に唐草と花文。	肥前	11-12
4	12－SD50	陶器向付け			(2.8)	角形で四脚付き。見込に鉄絵雁文。	美濃	11-13
5	11－SX52	石臼（下臼）	安山岩製。縁付き。最大径約40cm・高さ約12cm。摺面は径約20cmで中央に径2.5cmほどの軸受け孔、放射状の目。					17-18

第16図　SK56・SD50出土遺物

呈し、規模は一辺が 3〜3.5m、深さは 15〜25ｃmである。底面は凹凸があり、壁は緩やかに立ち上がっている。堆積層は 4 枚認められ、7〜9 層が自然堆積層、6 層は人為的埋土である（第 17 図上）。8・9 層から第 15 図に示す染付磁器が出土している。5 は端反りの小碗、6 は唐草文の飯碗で、18 世紀代の肥前産と思われる。

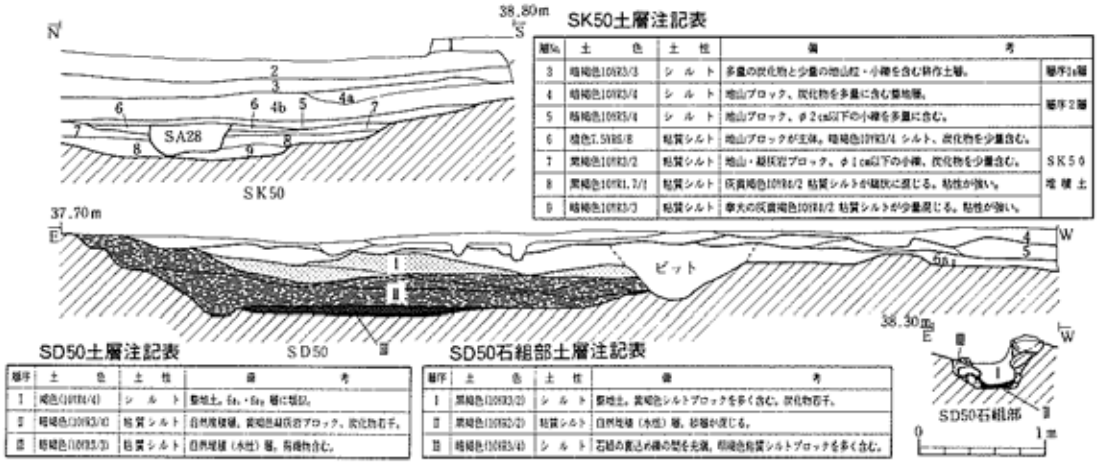
【ＳＫ51】東区3層面で検出され、ＳＢ53を切っている。平面形は不整円形で、規模は径が約1.4m、深さは40ｃmほどである。底面はほぼ平坦で、壁はやや急角度で立ち上がっている。堆積層は2枚認められ、1層は暗褐色、2層は黒褐色の砂質シルト層で地山粒や炭化物粒を含んでいる。1層中からは第15図7〜9に示す遺物が出土している。7は18世紀後半の肥前産の染付飯碗、8は縄模様の突帯を持つ瓦質の鉢で産地・年代は不明、9は18世紀後半以降の銅製の煙管吸口である。

【ＳＫ52】東区3層面で検出され、ＳＢ53、ＳＡ15〜18を切っている。平面形は東西に長い楕円形で、規模は長軸が約5m・短軸3.2m、深さは30〜45ｃmである。壁の立ち上がりは北側が急で、ほかは緩やかである。底面は中央部で軽い稜がつき、西側が10ｃmほど深くなっている。堆積層は暗褐色・黒褐色のシルト層・砂層など4層に大別される自然堆積層で、シルト層と砂層が互層になっている。

遺物は各層から出土しているが、1・2層に多く、第15図10〜14に主なものを示した。10は磁器、11〜13は陶器である。10は染付飯碗で、全体に丸味が強く厚手である。11は底径が大きく体部が直立気味に立ち上がる鉄釉の碗、12は鉄釉の壷の蓋と思われる。13は灰釉の小碗で腰部の丸味が強く、口縁部は内弯気味になる。14は煙管の吸口である。

これらの遺物は、18世紀中葉〜19世紀前半頃のもので、10は肥前産、13は大堀相馬産である。11・12の産地は不明である。

【ＳＫ55】ＳＸ50池跡東側の地山面で検出され、ＳＢ59や数個の柱穴を切っている。平面形は



SK50土層注記表

層No.	土色	土性	備考	
3	暗褐色10YR3/3	シルト	多量の炭化物と少量の地山粒・小礫を含む耕作土層。	層序1a層
4	暗褐色10YR3/4	シルト	地山ブロック、炭化物を多量に含む整地層。	層序2層
5	暗褐色10YR3/4	シルト	地山ブロック、φ2cm以下の小礫を多量に含む。	
6	橙色7.5YR6/8	粘質シルト	地山ブロックが主体。暗褐色10YR3/4 シルト、炭化物を少量含む。	SK50 埋積土
7	黒褐色10YR3/2	粘質シルト	地山・凝灰岩ブロック、φ1cm以下の小礫、炭化物を少量含む。	
8	黒褐色10YR1.7/1	粘質シルト	灰黄褐色10YR6/2 粘質シルトが凝灰に混じる。粘性が強い。	
9	暗褐色10YR3/3	粘質シルト	拳大の灰黄褐色10YR6/2 粘質シルトが少量混じる。粘性が強い。	

SD50土層注記表

層序	土色	土性	備考
Ⅰ	褐色(10YR4/4)	シルト	整地土。$Ⅱ_a$・$Ⅱ_b$層に類似。
Ⅱ	暗褐色(10YR3/4)	粘質シルト	自然堆積層。黄褐色凝灰岩ブロック、炭化物若干。
Ⅲ	暗褐色(10YR3/3)	粘質シルト	自然堆積（水性）層。有機物含む。

SD50石組部土層注記表

層序	土色	土性	備考
Ⅰ	黒褐色(10YR3/2)	シルト	整地土。黄褐色シルトブロックを多く含む。炭化物若干。
Ⅱ	黒褐色(10YR3/2)	粘質シルト	自然堆積（水性）層。砂層が混じる。
Ⅲ	暗褐色(10YR3/4)	シルト	石組の裏込め礫の間を充填。明褐色粘質シルトブロックを多く含む。

第17図　ＳＫ50・ＳＤ50断面図

東西にやや長い不整円形で、規模は長軸 2.4m、短軸 2.0m、深さは 70ｃｍほどである。底面・壁面にはわずかに凹凸がある。堆積層は 2 枚認められ、いずれも暗褐色シルトを主体とする自然堆積層である。1 層から第 15 図 15 に示す輪花皿が出土している。見込みに青釉で渦文が描かれ、口縁部内外面になまこ釉が掛かる。18 世紀前半頃の唐津産の製品と思われる。

【ＳＫ56】ＳＸ50 池跡の南側の 6 層面で確認した（第 10 図）。長辺 94ｃｍ・短辺 70ｃｍの長方形を呈し、深さは約 15ｃｍである。底部には第 16 図 1・2 に示した大棟にのせる伏間瓦が敷かれていた。1 の瓦は全長 34.5ｃｍ、幅 47.2ｃｍと大型である。これらの瓦は割ってから敷かれたらしいが、接合すると図示した 2 点も含めてちょうど 3 個体分であった。

4)溝跡（第 4 図）

溝跡は各整地層面・地山面で検出されており、大小13条を数える（第4図）。これらの中で比較的規模の大きいのは以下のＳＤ50とＳＤ52である。

【ＳＤ50】西区の6層面で検出。ＳＸ52石列にほぼ平行し、南へ傾斜しながら広がっている。南側の広い部分では幅約5m、深さ70ｃｍ、北側の起点部分では幅0.8～1.4m、深さ40ｃｍを計る。この溝の起点部分には、角礫を2～3段積み重ねた長さ1.6m、幅70ｃｍの石組溝が取り付く（第4・17図）。この石組部の北側の一部はＳＢ52掘立柱建物跡の柱穴掘り方によって壊されているが、石組はこれ以上北側へは続かずこの区域で終わっている。一方、この石組の延長線上には、前面を東側へ向けた1列の石列が痕跡的に残っており北側へ延びている（第4図）。この石列は、溝が付属していた建物に関連していたことも考えられ、この時期の建物群の方向を示している可能性がある。溝の中からは若干の陶磁器・瓦が出土したにすぎないが、陶磁器類は17世紀に属するもので、なかには江戸初期の肥前産の扇文皿（第16図3）、美濃産の鉄絵向付（第16図4）などが含まれる。

【ＳＤ52】ＳＢ57とＳＩ01との間を南西から北東方向に走る溝で、地山面で検出された。ＳＩ01、ＳＤ51を切り、ＳＢ57に切られている。規模は上幅が1.5～3m、下幅が1.5m、深さ35～40ｃｍで、残存長は約15mである。底面はほぼ平坦で、南側から北側にかけてわずかに傾斜しており、ＳＡ11の南側で削平のためか不明瞭になる。

堆積層は3層に大別され、1層は東区の地山直上の整地層である5・6層、2層は暗褐色シルト層、3層は黒褐色粘土層である。1・2層からは土師器片が若干出土している。

5)石列（第 4 図）

主に西区の4ａ層、6ｂ層面で検出されている。4ａ層検出の石列は、前にも述べたようにＳＢ50礎石建物跡付近にみられ、その一部は礎石建物との関連が考えられる。6ｂ層検出の石列は、以下で説明するＳＸ52のほかにＳＢ52掘立柱建物跡付近で少なくても3列確認され

ている。
【ＳＸ52】西区の6ｂ層面で検出。径20ｃｍ程の礫を1～2段に積む石列で、中央付近から南西方向へ26mほど直線的に伸び、調査区の壁際で西側へ曲がる。この石列を確認した6ｂ層面は南西部の神社側へ傾斜しており、石列もこれに沿って傾斜しているので、中央部と南西隅では1.3m～1.5mほどの高低差がある。石列の方向は、中央部から北側で数多く検出されている掘立柱建物群や礎石建物のいずれとも合わないが、何らかの区画的な施設と考えられる。なお、石列の礫に第16図5に示した安山岩製の石臼（下臼）が転用されていた。

6)整地地業

【西区】

層序の項でも述べたようにもともと西の神社側へ傾斜する地形であったため、整地層は何度にもわたって行なわれており、部分的なものも含めれば第5図の土層断面図に示したように数多くの層を認識することができる。これらの中には同時の整地を細分している場合もあるのでもう少し整理して考えると、西区では少なくとも以下の7段階の整地が捉えられそうである。

第Ⅰ段階（6～8層）：西側へ傾斜する旧表土を覆い、平坦面もしくは緩斜面を形成する、ほぼ西区全域にわたる整地である。出土陶磁器から、17世紀代の整地と考えられる。

第Ⅱ段階（5層）：中央部付近のみの整地。部分的に平坦面を形成するためのものであろう。

第Ⅲ段階（4層）：中央付近から南西部にかけて行なわれる。平坦面の形成と礎石建物の基壇状の高まりを造る。18世紀代と推定される。

第Ⅳ段階（3ｄ層）：中央部付近のみの整地。部分的な平坦面形成である。

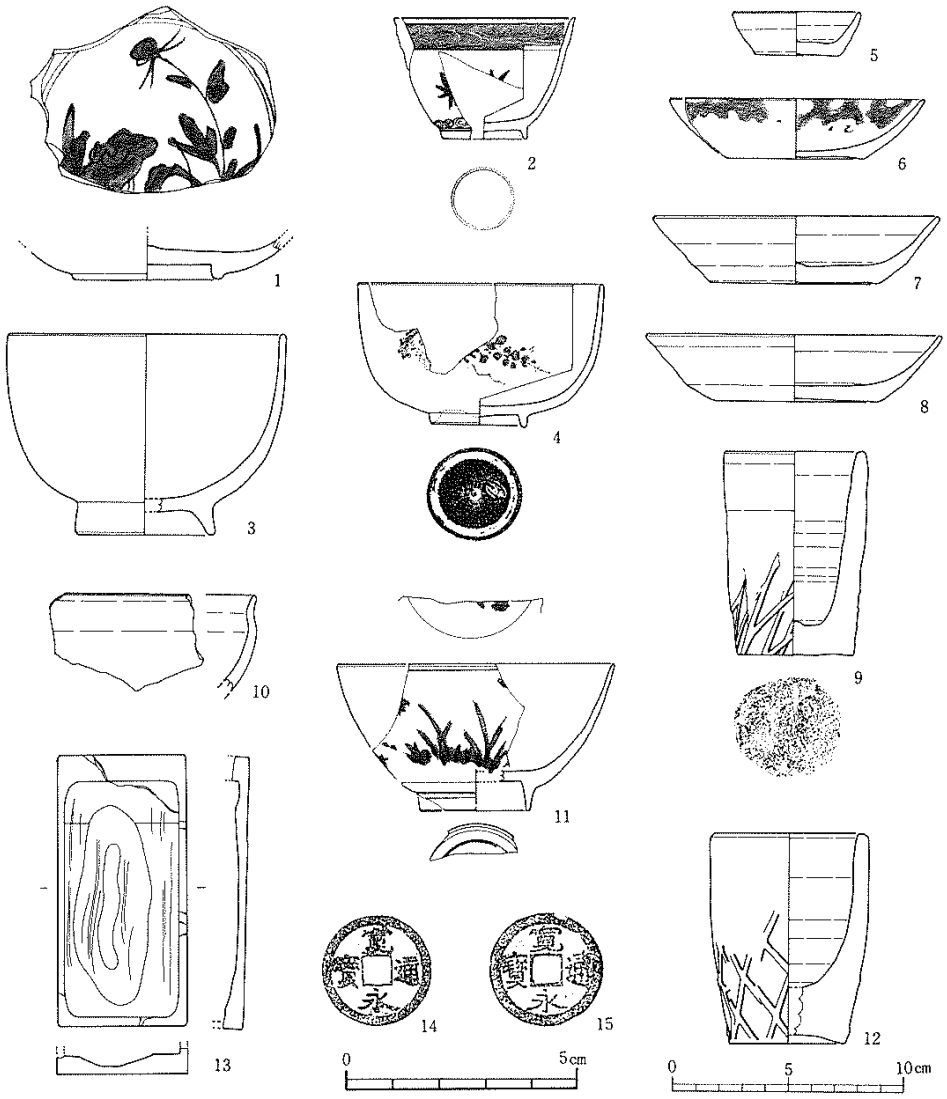
第Ⅴ段階（3ｃ層）：建物に伴うと見られる段の形成である。南西部区域のみに分布する。遺物がほとんどなく時期は不明確であるが、18世紀後半あるいは19世紀代であろう。

第Ⅵ段階（Ⅲ層）：中央付近のみに見られる。炭化物・瓦（棟込め瓦・丸瓦など）の出土が多く、火災に伴う可能性がある。18世紀後半あるいは19世紀前半と推定される。

第Ⅶ段階（3ｂ層）：3ｃ層による南西部の段をなくし平坦面を形成するためのものであろう。南西部のみに認められる。19世紀後半と推定されるが、近代以降の可能性もある。

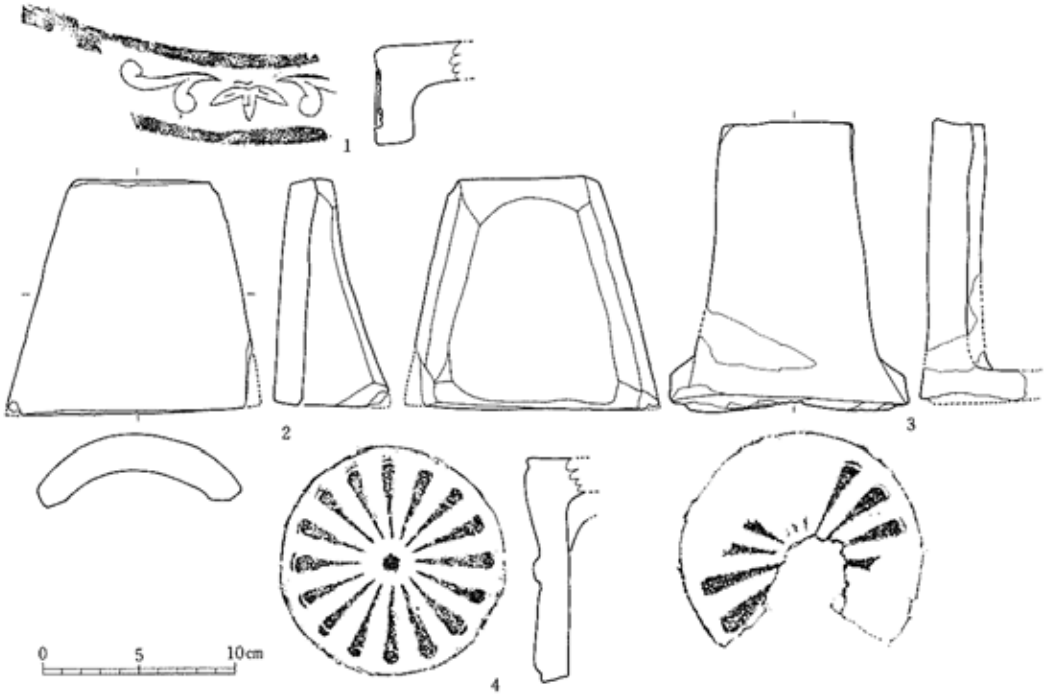
これらの整地地業は、層の特徴・遺構との関連からおおまかに設定されるものであり、これら以外にも局所的な小規模の整地は数多くなされている。

西区からは陶磁器、土師質・瓦質土器類、瓦類、土製品、石製品、金属製品、古銭など多種多様な遺物が出土しているが、量的には少なくコンテナ5箱分ほどである。第18・19図に、Ⅲ層、4～6層出土の主な遺物を示した。第18図1・第19図1～4がⅢ層（第Ⅵ段階）、第18図2～9が4層（第Ⅲ段階）、第18図10が5層（第Ⅱ段階）、第18図11～15が6層



No.	地区－層位	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴	産地	図版No.
1	40－Ⅲ	磁器皿		6.4	(1.8)	染付。釉はやや白濁。見込に牡丹文。	肥前	13-2
2	31－4	磁器猪口	7.8	3.6	5.3	染付。外面口縁部に墨弾きによる菊唐草文。腰部に渦文と2重圏線。体部文様は花か？	肥前	14-7
3	49－4	陶器飯碗	12.0	6.0	8.7	色調は浅黄色2.5Y7/4 。貫入あり。	美濃	15-9
4	31－4	陶器飯碗	10.5	4.1	6.1	色調は浅黄色2.5Y7/3 で外側面に鉄絵の葡萄文。貫入あり。高台内に楕円枠「清閑寺」？刻印	京都	15-13
5	31－4	灯明皿	5.5	3.6	1.9	土師質土器（カワラケ）。底部に回転糸切り痕。口縁部の一部に煤付着。		15-5
6	31－4	灯明皿	11.0	6.0	2.6	土師質土器（カワラケ）。底部に回転糸切り痕。口縁部内外面に煤付着。内外面ミガキ調整。		
7	40－4	皿	12.4	7.2	3.0	土師質土器（カワラケ）。底部に回転糸切り痕。		
8	40－4	皿	12.8	7.0	2.9	土師質土器（カワラケ）。底部に回転糸切り痕。		
9	40－4	焼塩壷	6.2	5.0	8.8	下半部に斜格子状のタタキ目。内面は大熱で赤変。底部に回転糸切り痕。	地元	17-13
10	22－5	天目茶碗			(4.2)	鉄釉（色調：黒褐色5YR2/2）。	美濃	15-11
11	48－6	磁器飯碗	12.0	4.6	6.4	染付。外側面に草花文、腰から高台部に三重の圏線。高台内に一重の圏線。貫入あり。	肥前	12-1
12	58－6	焼塩壷	6.8	5.0	9.1	下半部に斜格子状のタタキ目。内面は大熱で赤変。底部に回転糸切り痕。	地元	17-12
13	49－6	硯	粘板岩製の長方硯。長さ11.8cm・幅5.5cm 。硯面に凹状の使用痕。					17-17
14	39－6	銭貨	古寛永通宝。初鋳年は寛永３年(1626)。					18-14
15	48－6	銭貨	古寛永通宝。初鋳年は寛永３年(1626)。					18-15

第18図　西区整地層出土遺物(1)

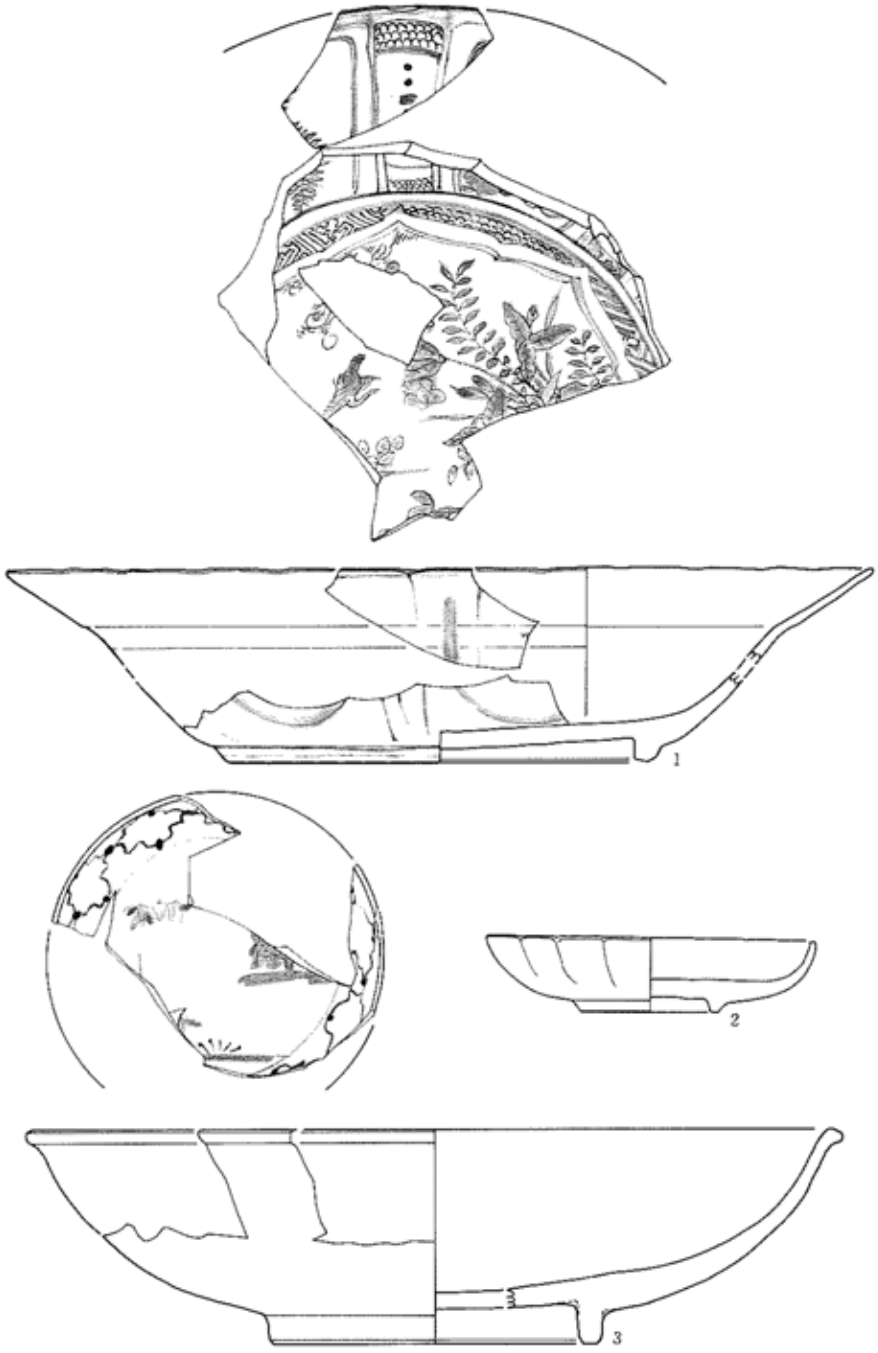


No	地区－層位	器種	特徴	図版No.
1	40・41－Ⅲ	軒平瓦	中央に雪持ち笹文を配し、その両側に唐草文を対称に配する。瓦当幅は5.1cm 、厚さ2.1cm 。	18-3
2	40－Ⅲ	棟込瓦	全長12.1cm、狭端幅は6.9cm 、広端幅は11cmほど、厚さ1.9cm 。凸面・凹面の周縁にはナデ調整、凹面には布目痕。輪違い。	18-5
3	40・41－Ⅲ	棟込瓦	16弁菊丸瓦。平縁で花弁・中房が盛り上がる。瓦当面直径12.6cm、厚さ1.6cm 。全長14.7cm、狭端幅8.7cm 、厚さ2.0cm 。	18-1
4	40・41－Ⅲ	棟込瓦	16弁菊丸瓦。平縁で花弁・中房が盛り上がる。瓦当面直径11.8cm、厚さ1.5cm 。	18-2

第19図　西区整地層出土遺物(2)

（第Ⅰ段階）出土の資料である。

第18図1は底部に厚みがあり、くすんだ釉調を持つ肥前産の皿で、17世紀中ごろのものである。2の猪口は、外面口縁部に墨弾きによる菊唐草文、腰部に渦文を施している。3は美濃のおおぶりの碗で、高台が高く腰部に丸味をもつ。4の葡萄文をもつ京焼きの碗は底部に「清閑寺」の刻印がなされている。5・6は素焼の灯明皿で、口縁部に炭化物の付着がある。7・8は土師質の皿（カワラケ）である。4層での出土が比較的多い。9は下半部に格子状のたたき目をもつ焼塩壷で、県外では類品を見ない資料である。10は天目茶碗、11は暗緑灰色の染付による草花文を描いた飯碗である。11は17世紀後半頃の肥前産の製品であろう。12は9と同様、格子状のたたき目を持つ焼塩壷であるが、9に比べ底部にやや厚みがあり、口縁部も広い。13の粘板岩製の硯は、使用のためか中央部が凹状になっている。14・15はいわゆる古寛永と称される寛永通宝である。6層からはこの2点を含め計3点寛永通宝が出土しているが、いずれも古寛永である。調査区中央付近のⅢ層からは瓦がまとまって出土しており、第19図2～4のような棟込め瓦類が特に多かった。1は雪



0 5 10cm

No.	出土地区	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴	産地	図版No.
1	43・51	磁器大皿	(36.6)	17.7	(8.2)	染付美容手。折れ縁稜花状口縁。高台内にカンナ目。内側面に草花文と宝尽文。見込に花鳥文。	中国	13-1
2	43・44	磁器皿	14.0	5.8	3.2	染付。型打ち成形。稜花状口縁で鉄釉の口紅。見込に花紋文。畳付に砂粒の付着が多い。	肥前	13-3
3	51・52	青磁大皿	34.5	13.6	9.1	口縁部が緩く折れる。見込みに陰刻菊文様。	肥前	13-7

第20図　東区第Ⅰ段階整地層出土遺物(1)

持ち笹文の軒平瓦、2 は輪違い、3・4 は 16 弁の菊丸である。

【東区】

東区の整地層の分布・整地層における遺構の検出状況などについては層序の項で述べているが、おおまかには以下の 3 段階の整地として捉えられそうである。

第Ⅰ段階（4・5 層）：断面観察からはさらに細分される層であるが、平面的には層の違いを区別できなかったこともあり、大きく一つの段階として捉えたものである。部分的に残る旧表土や地山面を覆う整地層で、館造成時の平坦面形成に伴うものであろう。削平の著しい南東部分を除くほぼ全域に分布する。出土遺物は 17 世紀代のものである。

第Ⅱ段階（2・3 層）：第Ⅰ段階の整地層の上位にあり、削平が少ない東壁沿い部分から北東部分にかけてのみ分布する。礎石建物構築に係わる整地と考えられる。出土遺物は 17 世紀～18 世紀代のものである。

第Ⅲ段階（2ａ層）：3 層とほぼ同様の範囲に分布するが、耕作による撹乱や削平を受けており、層の広がりは明確ではない。出土遺物は 17 世紀～19 世紀中頃のものである。

次に、東区整地層出土遺物について見てゆく。東区からは西区以上に多様な遺物が出土しており、量的にはコンテナで 20 箱以上に及んでいる。第 20～27 図に金属製品を除く段階ごとの主な遺物を、第 28 図には金属製品のうち主なものを示した。

【第Ⅰ段階】（第 20・21 図）

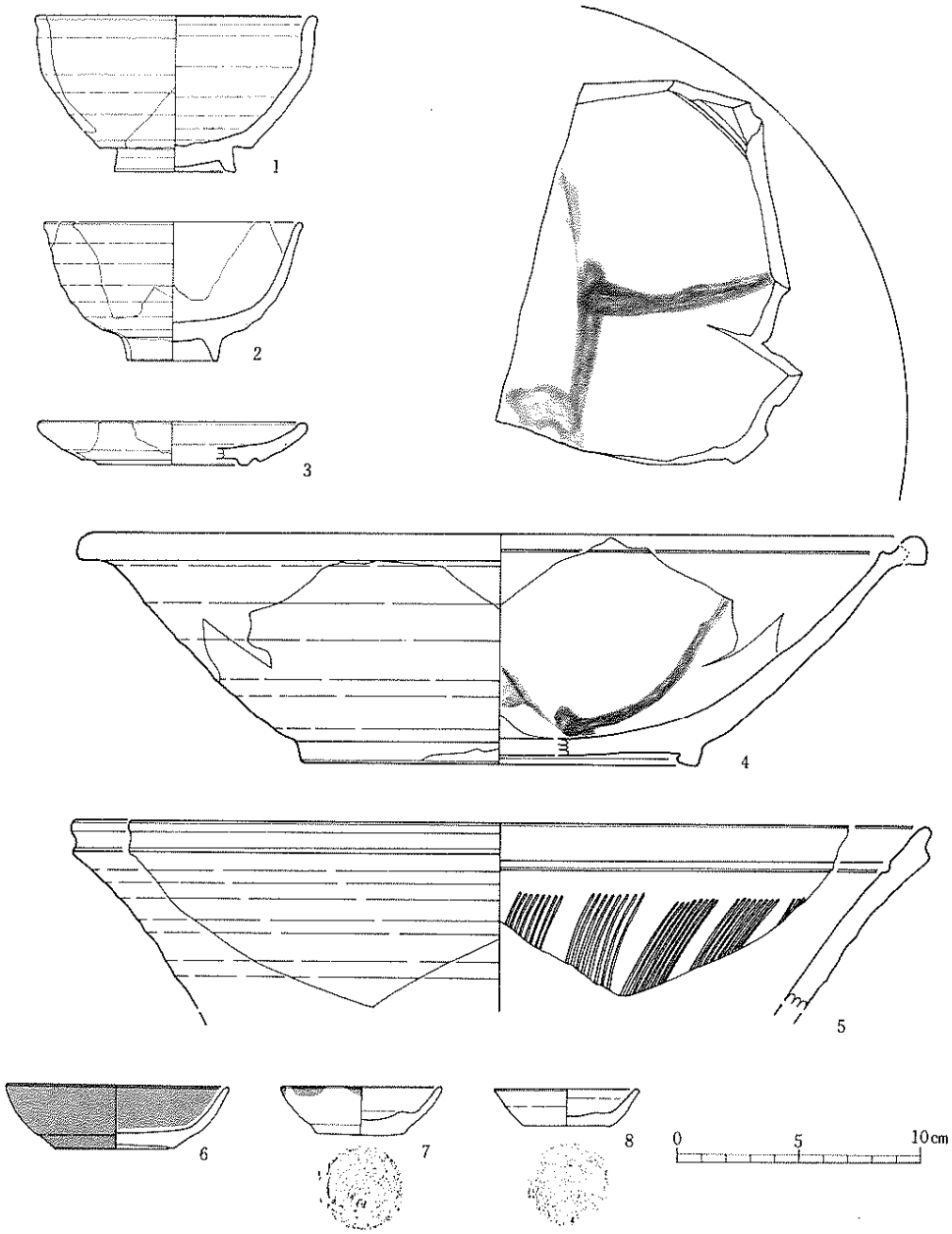
磁器（第 20 図）

1 は折れ縁の染付芙蓉手花鳥文大皿である。器壁は体部が極端に薄く、高台外面と高台内にカンナ目が残っている。外面文様は縦位の区画線と弧線文、内側面には二重の窓枠の中に草花文と宝尽し文を交互に配している。見込には花鳥文が描かれ、メダイヨン（まりばさみ）で枠取りされている。2 は型打ち成形の染付稜花皿である。口唇部は平坦に作られ、口紅が施されている。底部は厚く高台は小さい。見込に花盆文が描かれる。3 は青磁大皿で腰から丸みをもって立ち上がり、口縁部は短く折れる。高台は高く、断面形は長方形で、鉄銹が塗られている。見込に葉のような陰刻（ケズリ？）文様がある。

1 は舶載品で 17 世紀前半頃の中国明代の製品である。2・3 は国産品で 17 世紀中～後半頃の肥前産の製品である。

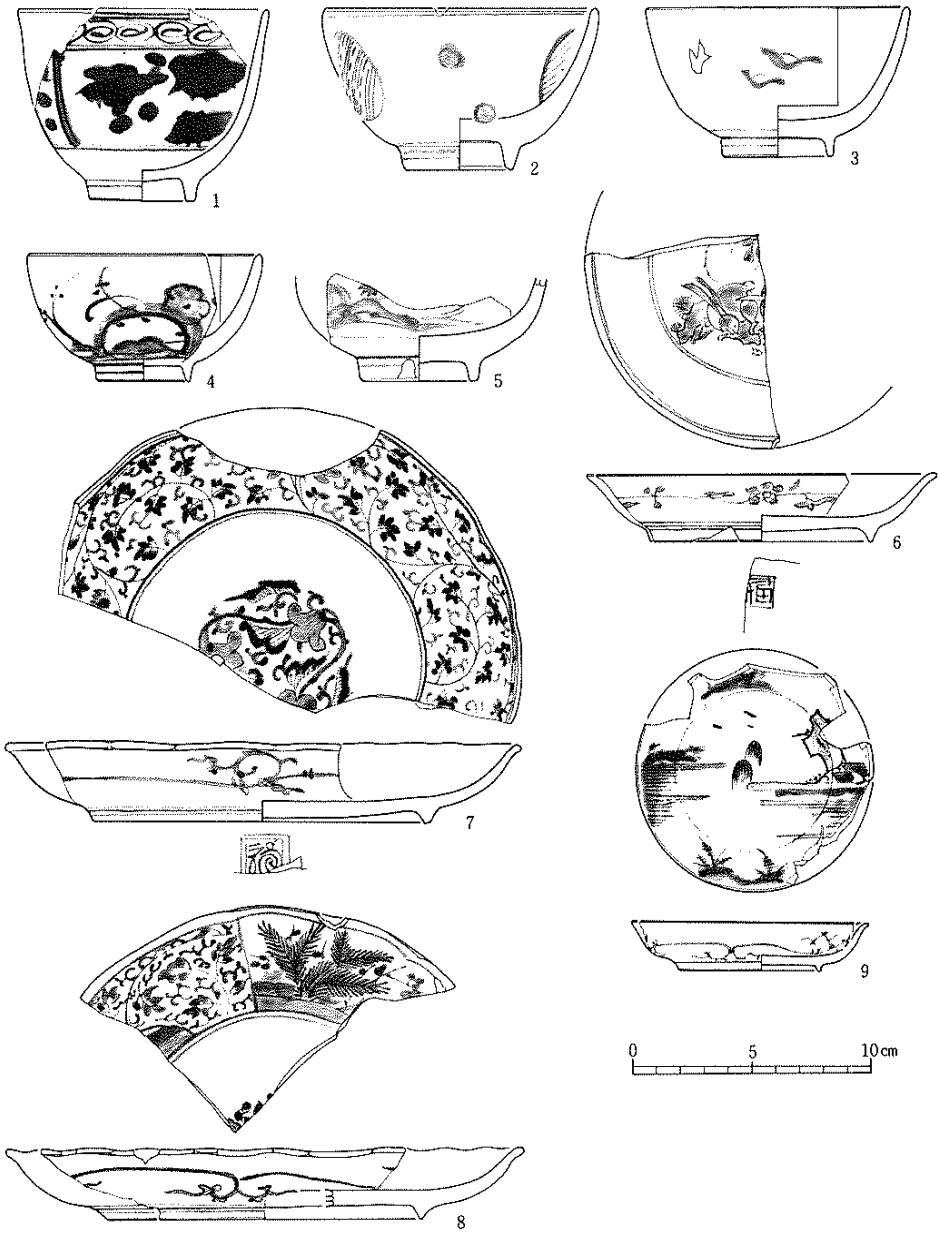
陶器（第 21 図 1～5）

1 は削り出し輪高台の天目茶碗で、腰から高台部を除いて鉄釉が施される。2 は白釉で螺旋文を描く飯碗である。器壁はロクロ目が顕著で、高台断面形は三角形に近い。3 は灰釉の掛かる厚手の角腰小皿、4 は折れ縁の大鉢で低い高台が付く。長珪石釉が厚く掛かり、見込に鉄絵葦草文が描かれる。5 は鉄釉の掛かる摺鉢で外面口縁部が沈線状に窪んでいる。



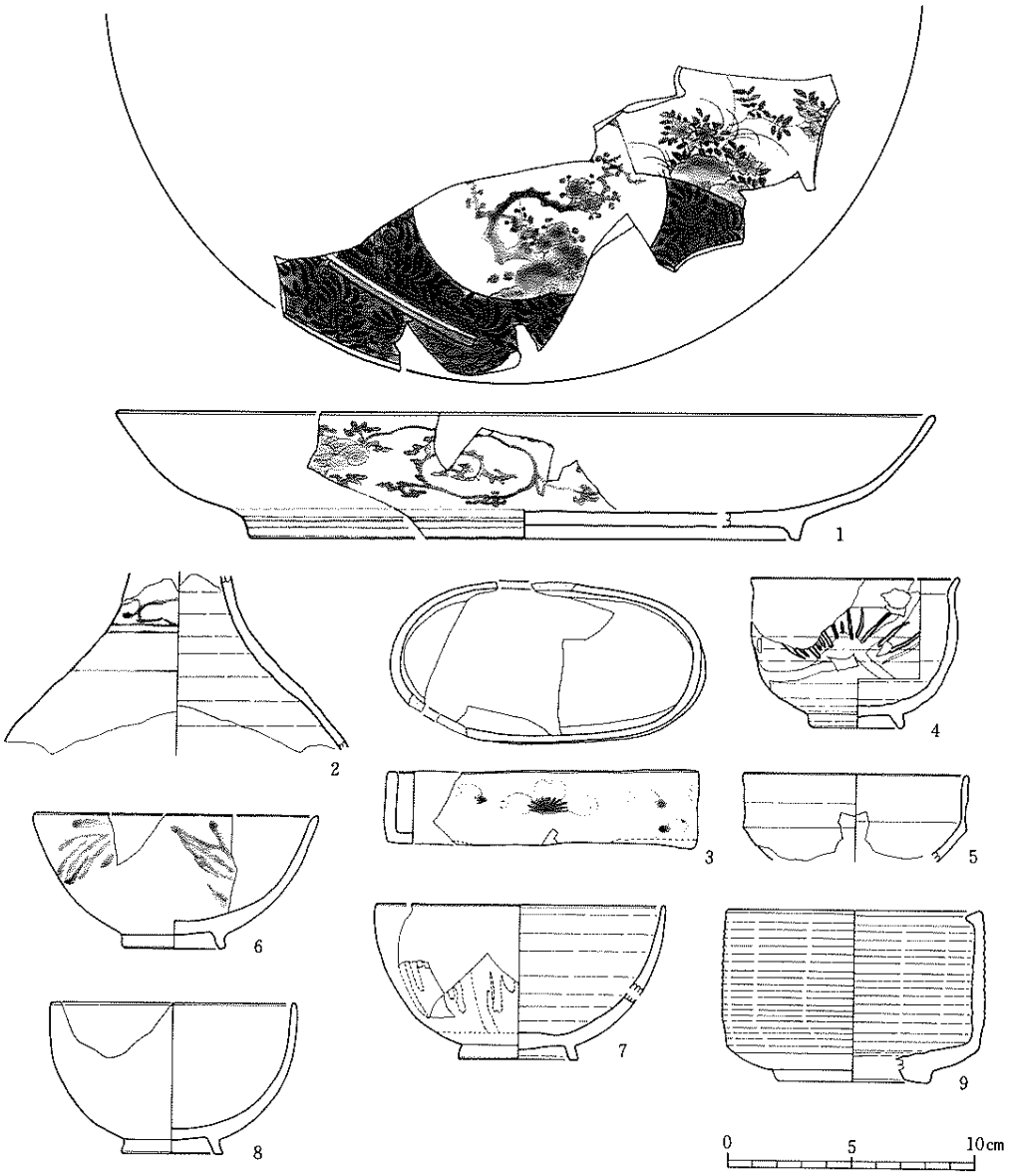
No.	出土地区	器　種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特　徴	産　地	図版No.
1	42・51	天目茶碗	11.6	5.0	6.4	鉄釉（色調；暗赤褐色10YR3/2 ）。削り出し輪高台。外面腰部から高台部は露胎。	瀬　戸	15-8
2	42	陶器飯碗	10.6	3.7	5.7	胎土は灰オリーブ5Y4/2 。化粧土を横刷毛後に透明釉。	唐　津	15-12
3	23	陶器小皿	11.3	6.2	1.8	長石釉（色調；淡黄色2.5Y8/3 ）。	美　濃	16-1
4	42	陶器大鉢	(33.0)	16.1	(9.3)	長石釉（色調；灰黄色2.5Y6/2）。見込に鉄絵の蝶草文。	美　濃	15-5
5	43	陶器摺鉢	(35.1)		(7.4)	鉄釉（色調；暗赤褐色10R3/2）。8条単位の筋目。内面頸部に1条の沈線。	瀬戸・美濃	
6	42・43	灯明皿	9.1	4.9	2.7	土師質土器（カワラケ）。底部に回転糸切り痕。内外面に煤付着。		
7	42・43	皿	6.1	3.7	2.1	土師質土器（カワラケ）。底部に回転糸切り痕。内面底部周縁が肥厚。		
8	42・43	皿	5.8	3.5	1.6	土師質土器（カワラケ）。底部に回転糸切り痕。内面底部周縁が肥厚。		

第21図　東区第Ⅰ段階整地層出土遺物(2)



No.	地区－層位	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴	産地	図版No.
1	62－5	磁器飯碗	10.2	4.4	12.8	染付。外側口縁部に渦文、体部に窓絵花文。高台部に一条の圏線。	肥前	12-2
2	68－4	磁器飯碗	11.5	4.6	6.6	染付。くらわんか手。外側面に丸文、腰から高台部に三重の圏線。	肥前	12-5
3	62・63－5	磁器飯碗	11.0	4.7	6.1	染付。くらわんか手。外側面に千鳥文、腰から高台部に三重の圏線。	肥前	12-6
4	68・69－4	磁器飯碗	9.8	4.0	5.2	染付。くらわんか手。外側面に梅樹文。腰から高台部に三重の圏線。	肥前	12-7
5	62－4・5	磁器飯碗		4.9	(4.4)	染付。外側面に山水文？。畳付に砂粒の付着が多い。	肥前	12-8
6	62－4・5	磁器小皿	14.7	9.3	2.8	染付。外側面に花唐草文。見込に兎と草木文。高台内に一重方形枠の「福」銘。	肥前	12-11
7	62～4・5	磁器中皿	21.7	14.2	3.2	染付。輪花状口縁。内外側面に花唐草、見込に花文。高台内に二重方形枠の渦「福」銘	肥前	14-1
8	61・70－4	磁器中皿	21.8	13.2	3.0	染付。輪花状口縁。外側面に唐草文、内側面は窓絵花唐草と松梅文、見込は草花文？	肥前	14-2
9	61－4・5	磁器小皿	10.0	6.0	2.1	染付。外側面に唐草文、見込に山水文。	肥前	14-4

第22図　東区第Ⅱ段階整地層出土遺物(1)



No.	地区－層位	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴	産地	図版No.
1	62－4	磁器大皿	33.2	22.2	5.1	染付。外側面に牡丹唐草文、内側面に牡丹、花唐草、扇文。見込に梅樹文と草花文。	肥前	13-4
2	61・62－4・5	磁器徳利			(7.5)	染付。外面頸部に唐草文？と三重の圏線。	肥前	15-3
3	62－4	磁器髪水入			3.2	染付。外側面に梅花文。長軸推定12.7cm・短軸6.5cm。	肥前	15-6
4	62－4	陶器湯呑碗	8.5	3.6	5.1	外面は掛分け。体部は鉄釉（色調；灰赤7.5R4/2）、口縁部～内面は灰釉（色調；灰白5Y7/1）	大堀相馬	15-16
5	61・62－4・5	陶器湯呑碗	9.2		(3.5)	灰釉（色調；灰白2.5Y7/1）。口縁部が直立。全体に薄手。	大堀相馬	
6	61－4	陶器飯碗	11.6	4.2	5.5	高台部を除き、灰釉（色調；灰白7.5Y7/1）。外側面に鉄絵。貫入あり。	大堀相馬	15-17
7	61・62－4・5	陶器飯碗	11.7	4.8	6.3	高台部を除き、灰釉（色調；灰白2.5Y7/1）。貫入あり。高台内に「り」の墨書。	大堀相馬	15-18
8	61－4	陶器飯碗	10.0	4.2	6.1	曇付け・高台裏を除き、灰釉（色調；灰白2.5Y7/1）。貫入あり。	大堀相馬	15-19
9	61－4	陶器香炉	10.4	6.2	7.0	外面の腰部から上と内面口縁部に鉄釉（色調；暗赤7.5R3/4）。口縁端部は内側に肥厚。		16-11

第23図　東区第Ⅱ段階整地層出土遺物(2)

内面頚部には１条の沈線が巡り、体部には８条１単位の筋目が施される。

1・5は瀬戸・美濃産、2は唐津産、3・4は美濃産で、いずれも17世紀代の製品と考えられる。

土師質土器（第21図6～8）

6～8は回転糸切り痕を残す皿である。6・7は器面に煤が付着しており、灯明皿として使用されたものであろう。これらの年代は上記の遺物の年代に近いものと考えられる。

なお、図示していないが西区4・6層面出土の焼塩壷（第18図9・12）とほぼ同様のものが第Ⅰ段階の整地層からも出土している。

【第Ⅱ段階】（第22～24図）

染付磁器（第22図～23図3）

第22図1～5は飯碗である。1は腰部の丸みが弱く、口縁部まで直立気味に外傾している。2～5に較べ器高が高く、器壁が薄い。畳付は幅広で砂粒の付着がある。外面に渦文と窓絵の花文が描かれる。2～5は全体に厚手で腰部の丸みが強い、いわゆる「くらわんか手」である。2は丸文、3は千鳥文、4は梅樹文、5は山水文？が描かれる。

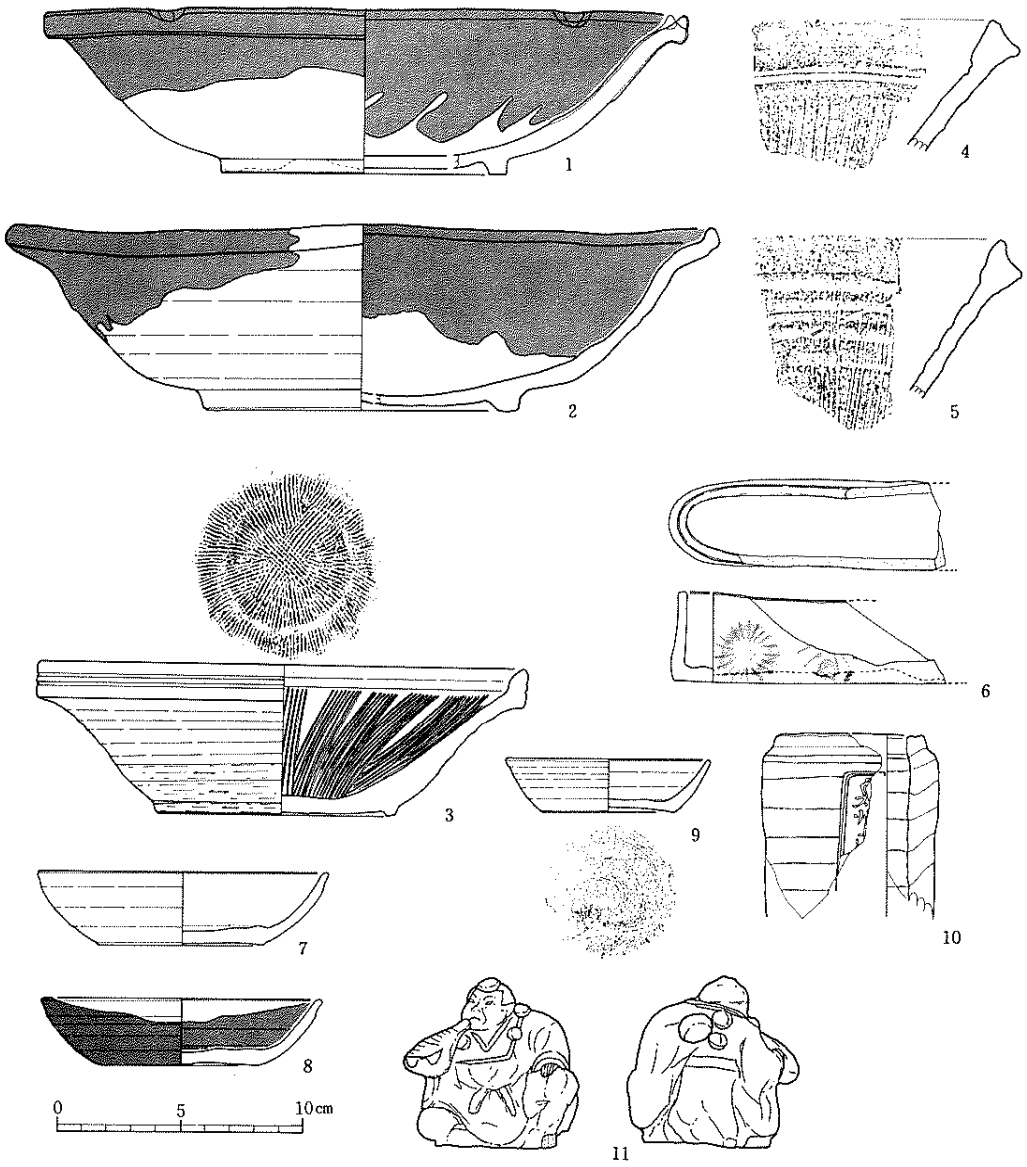
6～第23図1は皿で、高台断面形が三角形に近い。6は小皿で底部中央が厚い。外面には一本線による花唐草文、見込には兎と草木文が描かれ、高台内に一重方形枠の角福銘がある。7・8は輪花状口縁の中皿である。外面には縁取りをした唐草文が描かれる。7は内側面に花唐草文、見込に花文が描かれ、高台内にハリ痕と二重方形枠の渦福銘がある。8は内側面に窓絵の花唐草文と松梅文、見込に草花文？が描かれる。9は小皿で外面には一本線による唐草文、内面には山水文が描かれる。第23図1は大皿で、高台断面形は方形である。外面には花唐草文、内側面には牡丹文・扇文・花唐草文、見込には梅樹文と草花文が描かれる。

第23図2は瓶、3は鬢水入れである。3は外面に梅花文が描かれる。

以上の染付磁器はいずれも肥前産で第22図1・6が17世紀中～末頃、第22図7・8・第23図1が18世紀前半、第22図2～5・9・第23図2・3は18世紀中～後半頃の製品と考えられる。

陶器（第23図4～第24図6）

第23図4～8は碗類である。4は端反りの湯呑み碗で、内面と外面口縁部に灰釉、外面体部に鉄釉が掛け分けられている。外面には削りによる半菊状の文様がある。5は体部中央に稜が付き口縁部が直立する薄手の湯呑み碗で、灰釉が掛かる。6～8は高台脇から丸みを持って外傾する飯碗である。灰釉が掛かり、貫入が著しい。6は外面に鉄絵文様（意匠は不明）があり、7は高台内に「り」の墨書が見られる。



No.	地区－層位	器　種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特　　徴	産　地	図版No.
1	62－4・5	陶器大皿	25.9	11.6	6.8	口縁部内外面になまこ釉。色調は灰オリーブ7.5Y5/3 。口唇部に指頭大の歪み。		16-7
2	62－4・5	陶器大皿	29.0	12.7	7.7	口縁部内外面になまこ釉。色調は灰オリーブ7.5Y5/3 。見込みに重ね焼きの痕跡。		16-6
3	62－4・5	陶器擂鉢	19.9	9.7	6.2	色調は暗赤10Y4/4。筋目は８本単位で放射状。口縁部は縁帯状で直立し、２条の沈線が巡る	備前系	17-1
4	62－4・5	陶器擂鉢			(6.0)	色調は赤褐色5YR4/6。筋目は５本単位。口縁部断面形は三角形で内面に２条の沈線が巡る。	信楽系	17-3
5	60・61－4	陶器擂鉢			(8.0)	色調は暗赤褐色5YR3/4。筋目は６本単位。口縁部断面形は三角形。	信楽系	17-2
6	68－4	陶器製水入			3.7	長軸推定12cm・短軸3.6cm 。底部を除き、灰釉（色調：灰黄2.5Y7/2 ）。外側面に櫛状花文	瀬　戸	17-13
7	60・61－4・5	灯明皿	11.8	6.1	3.1	土師質土器（カワラケ）。底部に回転糸切り痕。内外口縁部に煤・不純物付着。		
8	61－4	灯明皿	11.4	6.2	2.8	土師質土器（カワラケ）。底部に回転糸切り痕。内外口縁部に煤・不純物付着。		
9	61－4	皿				土師質土器（カワラケ）。底部に回転糸切り痕。		
10	61・62－4	焼塩壷	5.8		(7.5)	土師質土器。印籠形。輪積みのちナデ・ケズリ調整。二重方形枠内に「泉州麻生」？銘刻印	泉　州	17-11
11	61－4	磁器人形				赤絵彩色の山伏。高さ3.5cm 。中空で背面に径６mmの孔。底面も孔。	肥　前	15-7

第24図　東区第Ⅱ段階整地層出土遺物(3)

4・6〜8は福島県の大堀相馬産、5は京焼きで、18世紀中〜後半頃の製品であろう。

9は口縁端部が内側に肥厚する筒型の香炉である。高台内を含む外面全体と内面口縁部に鉄釉が掛かり、畳付は釉が削られている。大堀相馬産であろうか。

第24図1・2には内外面の体部上半から口縁部にナマコ釉、畳付・高台内を除いた体部下半に透明釉が掛かる大皿である。1は口縁部が縁帯状で端部に指頭大の窪みが付き、2は折れ縁状の口縁部で端部が直立する。高台内に判読不明の墨書がある。

3〜5は摺鉢である。3は口縁部が縁帯状で、2条の沈線が巡る。体部下半にやや膨らみがあり、この部分の器壁が厚くなっている。内面体部から底部に8本1単位の筋目が施される。4・5は口縁部断面形が三角形のもので、内面には4で2条、5で4条の沈線が巡る。筋目は4が5本1単位、5が6本1単位である。

6は底部を除き灰釉の掛かる鬢水入れである。外面には摺絵花文が施され、内面の底部には指頭による押さえの痕が残る。

以上のうち3は備前系、4・5は信楽系、6は瀬戸産であり、3は18世紀後半頃、4〜6は17世紀後半〜18世紀前半の製品と思われる。1・2については生産地・年代ともに不明である。

土師質土器（第24図7〜10）

7〜9は底部に回転糸切り痕を残す皿で、8は煤などの付着から灯明皿として使用されたものである。10は焼塩壷である。蓋受けをもつ、いわゆる印籠形で、輪積みによって成形され、ナデ・ケズリ調整が施されている。体部には二重の方形枠に囲まれた「泉州麻生」であろう刻印がある。刻印から17世紀後半〜18世紀前半の年代が考えられよう（渡辺誠;1985）。

人形（第24図11）

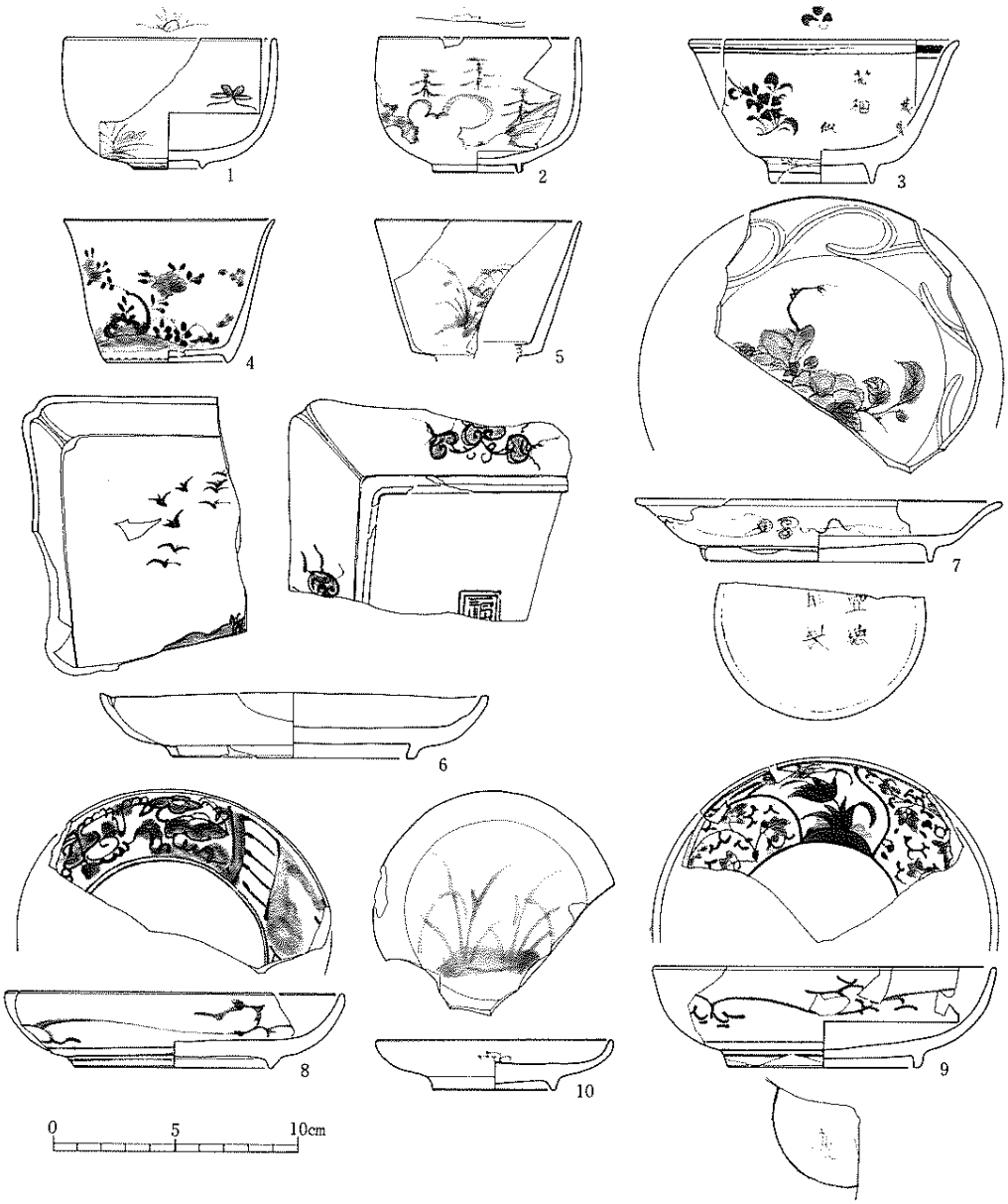
赤で彩色された磁器製の山伏である。中空で背面・底面に孔がある。肥前産で18世紀後半頃の製品と考えられる。

【第Ⅲ段階】（第25図〜27図）

磁器（第25図〜第26図7）

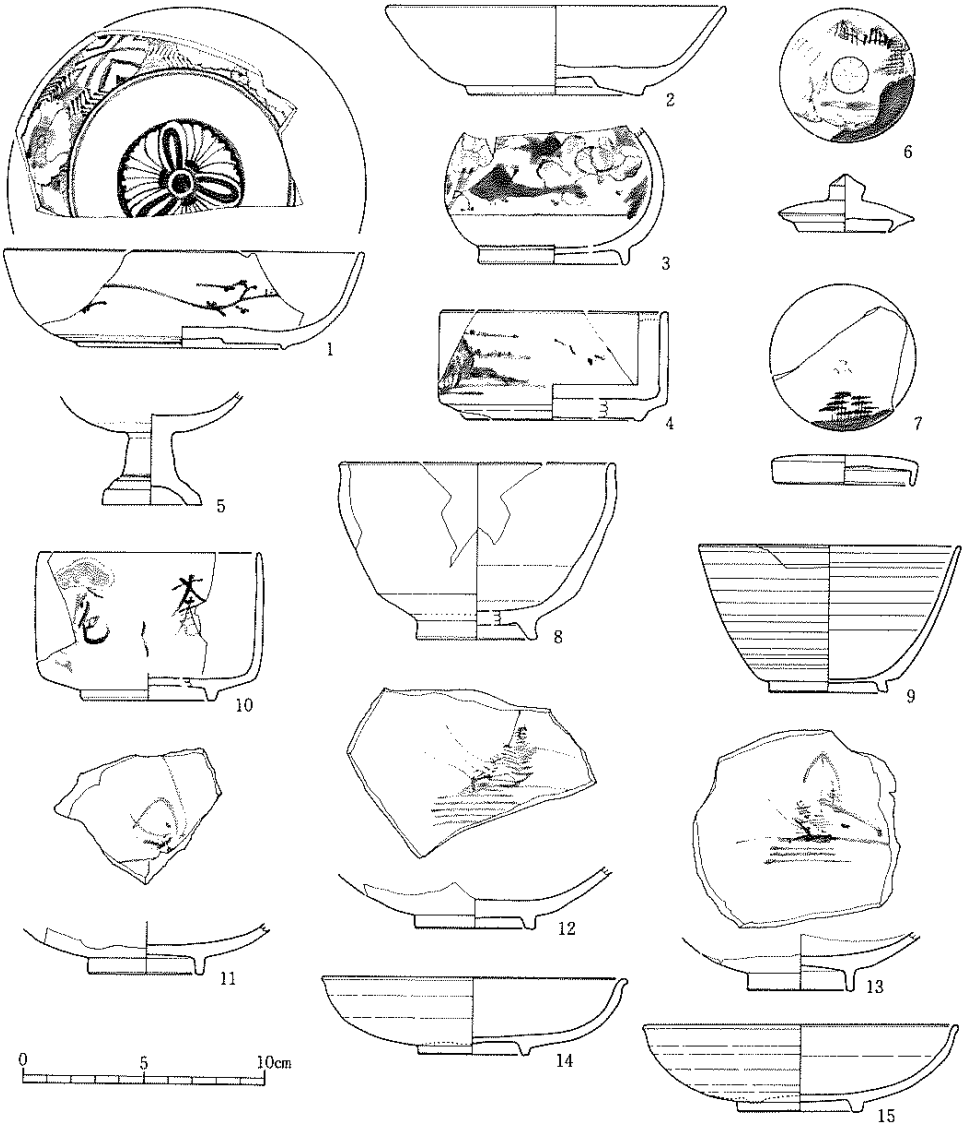
1・2は染付湯呑み飯、3は飯碗である。1・2は腰部が膨らみ、体部から口縁部まで内湾気味に立ち上がっている。1は外面に蘭と蝶の文様、見込に火炎文が、2は外面に山水文、見込に磯島文？が描かれる。3は端反りで体部は外傾している。外面に花文と「歳歳　花相似」の詞、見込に三葉文が描かれる。蓋付きであろう。

4・5は染付猪口である。4は体部が直線的に外傾し、口縁部が端反りになる。外面には草花文が描かれる。5は高台脇が平らに小さく出て、体部が直線的に外傾する。外面に



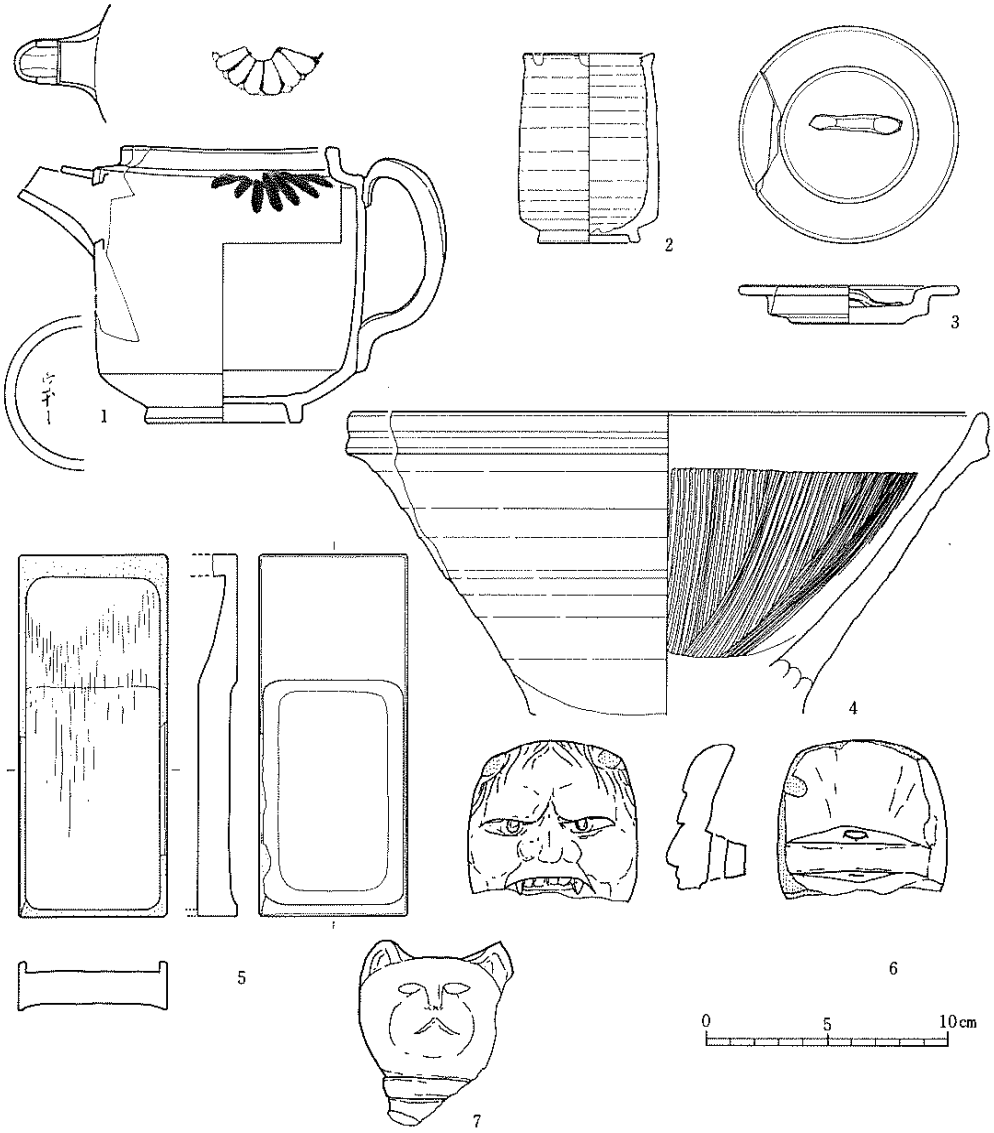
No.	地区－層位	器　種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特　　徴	産　地	図版No.
1	61・62－3	磁器湯香碗	8.5	2.8	5.4	染付。外側面に蘭に蝶文。腰から高台部に二重の圏線。見込に火炎文。	肥　前	12-3
2	63－3	磁器湯香碗		3.5	5.6	染付。外側面に山水文。見込に鶴島文？	肥　前	12-4
3	61・62－3	磁器飯碗	11.0	4.2	5.9	染付。外側面に花文と「磯焼　花相　似」の詞。内面口縁部にグラデーション帯と圏線。		12-9
4	62－3	磁器猪口	8.6	5.0	5.9	染付。外側面に草花文。	肥　前	14-8
5	62－3	磁器猪口	8.4		(5.6)	染付。外側面に櫛文。	肥　前	14-9
6	63－3	磁器角皿	(11.0)	(7.5)	2.7	染付→赤彩。外側面に如意頭文？見込に雁文。口紅。高台内に赤彩の二重方形枠「福」銘。	肥　前	12-10
7	61・62－3	磁器皿	14.9	9.3	2.6	染付。外側面に花唐草文。内側面に隠刻文。見込に牡丹文。高台内に「宣徳年製」銘。	肥　前	12-12
8	62－3	磁器皿	13.8	8.0	3.1	染付。外側面に唐草文。腰から高台部に三重の圏線。内側面に窓絵朝顔文。	肥　前	13-5
9	61・62－3	磁器皿	14.0	7.8	4.2	染付。外側面に唐草文。内側面に窓絵花唐草と花文。高台内に「大明年製」？銘	肥　前	13-6
10	62－3	磁器小皿	9.8	5.0	2.1	染付。外側面に源氏香文。見込に草花文。	肥　前	14-13

第25図　東区第Ⅲ段階整地層出土遺物(1)



No.	地区－層位	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴	産地	図版No.
1	61・62－3・4	磁器皿	14.9	8.6	4.0	染付。外側面に唐草、内側面に牡丹と丸文。見込に花文。高台内に二重方形枠渦「福」銘	肥前	14-3
2	62－3	磁器皿	14.0	7.0	3.7	白磁。見込に蛇ノ目釉ハギ。蛇ノ目凹型高台。	切込	14-6
3	62－3	磁器瓶		6.2	(5.7)	染付。外側面に牡丹文。	肥前	15-4
4	61・62－3	磁器蓋物	9.4	7.3	4.5	染付。外側面に山水文。口縁部・底部は露胎。	肥前	14-10
5	61－3	磁器仏飯器		4.2	(4.7)	染付。坏部と脚部に圏線。	肥前	15-5
6	59・60－3	磁器蓋	5.7	3.8	2.4)	染付。天井部に海浜風景。	肥前	15-2
7	61・62－3・4	磁器台子	5.8	5.8	1.3	染付。天井部に海浜風景。	肥前	15-1
8	61・62－3・4	陶器茶碗	11.4	5.0	7.3	天目形。色調は灰オリ-7.5YR6/2。化粧土の縦櫛毛文様。高台部は露胎。	唐津	15-10
9	61・62－3	陶器茶碗	10.8	4.9	6.1	灰釉（色調；灰白2.5Y8/1 ）。	京都	15-15
10	61・62－3	陶器茶碗	9.2	5.6	6.2	浅黄色2.5Y7/3 で細かな貫入。外側面に金泥縁どりの松文。鉄釉で「蓋色」の文字。口紅	京都	15-14
11	61・62－3	陶器皿		4.8	(2.1)	京焼風陶器。浅黄色2.5Y7/3 で細かな貫入。見込に銹絵山水文。高台内「□水」？の押印	肥前	16-4
12	62－3	陶器皿		4.9	(2.7)	京焼風陶器。淡黄色2.5Y8/3 で細かな貫入。見込に銹絵山水文。高台内「木下弥」の押印	肥前	16-3
13	61・62－3・4	陶器皿		4.4	(2.4)	京焼風陶器？浅黄色10YR8/4 で細かな貫入。見込に銹絵山水文。	肥前？	16-2
14	61・62－3	陶器皿	12.6	4.5	3.2	灰釉（色調；灰白5Y7/1 ）。高台部は露胎。	大堀相馬	16-8
15	61・62－3	陶器皿	13.0	5.2	3.6	灰釉（色調；灰白5Y7/1 ）。高台部は露胎。	大堀相馬	16-9

第26図　東区第Ⅲ段階整地層出土遺物(2)



No.	地区－層位	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴	産地	図版No.
1	61・62－3	陶器水注ぎ	9.0	6.5	12.0	外面腰部上に灰釉（色調；灰黄2.5Y7/2 ）。口縁。肩部に溝線。高台内に「山本－」墨書	瀬戸	16-10
2	61・62－3	陶器灰吹き	5.4	4.1	7.9	鉄釉（色調；暗赤褐色；5YR3/4）。口縁部は内側に肥厚、叩打痕あり。		16-12
3	61・62－3	陶器蓋	9.0	4.5	1.6	外面は灰釉（色調；灰白；5Y7/2 ）。内面は露胎で底部に糸切り痕。	瀬戸	15-4
4	61・62－3	陶器摺鉢	26.7		(12.6)	色調は暗赤褐色10R3/2。筋目は13条1単位。口縁部は縁帯条で1条の沈線。	瀬戸系	14-10
5	61－3	硯	粘板岩製の長方硯。全長15.1cm、幅6.1cm 、厚さ2.1cm 。丘に対応する段陸に浅い彫り込みあり。				地元	17-16
6	61－3	陶製根付け	鬼面。鉄釉。背面に紐通しの孔。残存高・最大幅とも3.3cm 。					17-14
7	61－3	土製人形	前後型合わせの素焼き。猪の頭部。残存高3.9cm 。					17-15

第27図　東区第Ⅲ段階整地層出土遺物(3)

は蘭が描かれる。

6〜第26図2は皿で、第26図2が白磁、他は染付である。6は型作りの角皿で、口唇部が平坦に作られている。口紅が施され、外面体部には呉須・赤色顔料で如意頭文、見込には同様の雁文が描かれる。高台内には赤色顔料の二重方形枠角福銘がある。7は型打ち成形で口縁部は僅かに端反りである。外面には一本線による花唐草文、見込には牡丹文が描かれる。また、内側面には陽刻文が施され、高台内には宣徳年製の銘がある。8〜10は腰部から口縁部まで丸みをもって外傾している。外面には唐草文、内側面には8が窓絵の朝顔文、9が花唐草・花文が描かれ、9の高台内は大明年製銘であろうか。10は外面に4単位の源氏香文、見込に草花文が描かれる。第26図1は第25図8同様の、2は口縁部が開き気味に外傾し、ともに蛇の目凹型高台である。1の内側面には牡丹文・丸文、見込には花文が描かれる。高台内には簡略化された二重方形枠の渦福銘がある。

3は下半部の丸みが強い瓶で、外面に牡丹文が描かれる。4は僅かに張りだす高台脇から口縁部まで直立する蓋物で、山水文が描かれる。5は仏飯器、6・7は海浜風景の描かれる山蓋、合子である。

以上の磁器は第26図2が県内産の切込焼き、他は肥前産である。年代は第25図6・7が17世紀中〜後半、第25図4・5・8・9・第26図3が18世紀前半、第25図1・2・第26図1・4・6・7が18世紀後半、第25図3・10・第26図2・5が19世紀前半〜幕末と考えられる。

陶器（第26図8〜第29図4）

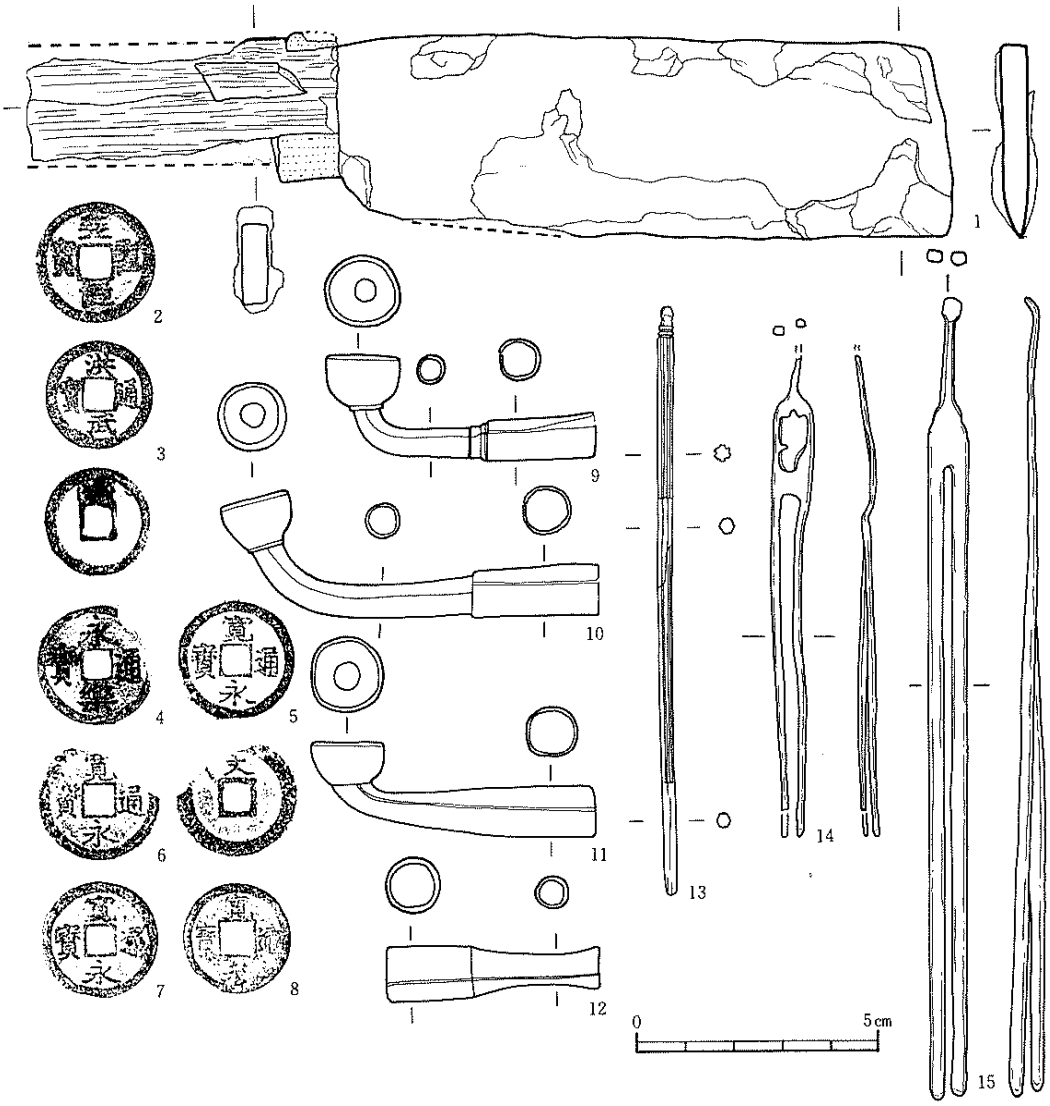
8〜10は茶碗である。8は天目形で内外面に縦方向の刷毛文様が白釉で描かれる。9は直線的に外傾し灰釉が掛かる。10は高台脇が張りだし、腰から口縁部まで直立する。口紅が施され、外面に金泥で縁どられた松文と鉄釉で「蒼色」の文字が描かれる。

8は17世紀後半〜18世紀初め頃の唐津産、9・10は18世紀後半頃の京都産であろう。

11〜15は皿である。11・12は京焼き風陶器と呼ばれるものである。高台部分が断面角形に削られ、高台内は平滑に仕上げられている。精練された緻密な胎土で作られ、高台部を除いて浅黄・淡黄色の釉が掛かり、見込に鉄絵の山水文が描かれる。高台内の中央には浅い円刻があり、11では「富永」？、12では「木下弥」の押印がある。13は色調・見込文様などは11・12と同様であるが、高台内の仕上げが雑で、円刻・押印はない。14・15は口縁端部が丸く収まり、灰釉が掛かる。

11・12は17世紀後半〜18世紀初頭の肥前産であり、13もほぼ同様のものであろう。14・15は18世紀後半〜19世紀前半の大堀相馬産である。

第27図1は水注ぎで、口紅が施され、腰から上に灰釉が掛かる。肩部に摺絵の花文が配



No.	出土地区・層位	器種	全長・径	特徴	整地大別	図版No.
1	42区　整地Ⅰ層	鉈	(19.0cm)	腐食による破損や錆の付着が著しい。	第Ⅰ段階	18－5
2	68区　〃	銭貨	2.5cm	天聖元宝。中国北宋時代の渡来銭。初鋳年天聖元年（1023）。	〃	18－16
3	44・53区　〃	銭貨	2.2cm	洪武通宝。判読困難だが背文あり。「治」か？　私鋳銭。	〃	
4	61・62区　3層	銭貨	2.4cm	永楽通宝。中国明代の渡来銭。初鋳年永楽6年（1408）。	第Ⅲ段階	18－17
5	59区　整地Ⅰ層	銭貨	2.4cm	古寛永通宝。明暦2年（1656）以前の鋳造。初鋳年は寛永3年（1626）。	第Ⅰ段階	18－18
6	68区　〃	銭貨	2.5cm	新寛永通宝。寛文8年（1668）以降に鋳造。背郭部に「文」字を配している。	〃	
7	43・52区　〃	銭貨	2.4cm	古寛永通宝。明暦2年（1656）以前の鋳造。初鋳年は寛永3年（1626）。	〃	
8	61・62区　4・5層	銭貨	2.2cm	新寛永通宝。寛文8年（1668）以降に鋳造。	第Ⅱ段階	18－19
9	43・44区　整地Ⅰ層	煙管	5.5cm	銅製の雁首。河骨形。肩付で補強帯有り。火皿径1.5cm。火皿高1.1cm。首部径0.6cm。羅部径（1.0cm）。	第Ⅰ段階	18－6
10	44・53区　〃	煙管	7.8cm	銅製の雁首。河骨形。肩付で補強帯有り。火皿径1.4cm。火皿高1.0cm。首部径0.7cm。羅部径1.0cm。	〃	18－7
11	68区　4層	煙管	5.5cm	銅製の雁首。河骨形。補強帯なし。火皿径1.5cm。火皿高0.9cm。首部径1.0cm。	第Ⅱ段階	18－8
12	61・62区　3層	煙管	4.4cm	銅製の吸口。最大径1.2cm。	第Ⅲ段階	
13	62区　5層	鐘	(12.0cm)	甲足。僅かに鍍金の痕跡がある。	第Ⅱ段階	18－11
14	62区　3層	鐘	(9.3cm)	双足。	第Ⅲ段階	18－12
15	61区　3層	鐘	15.8cm	双足。耳掻き付き。	〃	18－13

※（　）付きの計測値は残存長

第28図　東区整地層出土金属製品

され、高台内に「山本一」の墨書がある。2は鉄釉が掛かる筒型の灰吹きである。口縁部は内側に肥厚し、叩打痕が残る。3は凹形の落とし蓋で底部に回転糸切り痕を残す。外面に灰釉が掛かり、底面は露胎である。4は摺鉢である。口縁部は縁帯状で中央部が沈線状に窪む。内面体部には13条1単位の筋目が隙間なく放射状に配される。

1は18世紀後半～19世紀前半頃の瀬戸産、2は産地・年代不明、3は18世紀代の瀬戸産、4は18世紀後半～19世紀の瀬戸・美濃産と考えられる。

石製品（第27図5）

5は粘板岩製（雄勝石）の長方硯で、丘に対応する硯陰に浅い彫り込みがある。地元産であるが年代は明らかではない。

人形など（第27図6・7）

6は陶製の鬼面で、全体に鉄釉が掛かる。背面には紐通しと考えられる孔が穿たれており、根付けに使用したものであろう。7は前後型合わせの素焼きの人形で、猫と思われる。顔には部分的に墨痕を残している。産地・年代は不明である。

【金属製品】（第28図）

東区整地層からは①銭貨（28点）②煙管（34点、うち雁首13点）③簪（5点）④鉈（1点）⑤釘（数十点）⑥切羽（1点）⑦襖金具（1点　重剣菱紋）⑧鉄砲玉（3点）⑨用途不明のものなど数種の金属製品が出土しているが、そのうち①～④の遺存状態の良好なものだけを図示した。

ａ．鉈（第28図1）

第Ⅰ段階の整地層から出土。残存長19.0ｃｍ、刃部長12.6ｃｍ、幅約4.0ｃｍ、背の厚さ0.5ｃｍのもので、柄部は欠損が著しいが木質や関は部分的に残存している。また刃部は錆の付着が激しく、芯まで腐食している。

ｂ．銭貨（第28図2～8）

2～4は渡来銭または私鋳銭で、他は本邦銭の寛永通宝である。2は天聖元宝で中国北宋時代のものである。3は判読は困難だが背文が認められる洪武通宝で、国内で鋳造された私鋳銭、いわゆる鐚銭である。4は永楽通宝で中国明代のものである。寛永通宝は5・7が古寛永、6・8は新寛永と称されるものである。6は背郭部に「文」字を配した俗称「文銭」で寛文8年（1668）以降に鋳造されたものである。2・3・5～7は第Ⅰ段階、8は第Ⅱ段階、4は第Ⅲ段階の整地層から出土している。

ｃ．煙管（第28図9～12）

9～11は銅製の雁首である。9・10は火皿下の脂返しが大きく湾曲する「河骨型」という形態である。火皿と首部の接合部には補強帯が巻きつけられ、羅宇に接続する部分が一

段太く巻かれ、肩が付く。10については火皿が首部に対してやや斜めに取り付けられている。11も湾曲はやや小さいものの、9・10に近い形態である。首部は一枚の銅板を巻いてつくられており、肩や補強帯は付かない。12は銅製の吸い口で肩は付かず、羅宇側から端部にかけて湾曲しているのが特徴である。9・10は第Ⅰ段階、11は第Ⅱ段階、12は第Ⅲ段階の整地層から出土しており、9・10は17世紀前半頃、11は18世紀前半頃、12は18世紀以降のものとされている（古泉1987）。

なお、図示できなかったものも含めた雁首の特徴を見ると、ともに「河骨型」ではあるが第Ⅰ段階の整地層出土のものは肩や補強帯が付くのに対し、第Ⅱ段階の整地層出土のものになるとそれらが付かないものが認められるようになる。また第Ⅲ段階の整地層からは逆台形で小型の火皿を持ち、脂返しの湾曲がほとんどない、19世紀代のものとされている（古泉1987）雁首が出土している。他には判読は困難だが首部に印字が施されている雁首が第Ⅱ段階の整地層から出土している。

d. 簪（第28図13～15）

13は単足で先端が欠損している。断面は六角形の部分と六角の角が筋状にくぼむ部分がある。火箸である可能性も考えられるが、幅2.5～3.8mmと細いことや鍍金の痕跡が認められることから、ここでは簪として扱うこととする。14・15は双足で断面がほぼ方形のものである。14は欠損のため詳細は不明だが、透かし彫りなどの細工がなされていたと思われる。15は耳掻簪である。13は第Ⅱ段階、14・15は第Ⅲ段階の整地層から出土している。

4．まとめ

今回の調査区は、幕末期の屋敷内の建物配置を示していると考えられる平面図（第3図）をもとに考えると、屋敷中央奥の池跡を北西端とし、大書院・勘定所・台笙ノ間などを含む「表」の建物群やその背後の御成書院・御寝所・宝蔵などの建物群が配置された区域にほぼ相当している。

調査の結果、礎石建物跡1棟、掘立柱建物跡14棟、柱列26条、池跡2ケ所、井戸跡3基、土壙20基以上、溝跡13条、石列、多数の柱穴など多くの遺構と、近世陶磁器類を主体に、土師質・瓦質土器類、瓦類、土製品、石製品、木製品、金属製品などコンテナ30箱以上の遺物が出土した。

これらの遺構・遺物は上野館跡の構築当初から廃絶まで、すなわち17世紀中頃から19世紀後半頃までのものである。以下、遺構・遺物に分けて調査成果をまとめた。

(1)遺構について

調査区内の整地層は、東区（W－42ライン以東）では後世の削平により20～80ｃｍの厚さかあるいは全く残っていないのに対し、西区（W－42ライン以西）では厚いところでは2～2.5mにも及ぶ。西側ほど厚いのは館の造成以前の旧地形が西側へ傾斜していたためである。整地は時期を違えて複数回行われており、遺構はそれぞれの整地面で複雑に重複して検出された。

1)西区の遺構

すでに述べたように整地層が厚く残っていた区域で、時期ごとの整地面の識別がある程度可能であったため、南西区域では遺構は層位的に検出できた。遺構面は大きく捉えると3面に分けることができる。帰属する面が明らかな遺構をあげると、第Ⅰ面（6層）；ＳＸ52石列、ＳＤ50溝跡、ＳＡ24・25柱列など、第Ⅱ面（4層）；ＳＢ50礎石建物跡、ＳＢ51掘立柱建物跡、ＳＸ54粘土貼遺構、第Ⅲ面（3ｃ～ｄ層）；ＳＸ51池跡である。この中で第Ⅲ面は、第Ⅱ面と平面的に連なるので第Ⅱ面に含めて考えると、遺構群の大きな画期を第Ⅰ面と第Ⅱ・Ⅲ面の間に見ることができる。そこで時期的に区分し、前者をＡ期、後者をB_1・B_2期とする。

次に、これらの遺構の年代を出土陶磁器をもとに考えると、第Ⅰ面は17世紀代の中におさまるものと考えられる。第Ⅱ面は、ＳＢ50礎石建物跡構築時の整地が18世紀代で、礎石建物を覆う3ｃ～3ｄ層の整地が18世紀後半～19世紀前半とみられるので、18世紀～19世紀前半、第Ⅲ面は19世紀前半以降と考えられる。従ってこれらの遺構の年代は、それぞれA期（第Ⅰ面：17世紀）、B_1期（第Ⅱ面：18世紀～19世紀前半）、B_2前期（第Ⅲ面：19世紀前

半以降）とおおよそ据えることができる。

これらに対し帰属する面が不確実な遺構で主要なものをあげると、ＳＢ52・58～61掘立柱建物跡、ＳＸ50池跡、ＳＫ56土壙、ＳＥ51・52井戸跡などがある。ＳＢ52・58～61は、6層で確認したものの上層の整地層を明確に捉えられず掘り下げてから確認しているため、帰属する面を明らかにできなかった。しかし、ＳＢ52は第Ⅰ面のＳＤ50より新しく、3ｄ層に覆われていること、建物の棟方向がＳＢ50とほぼ一致していることから、B_1期の遺構と考えられる。ＳＢ58も同様にB_1期と考えてよいだろう。一方、ＳＢ59～61はＳＸ50に壊され、方向からみると南北基線に対し西へ2°～5°振れ、ＳＤ50石組溝に連なる石列にほぼ類似することから、Ａ期に属する可能性が高い。ＳＸ50は、出土遺物からみて18世紀後半頃に構築され、その後19世紀になってから改修をうけて以後は幕末まで存続しているので、B_1～B_2期と言える。ＳＫ56はＳＢ61より新しいことしかわからない。ＳＥ52はＳＸ50の改修の時期：18世紀後半～19世紀前半よりやや古く、B_1期と考えてよいだろう。ＳＥ51はＳＸ50に壊されており構築面は6層と推定されることから、Ａ期の遺構と考えられる。

以上から、西区で検出された主な遺構を時期ごとに再整理すると以下のようにまとめられる。

Ａ期（17世紀代）；ＳＸ52、ＳＤ50、ＳＡ24・25、ＳＥ51、ＳＢ59～61

B_1期（18世紀～19世紀前半）；ＳＢ50・51・52・58、ＳＸ50・54、ＳＥ52、

B_2期（19世紀前半以降）；ＳＸ50・51

2)東区の遺構

調査区中央から北側部分で多くの遺構が重複して検出されている。掘立柱建物跡が大半で、他に柱列跡、溝跡、土壙などがある。これに対し南区域ではわずかに柱列・土壙が検出されたにすぎず遺構は希薄である。これは、南区域にはもともと掘立柱建物などがおかれなかったためでもあろう。しかしここは後世の削平を多少受けている区域でもあるので、仮に掘立柱建物ではなく礎石建物などがあったとしたらその痕跡は既に失われてしまった可能性があることも考慮しておく必要がある。

東区では、20ｃｍ～80ｃｍ程の厚さをもつ整地層は5層に大別され、遺溝の検出面はおおむね3面捉えられた。しかし、整地層の識別・遺構確認はむずかしく、各整地層面・地山面で検出した遺構は、どの整地層に帰属を求めてよいか判断の困難なものが多かった。そのためここでは、遺構の確認面・新旧関係・方向と西区の層位・遺構を参考にして、東区遺構群を以下の3群に分けた。

1群：主に地山、4・5層面検出。建物・柱列は南北基線に対し西へ2°～5°振れる。

ＳＢ53・55掘立柱建物跡、ＳＡ11・12・14～16・20・33柱列、ＳＤ51・52溝跡など。

2群：主に4・5層面検出。建物・柱列は南北基線に対し東へ2°〜5°振れる。

ＳＢ54・56〜58・62〜64掘立柱建物跡、ＳＡ10・17・18・21・26・27・34・35柱列跡、ＳＥ50井戸跡、ＳＫ55土壙など

これらの遺構は、重複関係から少なくとも4段階程度の変遷が見られる。掘立柱建物跡・柱列跡の方向にも相違があり、何度かの大きな増改築があったことがわかる。

3群：主に2・3層面検出。

ＳＫ51〜54土壙など

これらの遺構は1群→2群→3群と変遷したものと考えられるが、それぞれの遺構の年代は明確でない。しかし建物群の方向を手がかりに西区と比較した場合、Ｉ群の遺構は西区Ａ期に、2群・3群は西区B_1・B_2期におおむね対比できるものと考えられる。つまり、1群は17世紀代に、2群・3群は18世紀以降の遺構群と推定される。

3)文献からみた上野館とその変遷

松山の地を拝領した茂庭氏は、当初、中世以来の千石城にはいるが、初代良元は寛永8年（1631）下屋敷として上野館を築き、2代定元は明暦3年（1657）千石城からここに居を移し、以後幕末まで上野館を正式な居館としている。

下屋敷時代についての記録はほとんどなくその様相を知ることができない。ただ、良元が隠居後の慶安4年（1651）上野館に移り住む時には普請をおこない、館内の建物をほぼ整えたようである。正式な居館となって以降の上野館の作事については、いくつかの記録が「茂庭家記録」に残されている。この中で館内の建物について大きな変化を示す記録には元禄元年（1688）のものがある。この時には大書院・後座ノ間などの普請をおこない、館内の建物を一新したようである。そして、元文初年（1736）頃には藩主専用の「御成書院」を建てたらしい。これ以降幕末までの間にも増改築があったらしいが、大きな変化があったかどうかは明かではない。幕末の館内の建物を示した平面図が第3図で、これは上野館内の建物について知ることのできる唯一の資料である。これを最後に明治初年には廃絶を迎える（茂庭ほか 1980）。

このような記録をもとに館の構築および館内の建物の増改築の大きな変化をまとめてみると、①寛永8年（1631）：下屋敷の造営、②慶安4年（1651）：下屋敷の整備、③明暦3年（1657）：正式な居館とする際の館の整備？④元禄元年（1688）・元文元年（1736）：大書院・御座ノ間・御成書院の増築、⑤明治元年（1668）：館の廃絶、となる。

4)遺構の性格

次に、文献から読み取れるこのような画期を、今回の調査で検出された遺構群と照らし

合わせて検討し、さらに遺構の性格などについても考えてみたい。

まず、遺構を年代的にみた場合、西区Ａ期と東区1群の遺構群は17世紀代におさまり、西区Ｂ期、東区2・3群の遺構群は18世紀以降と推定される。つまり、17世紀から18世紀にかけて遺構群には大きな変化がみられることになる。これは、記録からみれば④の18世紀前後の館の変化と対応し、西区Ａ期と東区1群の遺構群は①～③に、西区Ｂ期、東区2・3群の遺構群は④・⑤に対応するものと考えられる。すなわち、西区Ａ期、東区1群の遺構群は元禄～元文年間より古い時期の下屋敷も含めた上野館の時代にあたり、西区Ｂ期、東区2・3群の遺構群はそれ以降の時代にあたる可能性が高いと言える。

さて、西区Ａ期・東区1群の遺構にはＳＢ53・56・59～61掘立柱建物跡、ＳＸ52石列、ＳＤ50溝跡などがあり、西へ傾斜する南西部では石列・溝が、平坦な東から北東部にかけては棟方向が西へ約2°～5°振れる建物跡が認められる。これらは上野館の初期の様相を示すものと考えられるが、後の上野館に比較すると館の建物方向は異なっている。これはＡ期からＢ期へいたる段階、つまり大書院・御座ノ間・御成書院などの増築を契機として館全体を一新するような変化があったことを示唆するものであろう。

西区Ｂ期、東区2・3群の遺構には、礎石建物跡、重複の著しい掘立柱建物跡、柱列、池跡、井戸跡、土壙など多くの遺構がある。遺構の分布をみると、南の区域では柱列が検出された以外は建物跡などの遺構は見つかっていないが、西側中央から北西部には礎石建物跡、池跡など、北東部には掘立柱建物跡・柱列跡が密集する。幕末の絵図（第3図）を見ると、ＳＸ50と対流する瓢箪形の池の東側には南北方向にのびる廊下、小座敷・小姓室・勘定所などの小割の部屋、西側には宝蔵、藩主専用の御寝所・御成書院などが見える。池を手がかりに、これらの建物と遺構を照らしてみた場合、池の東側に展開する掘立柱建物跡や布掘りの柱列跡は、小割の部屋や廊下・塀にあたり、ＳＢ52掘立柱建物跡は宝蔵、ＳＢ50礎石建物跡は御寝所とみることも可能であろう。この場合、ＳＢ50礎石建物跡の南側に検出されてもよいはずの御成書院などの建物の痕跡が見あたらないことになる。しかしこれは前にも述べたように南東部区域には削平が及んでおり、礎石などの痕跡は既に失われてしまったものと考えることができる。

北東区域の掘立柱建物跡・柱列跡は重複が著しく、その方向にも違いがある。現段階では少なくとも4期の変遷があるものと捉えている。これは元禄～元文年間の館を一新するような造成以降もたびたび増改築が行われたことを示しているものと考えられる。

最後に、今回の調査によって検出された遺構についてまとめてみれば、①17世紀代の遺構群、つまり元禄～元文年間より古い時期の館の様相を示す遺構群とそれ以後の遺構群を捉えられたこと、②池跡を手がかりに小座敷・台笙ノ間・小姓室・勘定所などの建物群と

御寝所・宝蔵の可能性がある建物跡を捉えられたこと、この2点に要約できるだろう。今後は、以前の調査結果とも合わせてさらに細部を検討し、館の全容・その変遷を把握していく必要がある。

(2)出土遺物について

遺物は調査区北西部のＳＸ50池跡、北東部60・61区付近の第Ⅲ段階整地層などからまとまって出土した。年代的には下屋敷から上野館の構築－廃絶の年代に相当し、17世紀中ごろ～19世紀後半の時期にあたる。

まず陶磁器類についてみると、磁器は碗・皿類が圧倒的に多く、これに猪口・徳利・鬢水入れ・仏飯器などが加わる。全般に肥前産の製品が主体を占め、時期を通してみてもこの傾向は変わらない。ただ、上層（西区3・4層、東区2層）になると、瀬戸産や東北地方の切込産（宮城）の皿・徳利、平清水産（山形）の飯碗・皿なども含まれてくる。磁器の大半は日用雑器の類であるが、17世紀～18世紀前半の肥前製品は上手物の皿類が比較的多く含まれている。

陶器をみるとやはり碗・皿類の割合が高く、ほかに鉢・土瓶・摺り鉢・ほうろくなどが見られる。下層資料（西区6層、東区4・5層）は唐津、瀬戸・美濃、京都などの西日本の製品であるが、上層資料には東北地方の大堀相馬産（福島）、堤産（宮城）、上野目産（宮城）などの製品が含まれている。陶器皿の中には、仙台城など県内の遺跡ではほとんど報告されていない京焼風陶器と称される製品も目立つ。

瓦には三つ巴文軒丸瓦、雪持ち笹文軒平瓦、三つ引両文軒桟瓦、棟込め瓦（輪違い・一六弁菊丸）、鯱瓦片があるほか、遺構の年代を知る上で重要な手がかりを与える「明和四」年（1767）刻印の雪持ち笹文軒平瓦も出土した。

焼塩壷には、ろくろ成形（底部回転糸切り）で下半部に斜格子状のたたき目を施した厚手のコップ形のものと、輪積み成形で「泉州麻生」と見られる刻印をもつ印篭形のものがある。前者は今のところ類例が宮城県内に限定され、年代的には17世紀代から認められている。これらの資料は、焼塩を畿内から搬入する一方で仙台藩内でも江戸初期からすでに焼塩壷を用いた塩の生産を行い、藩内に供給していた証拠と言えるだろう。

以上の他に、動物・人などをかたどった土人形、漆器碗・曲物などの木製品、煙管・簪・釘・襖金具・鎌・包丁・鉈・鉄砲玉などの金属製品、硯・碁石・石臼（下臼）・燈篭などの石製品、古銭（寛永通宝・永楽通宝・天聖元宝ほか）などが出土している。

こうした遺物は、地方上級武士の館の生活の一端を知る上でさらに豊富な資料を追加することになったものと考えられる。

「明和四」年銘の刻印瓦について

すでに述べたように今回の調査区からは「明和四」年（1767）の刻印をもつ軒平瓦が2点出土している。1点（第15図3）は完形品で、瓦当の文様は雪持ち笹文を中央に配し、両脇に重線による唐草文を施すものである。瓦当面の右端無文部と尻部の右端の2箇所に「明和四」年の刻印がある。もう1点（第13図4）は、瓦当部と左半部を欠損しているが、その形状から前者と同様の軒平瓦と推定される。これにも尻部の全く同じ位置に「明和四」年の刻印が認められる。前者は、ＳＸ50池跡が改修されたときに埋められたＳＥ52井戸跡の埋土、後者は改修後の池の最下層出土で、いずれも池の改修と関わっている。従って、これらの瓦は、出土した遺構はそれぞれ違うがほぼ同時に廃棄されたものと考えられる。

発掘調査の出土品ではないが、興味深いことにこれらの「明和四」年と同様の刻印をもつ一対の鯱瓦が、現在松山町ふるさと歴史館に保管されている。明和四年の刻印は頭部・尾が欠損している片方の鯱瓦の腹部に施されている。これらの一対の鯱瓦は幕末まで上野館の城門にのっていたものと伝えられている（茂庭ほか　1980）。

文献からは明らかでないが、これらの資料は、明和四年（1767）に館の普請がなされたことを示唆するものであろうか。また、これらの刻印瓦の廃棄は18世紀後半か19世紀になってからと推定されるが、この時期にも館の建物に変化があったのであろうか。調査で明らかになった遺構群の変遷と結びつけて考えることは今のところ困難であるものの、これらの刻印瓦は遺構の年代・館の建物の変遷を考える上で非常に重要な資料と言えよう。

引用・参考文献

伊藤　裕　　1990　『上野館跡』　宮城県文化財調査報告書第139集

江戸遺跡研究会　1992　『江戸の食文化』　吉川弘文館

扇浦正義ほか　1988　『三栄町遺跡』　東京都新宿区教育委員会

大橋康二ほか　1988　『有田町史　古窯編』　有田町史編纂委員会

　　1989　『肥前陶磁』　ニュー・サイエンス社

小川啓司　　1974　『そば猪口絵柄事典』　光芸出版

梶原　洋ほか　1985　『東北大学埋蔵文化財調査年報1』　東北大学埋蔵文化財調査委員会

小泉　弘　　1983　『江戸を掘る・近世考古学への招待』　柏書房

　　1985　「江戸の町の出土遺物」『季刊考古学第18号 特集 江戸時代を掘る』pp.51～55　雄山閣

　　1987　『江戸の考古学』　ニュー・サイエンス社

光芸出版編　　1976　『やきもの辞典』

佐藤広史ほか　1990　『切込窯跡－近世磁器窯跡の調査－』　宮崎町文化財調査報告書第3集

佐藤　巧　　1979　『近世武士住宅』　叢文社

芹沢長介　　1987　『東北の近世陶磁』　東北陶磁文化館

芹沢長介ほか　1981　『日本やきもの集成Ⅰ　北海道・東北・関東』　平凡社

高山　優ほか　1987　『芝神谷町町屋敷遺跡』　港区教育委員会

　　1988a　『白金館址遺跡Ⅰ』　白金館址遺跡調査会

　　1988b　『白金館址遺跡Ⅱ』　白金館址遺跡調査会

坪井利弘　　1977　『図鑑瓦屋根』　理工学社

手塚　均　　1991　『上野館跡(Ⅱ)』　宮城県文化財調査報告書第143集

小日置晴展ほか　1990　『白鷗』　都立学校遺跡調査会

西　和夫　　1990　『図解 古建築入門 日本建築はどう造られているか』　彰国社

西田宏子ほか　1988　『古伊万里 別冊太陽 日本のこころ63』　平凡社

茂庭邦元ほか　1980　「第四章　近世の松山」　『松山町史』　松山町史編纂委員会

結城慎一ほか　1985　『仙台城三の丸跡発掘調査報告書』　仙台市文化財調査報告書第76集

渡辺　誠　　1985a　「物資の流れ－江戸の焼塩壷」『季刊考古学第18号 特集 江戸時代を掘る』

　　pp.42～47　雄山閣

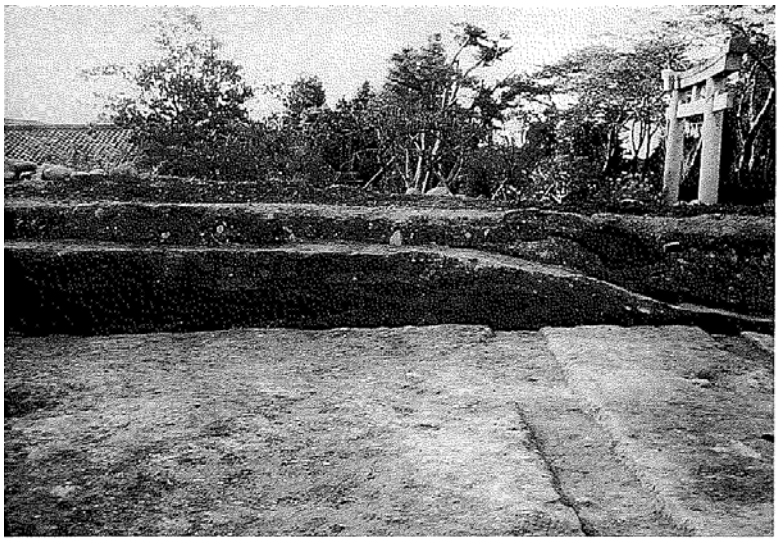
　　1985b　「焼塩壷」『講座・日本技術の社会史 第二巻 塩業・漁業』

　　pp. 312～329　日本評論社

写　真　図　版

調査区全景

写真図版 1



調査区西壁断面（東から）

SB50礎石建物跡（東から）

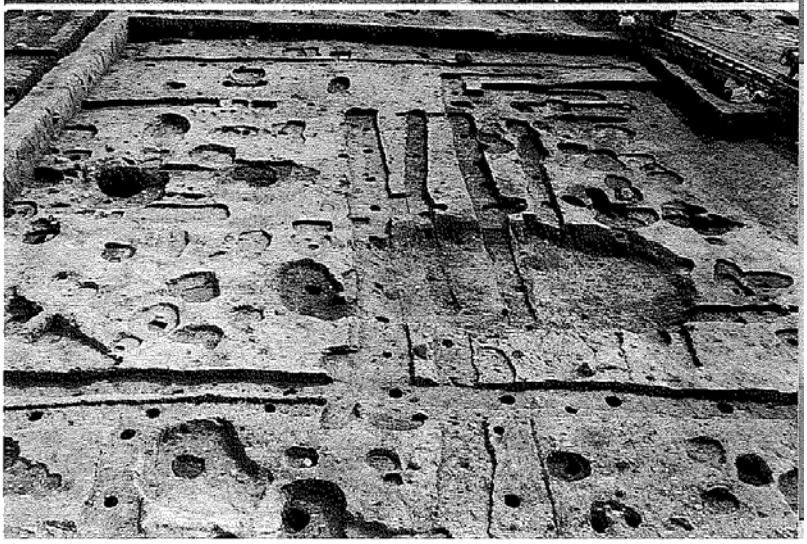
SB52掘立柱建物跡（南から）

写真図版 2

SB51掘立柱建物跡
（北から）

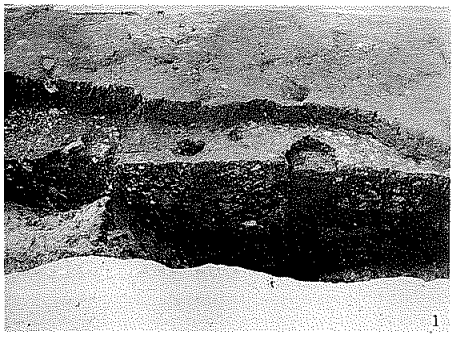
ピット検出状況（南から）

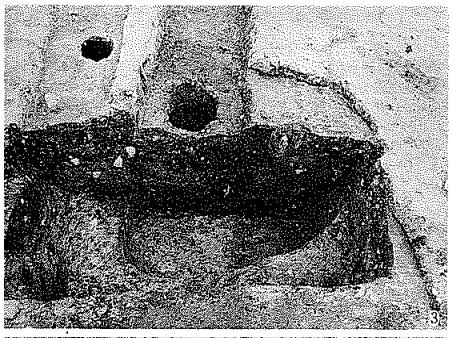
SA11～18 柱穴列
（北から）

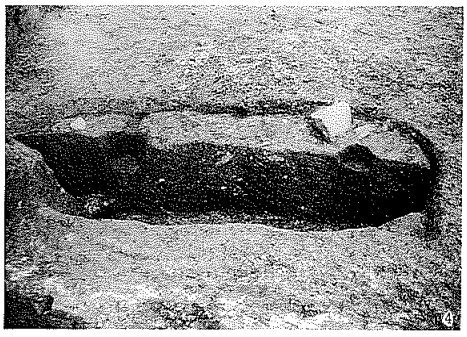


写真図版 3

SA10柱穴列ほか



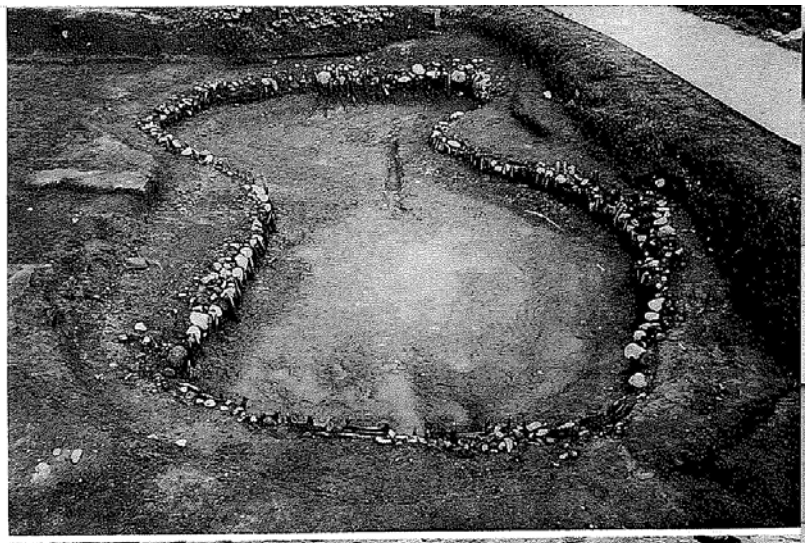




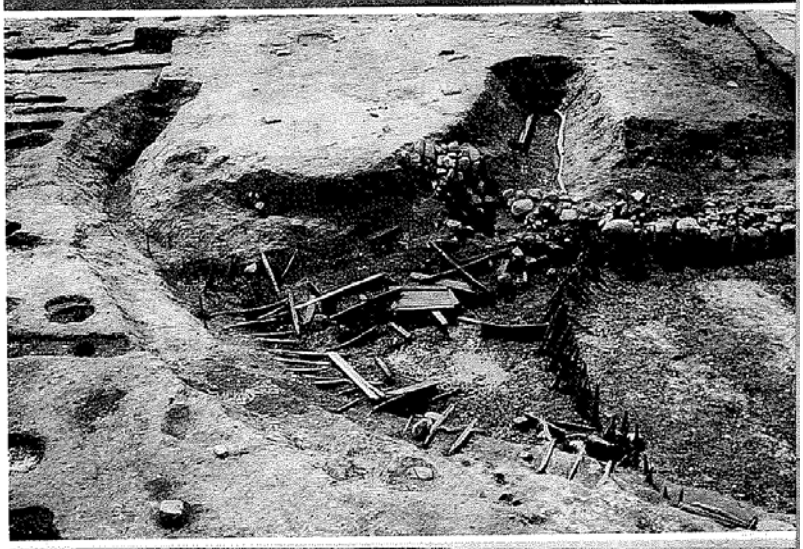
SB52及びSA30　柱穴断面（北
SB52　〃　（東
3．SB53及びSA13・14　〃　（東から）
4．SB51　〃　（南から）
5．SX54粘土貼遺構断面　（東から）

写真図版4

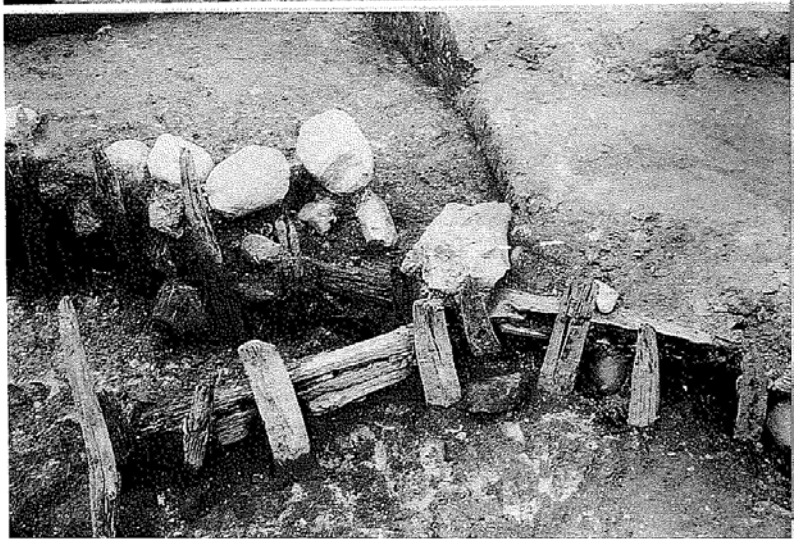
SX 50池跡改修後
（東から）



SX 50池跡改修前東半部
（北から）

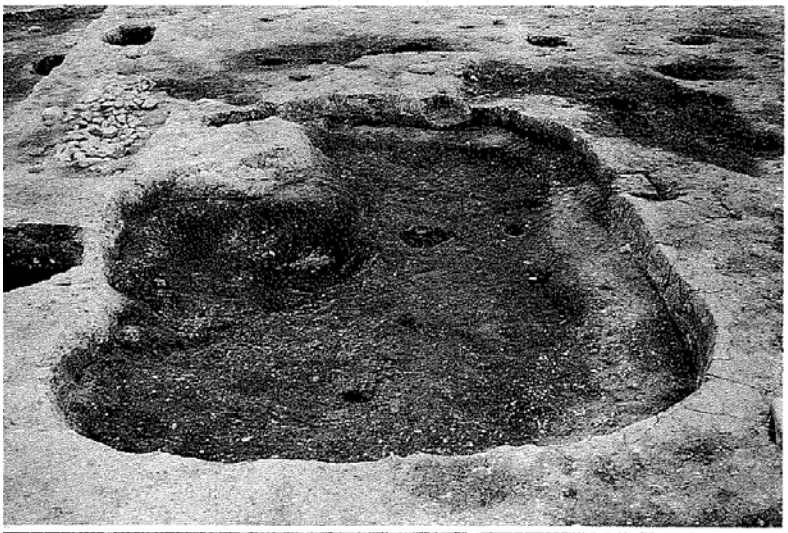


SX 50池跡改修時
接続部分



写真図版 5

SX50池跡及び
SE51井戸跡断面（南から）



SX51池跡（南から）

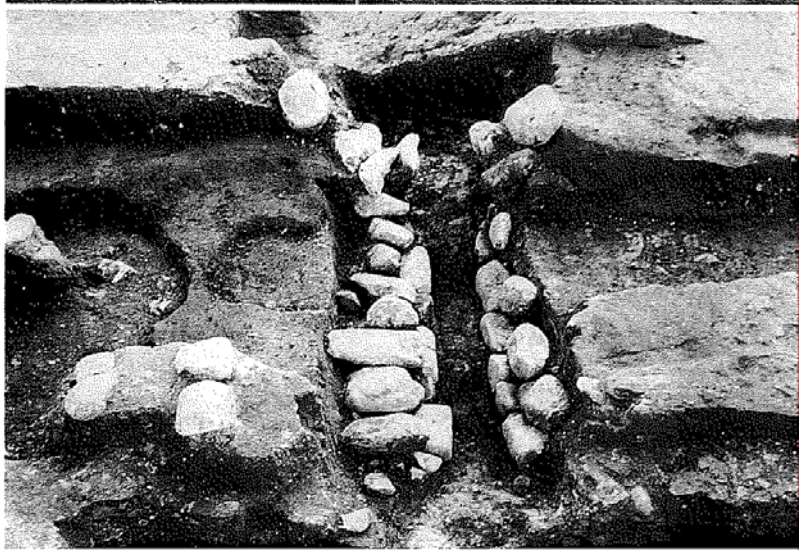
SK52土壙（南から）

写真図版6

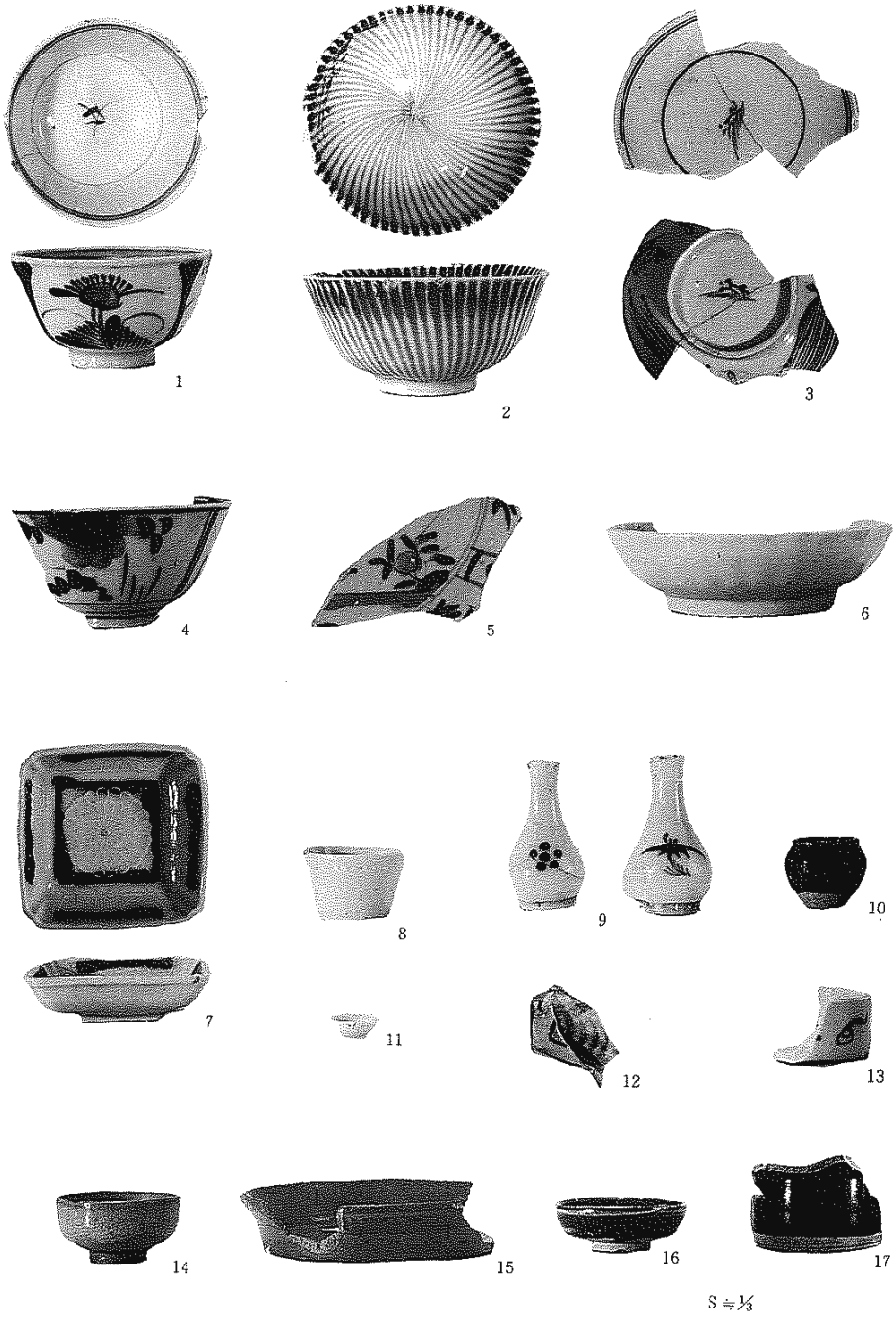
SK56土壙（東から）

SX52石列遺構及び
SD50溝跡（南から）

SD50溝跡石組部
（北から）



写真図版７



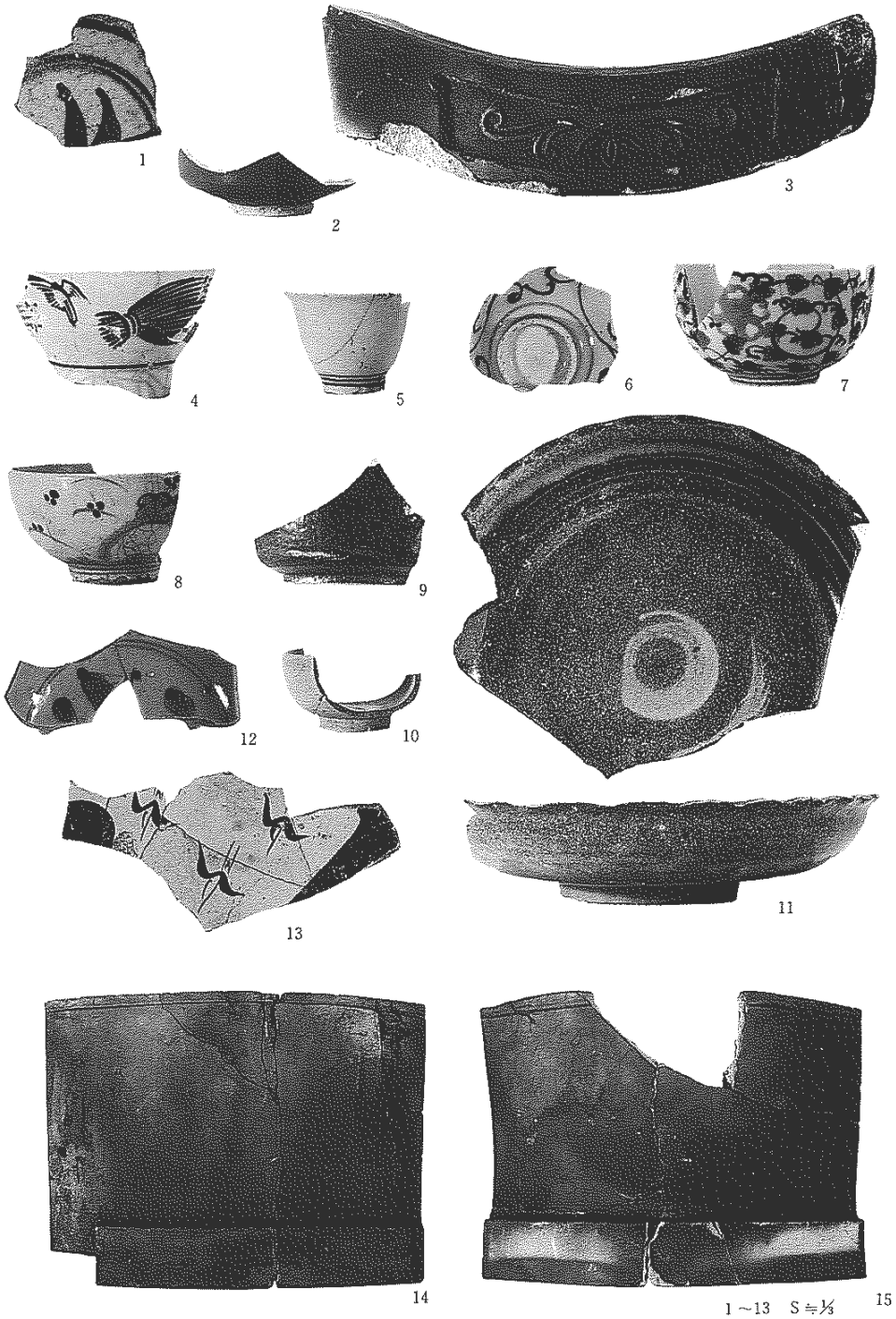
写真図版８　SX50池跡出土遺物（１）

1～12　S≒1/3
13～20　S≒2/3

写真図版９　ＳＸ50池跡出土遺物（２）

1・2　S≒⅔
3～5　S≒½
6　S≒¼

写真図版10　SX50池跡出土遺物（3）



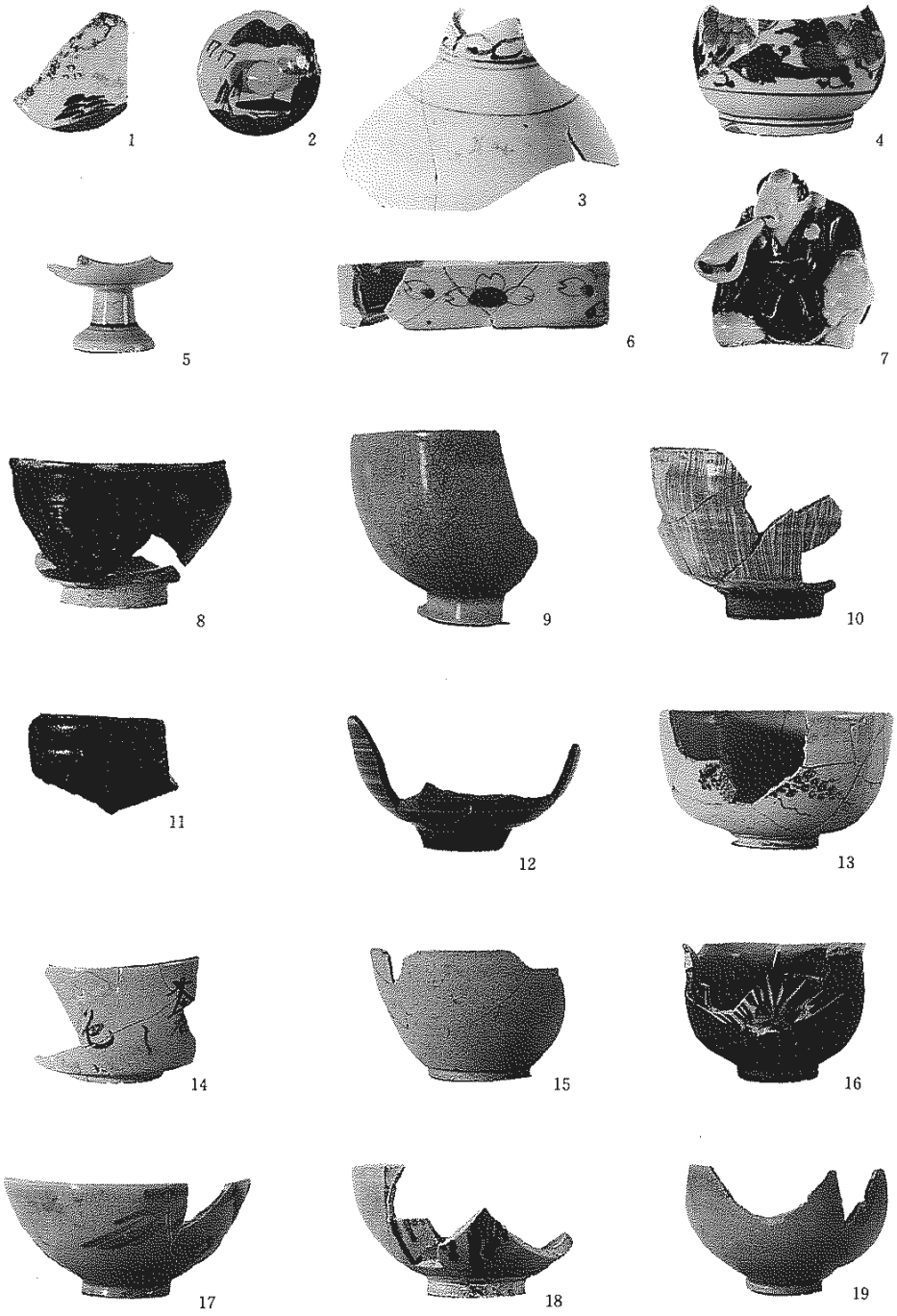
1～13　S≒1/3
14・15　S≒1/8

写真図版11 井戸、ピット、土壙、溝出土遺物

写真図版12　整地層出土遺物（1）　S≒⅓

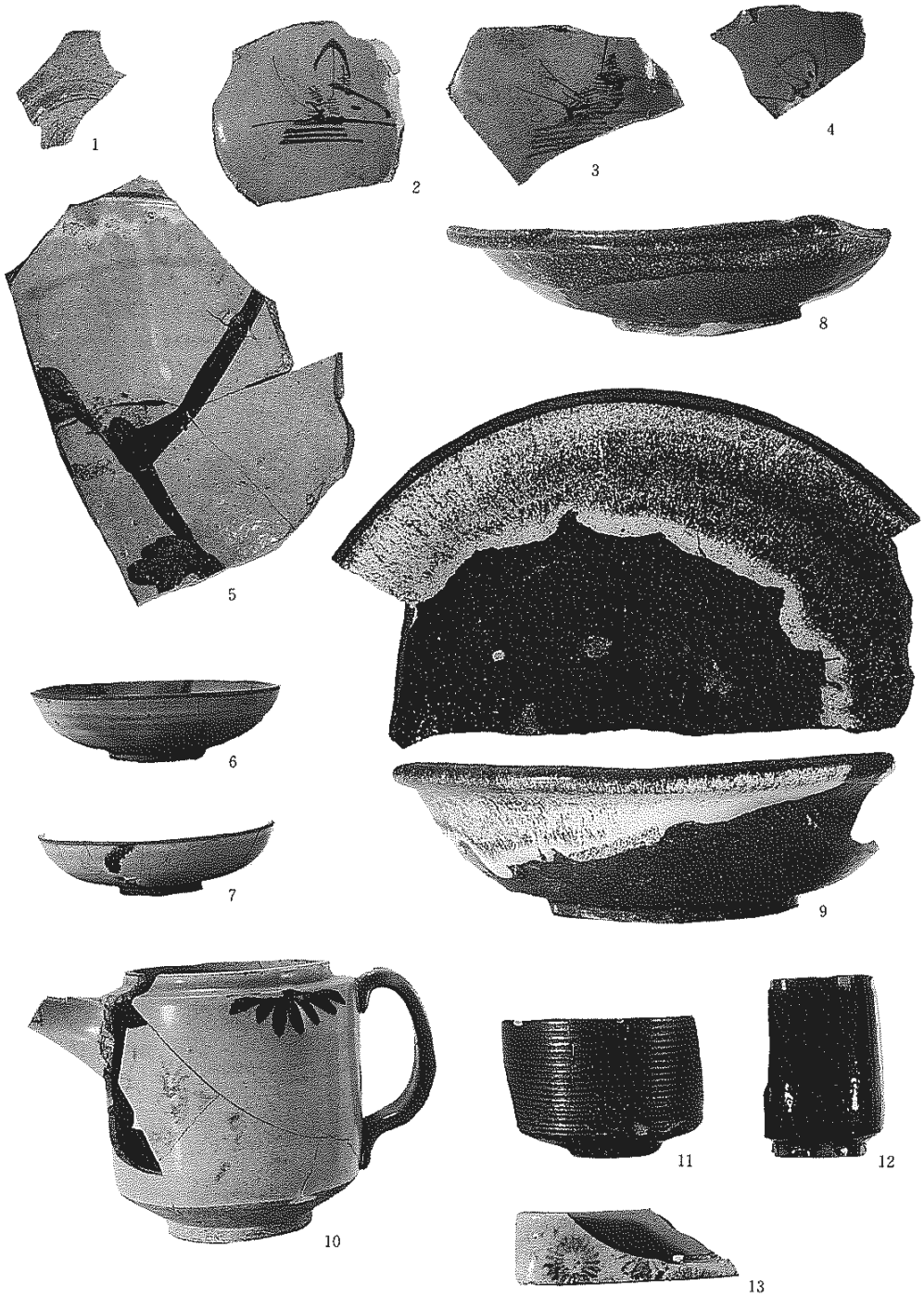
写真図版13　整地層出土遺物（2）　S≒⅓

写真図版14　整地層出土遺物（3）　　S≒⅓

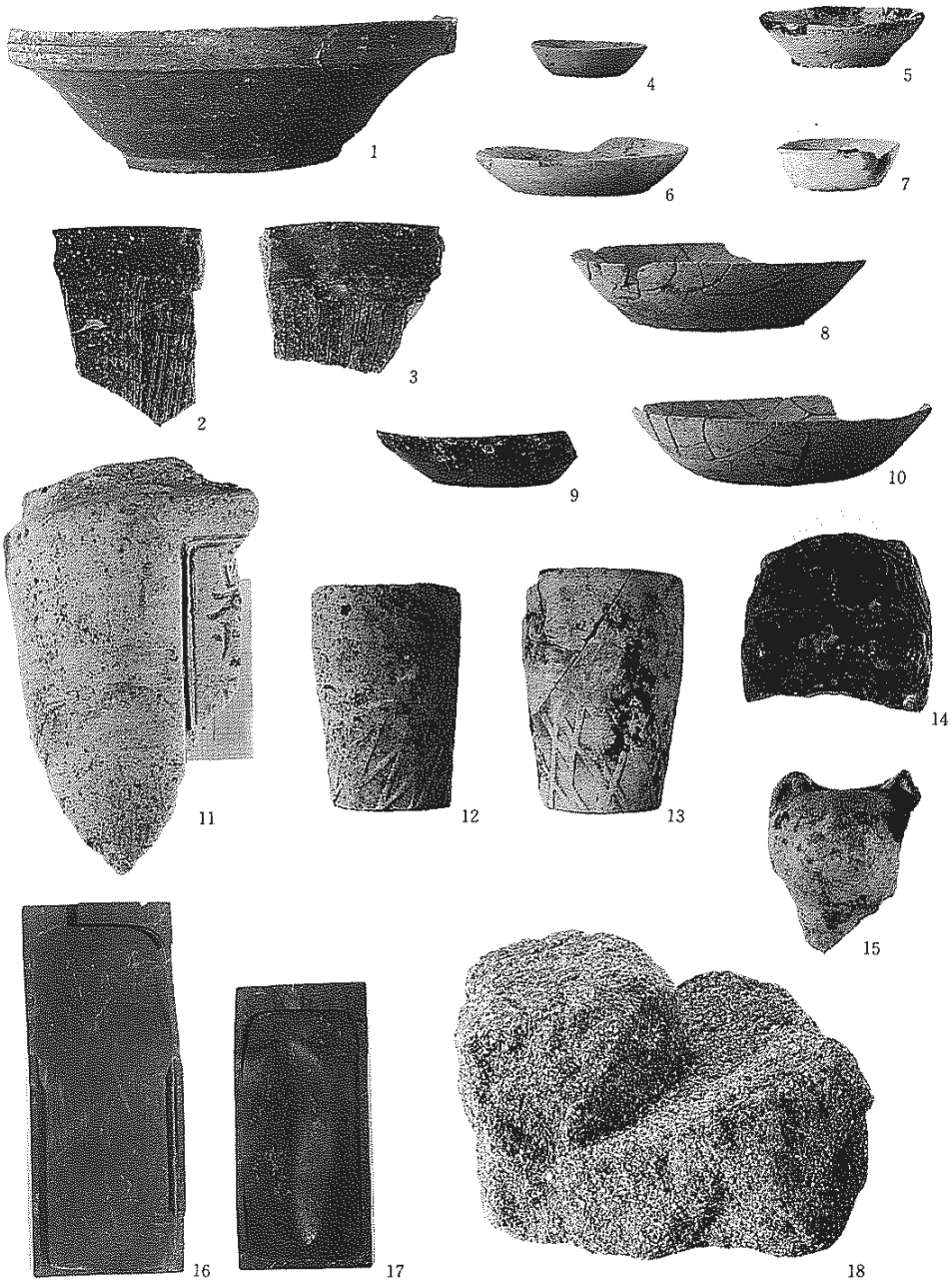


S≒1/3
7のみS≒2/3

写真図版15　整地層出土遺物（4）

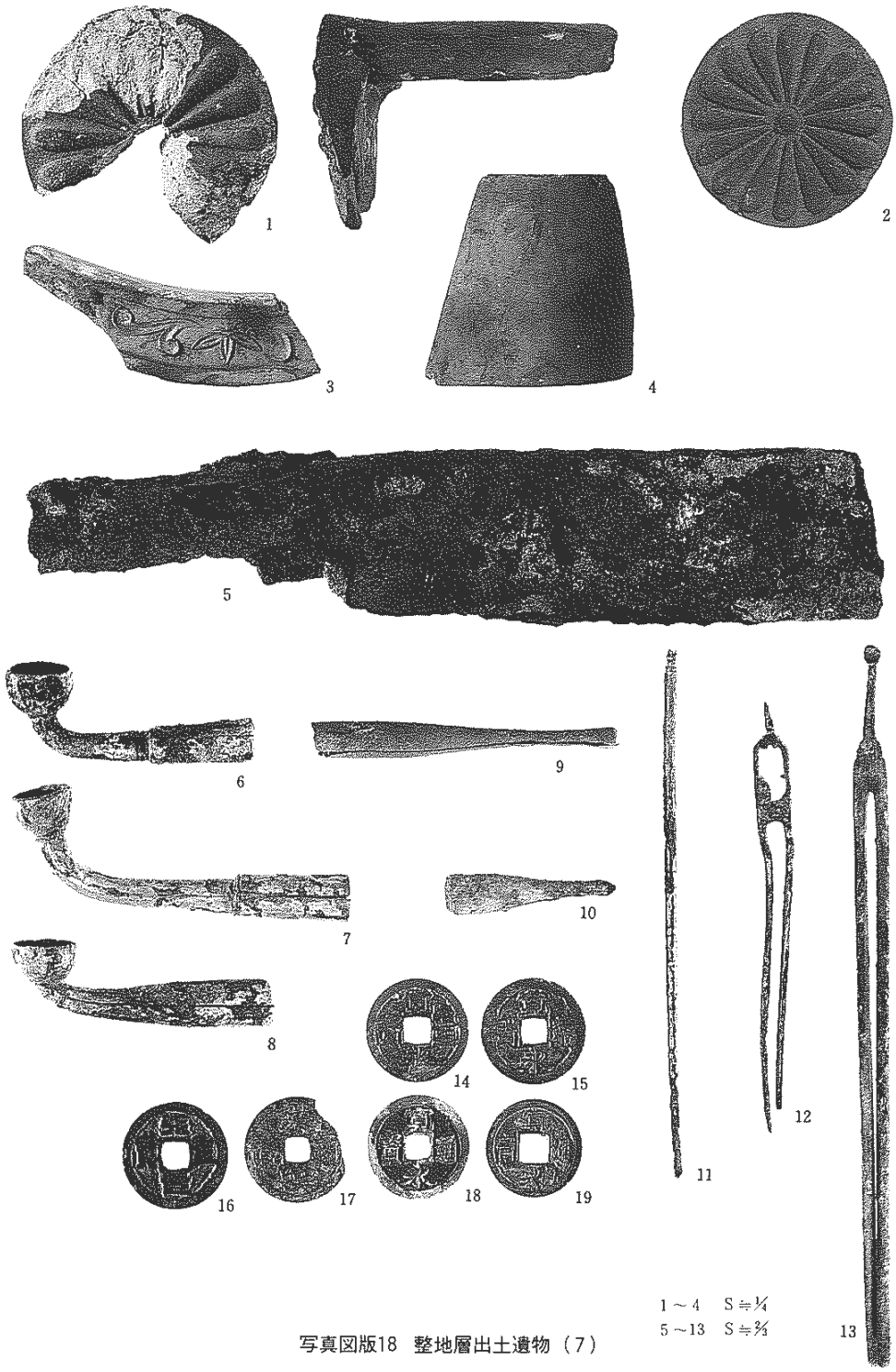


写真図版16　整地層出土遺物（5）　　S≒⅓



11・14・15　S≒⅔
18　S≒¼
その他　S≒⅓
18はＳＸ52石列に転用

写真図版17　整地層出土遺物（６）SX52はSX52石列



1～4　S≒1/4
5～13　S≒2/3

写真図版18　整地層出土遺物（7）